

い。彼の無頓着は本もので、無理にこさへたものではなかつた。勿論、これは折に觸れてのことに過ぎず、ぼんやりした神経がいら／＼した時だけの話だつたが、彼の虚榮心は曾てそれを動かして居た題目から段々離れ、彼をしよつ中惱まして居た或る問題に集中するやうに成つた。

「此奴つあ、天上の何ものか、俺の行狀の改まるのを願つて、俺にこれ等のいま／＼しい思ひ出や、後悔の涙」を送つて居るといつたところだな！」と、彼は時々嘲弄的に考へるやうに成つた（彼は自分のことを考へると、いつも凡んど嘲笑的に成り出すのだつた。）「そりやあそれでもいゝが、何の役にも立ちやあしない！ 空砲の射撃に過ぎない！ 俺はしかと、火を見るよりも明かに、時々涙を流して後悔した、我と我身を責めることはあつても、中年に成り乍ら、愚かにも、ちつとだつてしつかりしたところがないといふことを承知して居るのに！ 若し假りに明日にでも、同じ様な誘惑が生じ、例へば、例の學校の教師の細君が俺から進物を取つたといふ噂を立てると、自分の爲めに成るといふやうな事があれば、俺は確かにそれをひろめるだらう。躊躇しはすまい——とここで、それは最初のよりもいけなしい思はしい事件に成るだらう。といふのは、二度目だ。初めてのこぢやないのだから。さうだ、若し俺がたつた今、あの小つぼけな公爵、奴は奴の御母さんの一人息子ではあつたが、十一年前に俺が鐵砲で片足なくしやつたあの野郎に又侮辱を受けるやうなことがあつたら、僕はすぐに奴に果し狀をつけて、撞木杖をつかなければならぬやうな目に又會はしてくれる。だから、つまりは空砲に過ぎない。涙や悔恨に何の意味もありはしない！ それに、自分を脱却する力が微塵も無いのに、過去を思ひ出したつて

何に成らう！」

そして、學校教師の細君に對する變事は繰り返されず、彼は誰にも撞木杖をつかせるやうな目に會はせはしなかつたけれど、若し又、同じ事實が生じたならば、きつと同じやうなことをするだらうと思ふと、彼は死ぬやうな思ひがした。（尤もこれは時々の話だ。事實、人間は、しよつ中思ひ出の爲めに苦んで居るといふやうなことがある筈のものではない。間々には、一息ついて、のう／＼することが出来る。

ウエリチャーニノフもさうだつた。間々には、何か面白いことをして暮さうとして居たが、而かもベテルスブルグの假住ひは一日々々と日が経つにつれて、益々面白くなく成つた。七月が近づいた。時々、万事を、訴訟も何もかも棄て、後に心を残さず、何處かへ行つてしまはう、突然、ひよいと一時の出来心で、クリミヤ半島へでも出掛けやうといふ決意の閃めきが彼を訪れた。だが、普通、一時間も経つと、彼はさういふ考がへを嘲笑した。「かういふ厭な考がへは、一度顔を出したが最後、又、俺に世間體といふものが微塵でもある限り、俺を南部へやらう／＼として、中絶しはしまし。だから、かういふ考へを捨てやうとしたつて仕方がないし、又實際、捨てる必要もない。

「それに何だつて逃げ出さうとするのだ。」と彼は元氣なく、思案を續けた。「こゝはほこりだらけで、息が詰まるやうだし、家の中は何もかもこた／＼して居る。俺がああ忙し／＼連中の間をぶらつき廻る法廷では、皆ながせか／＼と彼方へ行つたり、此方へ來たりして居るし、けちな苦勞がうよ／＼して

居る！町に残つて居る人々、朝から晩までそこらにちらついて居る顔には、まるで天眞爛漫に、露骨に、彼等の私慾、大した悪気もないづう／＼しさ、小つぽけな、臆病な、彼等の心、性質があらはれて居る——嘘なしに、こりやあ、ふさぎ勝ちな人間の極樂ぢやあないか！何もかもおつびらで、明瞭だ此方の夏の別荘や、外國の温泉場に行つて居る紳士連とは違つて、誰も、何事でも隠す必要を認めない——だから、露骨で、單純だといふそれだけでも、此方の方が好い！……俺は何處へも行かない！破裂したつて、此處に居る！」

第二章

帽子に喪章を捲いた紳士

七月三日のことだつた。むし暑くつてたまらなかつた。その日、ウエリチャーニノフは素敵に忙しかつた。朝中、歩いたり、馬車に乗つたりして、彼方此方へ行かなければならなかつたし、どうしても訪れなければならなかつた或る紳士——法律家兼相談役——を、その晩訪れるつもりで居た。彼はその紳士を、郊外の別荘で、だしぬけに捕へやうと思つて居た。六時にウエリチャーニノフは、やつとニエフスキ通り、「警察橋」附近の或る料理屋へ入つた。(佛薄西料理だつたが、料理は大したものではなかつ

た。)彼は行きつめた隅の小さなテーブルに腰掛けて、その日の正餐を注文した。

彼は普段、一留の正餐を食べて、その外に別に酒代を拂つたが、彼はこれを亂れた經濟狀態の犠牲、思慮ある行ひと思つて居た。彼はこんなものが果して食へるか知らんと思つたが、それにも拘らず、彼はいつもばん肩一つ残さず平らげた——そして、いつも、三日も食はなかつた時のやうな食欲で食べた。「どうも何だか少し病的だな。」と彼は自分の食欲が氣に成つて、獨りつぶやくことがあつた。だが今日は、ひどく不機嫌な顔して、例の小さいテーブルに席を取り、怒つた様子で、帽子を投げ捨て、テーブルに肘をついて、考へに沈んだ。

彼は非常に丁寧であり、又、いざといふ時には、何糞と、糞落ち着きに落ち着くことが出来たけれど、今日は、若し誰か彼のそばで食べて居るものが騒がしくしたり、彼に給仕して居る少年が、一言で用を分つてくれなかつたら、多分彼は普魯西貴族黨員のやうに呶鳴つて、一場の活劇を演じたことだらう。

ソツプが彼の前へ出た。彼はさじを取り上げたが、飲まぬ上に、さじを落して、テーブルから凡んど飛び上らむ許りに成つた。驚ろく可きことが俄かに彼に分り出した。どうしてか分らないが——その瞬間に、近頃、四五日間彼を惱まし抜き、何故か知らぬが彼に付き纏ひ、振り放さうとしても離れなかつた。憂鬱、一種特別な憂鬱の原因がにわかに分つた。今や彼は突然仔細が分り、明々白々に成つた。

「あの帽子のせいだ」と彼は感激したやうにつぶやいた。「萬事の原因は、あの嫌な喪章の紐のついた、あの憎つくい山高帽子に外ならない！」

彼はいろいろ思ひめぐらし始めた——考へれば考へる程、彼は氣むづかしく成り、「かの事件全體」が異常のことに思へて来た。

「しかし……だけど、變事といふ譯のものでもない。」と彼は、自分の考へを信用せずに、反對した。「何だかあれに、少しでも變つたやうなことでもあるやうな考へだ！」

仔細はかうなのだ。約二週間以前（實際彼は憶えがなかつたが、凡そ二週間だと思つて居た。）彼は何處か町中・ボドヤチエスカヤ町と、メシチャンスカヤ町の角のそばで、帽子に喪章の紐を附けて居る紳士に初めてあつた。その紳士は別に人と變つたところも無く、足早に過ぎ去つたが、何だか厭にじつとウエリチャー・ニノフを眺めたが、何故かすぐにひどく彼の注意を牽いた。彼はウエリチャー・ニノフには見たことがあるやうに思へた。確かに彼はその顔に、何時か、何處かで會つたことがあるやうに思へた。「だが、俺は生れてから、幾千といふ顔を見たことがあるに違ひないから、それ等をみんな憶えて居ることは出来やしない！」

二十歩と行かない内に、既に彼は、最初受けた印象に拘らず、その遭遇を忘れてしまつたやうだつた。だが、その印象は一日中續いた——そして、それは何だか變だつた。一種特別な、譯の分らない苦惱と成つた。二週間後の今に成つて、彼はそれ等をはつきり思ひ出した。彼は又、その時彼に了解出来なかつたこと——即ち、彼の苦惱が何に起因するかといふことも思ひ出した。彼はその時それがまるで了解出来なかつたので、その晩一晩、自分、不機嫌を、その日の朝の遭遇——結びつけて考へて見ること

すらしなかつた。

だがその紳士はすぐに又、ウエリチャー・ニノフの心に甦つた。翌る日彼は又ウエリチャー・ニノフと、ニエフスキー通りで會つて、又彼を何だか變な顔して眺めた。ウエリチャー・ニノフは彼を呪ひ言を口にして遣りすごしたが、すぐに、何だつて呪つたりなんぞしたのだらうと思つた。尤とも、すぐに譯の分らぬ、當途ない嫌惡を起す顔といふものがあるものだが。

「さうだ。奴には確かに何處かで會つたことがある。」と、彼は會合はしてから一時間も立つてから、いろいろ思ひ廻らしてつぶやいた。そして彼はそれから一晩中、ずつと、非常に不機嫌だつた。彼は寢てからも悪い夢を見たが、その晩、一度ならずかの喪中の紳士のことを思ひ出し乍ら、この俄かにがっかりし出したもとは、實はその紳士に外ならぬといふことにはまるで思ひも及ばなかつた！ その時には彼は、こんな「下らないもの」がこんないつ迄も自分の注意を占領することが出来ると思はうものなら、むら／＼つとさへ成るのだつた。で、若し、自分の動搖を彼のせいだとも思はうものなら、確かにそれを羞しいことに思つたらう。二日後に又、彼はニエフスキーの蒸汽船から出て来た群衆の中で會つた。この三度目の時には、ウエリチャー・ニノフは、帽子に喪章をつけた紳士が彼だといふことが分つて、彼の方へ突進して来たが、人込の中へ捲き込まれてしまつたといふことをはつきり誓言することが出来た。ウエリチャー・ニノフは、彼があつかましくも「ウエリチャー・ニノフの方へ手を差し出して、握手を求めさへした。」と思つた。事に依つたら、大聲を揚げて、ウエリチャー・ニノフの名を呼びさへしたか

も知れなかつた。だが、それはウエリチャーニフにはつきりとは聞えなかつた。だが……「だが、あの野郎は一體誰だらう。若し奴が實際、俺を知つて居て、そんなに俺のそばへ來たいのなら、何だつて、そばへ來ないのだ」と、彼は辻馬車に乗つて、スモルヌイ僧院指して行き乍ら、むかつ腹を立て、考へた。三十分後には彼は彼の辯護士と猛烈に議論して居たが、日が暮れてからすつと、彼は又、此上なく厭な、實に奇妙な、ひどい沈鬱に襲はれて苦んだ。「俺は肝臓病に(譯者註、肝臓に故障があると、不消化頭痛等が起るといふことを。世間にていふ)成るのか知らん」と、彼は鏡に自分の顔を寫して見て、心配した。これが三度目のめぐりあひだつた。その後五日間といふもの、彼は「誰にも」出會さず、例の野郎は、影も形も見えなかつた。それで居て、帽子に喪章のついた紳士のことはしよつ中彼の心を離れなかつた。ウエリチャーニフは「俺はどうしたのだらう——奴の御蔭で變に成つたのだらうか。それともどうしたのだらう。うむ……奴もペテルスブルグにいろ／＼用事があるに違ひない——だが、誰の爲めに喪章をつけて居るのだらう。奴には俺が分つたらしいが、俺には奴は分らないや。それに、何だつて彼奴等は喪章の紐をつけるのだらう。何だか、奴には似合はないや……もつとそばへ倚つて見たら、誰か分るだらう……。」とわれ知らず不思議に思つて考へて居るのに氣がついて驚いた。

つきり知つて居るのだがそれで居て、じたばたしてもいつかな思ひ出すことが出來ない。さういふやうなものだつた。

「すつと前の事だつたつて……何處だつたつてか……さうだ……さうだ……だがあん畜生！何があつたにしまつて、此方の知つたことぢやない。」と彼は忽ちかつと成つて叫んだ。「あんな下らない奴の爲めに、じたばたするには當らない……。」

彼は恐ろしく腹を立つたが、日が暮れてから、自分がその朝腹を立つた、而かも「恐しく」腹を立つたことを突然思ひ出して、ひどく不愉快に成つた。彼は人に見られては困ることをやつて居るところを誰かに見つけられたやうな氣がした。彼はうろ／＼した。

「それぢや、俺が……突然……只、何か思ひ出した許りでそんなに怒るにいつちやあ、譯があるに違ひない……。」彼は考へることを途中で打ち切つた。

そしてその翌る日には愈々むかつ腹が立つたが、今度は、彼はそれには理由があると思つた。而かも、彼がさう思ふのも全たく道理だつた。「前代未聞の無禮だつた。」と彼は思つた。それは第四回目の遭遇だつた。帽子に喪章をつけた紳士は突然、地中からでも跳び出したかのやうに、又姿を現はした。ウエリチャーニフは、前にいつた、どうしても會はなければならぬ相談役を丁度、町中で見つけたところだつたのだが、ウエリチャーニフは今も彼を追つかけ、彼の夏間の別荘へだしぬけに出掛けて、つかまへやうと思つて居るのだつた。といふのは、例の一件、爲めに彼は會ふことが非常に必要だつたが、

凡んど彼が知らなかつた。その紳士はその時も彼を避け、姿をくらまさうとして居たらしく、彼に出會はしたのがひどく厭であるらしかつた。——だが、その時とう／＼彼に出會はせたことを悦んで、ウエリチャーニノフは彼の顔をちらりと覗き込んで、一心に成つて、このずい親爺を、或る事柄に就いての論議に引きすり込み乎ら、せか／＼と彼に並んで歩いた。かうして論議して居る内に、ウエリチャーニノフが長い間探つて居た事實を、奴がうっかり洩らすかも知れないと思つたのだが、その悪賢い老人にも了見があつて、笑つたり、黙つたりして誤魔化して許り居た——ウエリチャーニノフが向ふ側の人道に、帽子に裏章をつけた紳士を見つけたのは、丁度この夢中に成り切つて居た時のことだつた。彼は二人を見て立つて居た——彼はじつと彼等を注目して居たらしかつた。そして彼等をせゝら笑つて居る様子だつた。

ウエリチャーニノフは相談役と彼の行つた先で別れ、彼に對する失敗を、あの「ずう／＼しい奴郎が突然現はれたせいにして、かつと成つて「しまつた！」と叫んだ。「しまつた！ 奴は俺のすることを探つて居るのか知らん。奴は俺をつけて居るらしい。大方誰かに雇はれて、そして……そして……確かに奴は俺をせゝら笑つて居やがつたのだ！ 是非とも奴をぶなぐつてやる……。ステツキを持つて來なかつたのは残念だ！ 一本買はう！ 放つちやあ置かない。奴は誰だらう。きつと奴を突とめてやる。」作者がさきに述べたる如く、ウエリチャーニノフが料理屋で、しんから激動し、少し参り氣味でもあつたのは、この第四回の會合後三日目のことだつた。残念でも彼はそれを意識せずには居られなかつ

た。「彼はとう／＼、萬事を綜合して考へて見て、この二週間といふものはひき續いた、自分の沈鬱、この一種特別な意氣沮喪、並びに動搖はすべて外ではない、この喪中の紳士、「あんなもの、數にも入らぬ奴」のせいなのではないか知らんと思はずには居られなくなつた。

「俺は憂鬱症にかゝつて居るのかも知れない。」とウエリチャーニノフは考へた。「それで、針程のことをすぐに棒程にしてしまふのだ。だが、これ等が或ひは單に想像に過ぎなくつても、それが俺の氣休めに成るか知らん！ あんな奴等の爲めに、かうして、氣も顛倒するやうな思ひをさせられやうといふのは、……それは……それは……。」

ウエリチャーニノフをひどく動搖させたその日の（第五回目的）遭遇で、棒程のこと、思はれて居たものが、確かに針程位のことだといふことが分つた。例の紳士は以前の如く、彼の側を走つて通つたが、今度はウエリチャーニノフをじろ／＼見るのでもなく、前のやうに、はゝん、お前だなどいふ顔もしなかつた。その反對に、下を向いて、切に、氣がつかれないことを願つて居る様子だつた。

ウエリチャーニノフは振り返つて、聲を限りに叫んだ——

「おい！ 裏章をつけて居る方！ そら逃げやうとして居る！ 待つて下さい。あなたはどなたでなす？」

そんなことをいつて尋ねたり、（殊に大聲を擧げるなどいふことは）實に馬鹿々々しい話だつた。だがウエリチャーニノフはそれをいつてしまつてから初めてそのことに氣がついた。紳士は叫び聲の方へ

振り向いて、一分間許りうろたへて立ち止り、ほく笑んで、すんでのことに、何かするか、何かいはうとする様子で、一分間許りといふもの、明かに躊躇逡巡して居る様子だったが、彼は俄かに向ふを向いて、後をも見ずに走り去つた。ウエリチャーニノフは驚いて後を見送つた。

「大きに此方から向ふに仕掛けて居るので、向ふからは此方へ仕掛けて居るのでなかつたらどうだ。」と彼は考へた。「そしていろ／＼考へて見ると、どうもさうらしい。」

彼は食事を済せると、相談役に會ひに、急いで夏間の別荘へ出掛けた。會へなかつた。「先生は今日は未だ歸つていらつしやいません。夕分夜の三時か四時頃に成らなければ御歸りに成りますまい。町へ行つて、或る家の誕生日の會へ行つていらつしやいますから」とのことだつた。このことは實にいま／＼しく思はれたので、かつと成るとウエリチャーニノフは自分もその誕生日の會に出掛けることにきめて、少し出掛けても見たが、道で、中々遠い道程だと思ふと、辻馬車を返して、「大劇場」附近の自分の借間までで帰つた。彼は運動不足の氣がした。彼は何とかして、普段の不眠症を追つ拂つて、興奮した神経を和ける爲めに、その夜は熟睡しなければならなかつた。そして、眠る爲めには、何とかして疲労しなければならなかつた。そして、長く歩いたので、十時半を廻つてからやつと家に着き、確かに彼はひどく疲れて居た。

彼は彼が過ぐる三月に借りたその借り間をひどく非難し、「一時そこに陣取つて居る」だけの話で、あの「厭な訴訟」の爲めにベテルスブルグに坐礁して居るのだといつて自分の心を落ちつけて、その借り

間をひどく悪くいつて居たけれども——その借り間は、彼が思つて居る程、悪くも、不適宜でも斷じて無かつた。取つときの入口のところは確かに少し暗く、汚なかつたが、二階にある借り間そのものは暗い廊下で二つに別れて、一つは町に、今一つは中庭に臨んで居る、二つの大きい、高い、明るい部屋で出来て居た。窓が中庭に臨んで居る部屋に接して小さい書齋があつたが、それはもと／＼寢室向きに拵へたものだつたが、ウエリチャーニノフはそれを本々書類で散らかして置いた。彼は大きい部屋の方の一つ、町に臨んだ部屋で眠つた。彼はソファアの上にねぐらを拵へさせた。家具は古物だつたが、相應のものだつた。その外に彼は昔隆盛だつた頃の遺物で、二三の貴重な品物も持つて居た——唐金ものや瀬戸もの、大きな、本もの、のブラ敷物。二つのいゝ繪も取つて置いてあつたが、何もかも確かに汚なくつて、ほこりさへかゝつて居た。彼の召使のペラゲアが、保養にノヴゴロツドへ歸つて、彼一人に成つてから、何もかもすつかりだらしくしてあつた。ペラゲアはひどく氣に入つて居たが、獨身者で、紳士の體裁を維持する氣が抜けぬ俗界の男が、たつた一人の下女を雇つて居るのは變で、それを思ふとウエリチャーニノフは凡んど赤面せむ許りに成つた。その娘は春彼がその借り間を借りやうとして居た時に、外國へ出掛けやうとして居た、彼の知り合ひの家から來たので、彼女は其の借り間をきつちりしてくれた。だが、彼女が行つた時に、彼は外の女を雇ふ氣には成れなかつた。短かい間のことだから、下男を雇ふ程の事もなかつた。それに彼は下男は好きで無かつた。それで、門番の細君の姉妹が毎朝掃除に來ること、彼が出かける時には鍵は門番小屋に置いて行くことにした。その女と來たら、賃銀を受

取るだけで、凡そ何にもして呉れなかつた。それに彼は奴こそ泥棒もするのぢやないかと思つた。だが彼は勝手にしろと思つて萬事を意に介せず、實際借り間に全然一人に成つたことを喜んだ。だが何事も限度といふものがある。心が亂れて居る時等には、この「不潔」が彼の神経には全たく耐へられなかつた。そして、家へ歸ると、凡んどいつも厭な氣がして、部屋へ入つた。

だが今日は着物を脱ぐとすぐに、寢床に身を投げて、いら／＼し乍ら、何にも思はずに、何事があらうとも、「たつた今」眠つてしまはうと心をきめた。すると、不思議なことには、頭が枕につくかつかない内にぐつすり寢込んでしまつた。この凡んど一月許りといふものこんなことは彼にはないことだつた。

彼は三時間許り眠つたが、彼の眠りは平かならず、熱のある時に見るやうな變な夢を見た。彼が見た夢といふのは、彼が何か悪いことをして、それを隠して居たのだつたが、あとから／＼と彼のところへやつて来る連中にそれを責められるといふ筋だつた。澤山の人間が集つたが、まだすん／＼やつて来るので、戸は閉めずに開いた儘に成つて居た。だが彼の興味はすつかり、會つては彼の親友だつたが、今は此世の人でない筈だが、どういふものか突然彼に會ひに來た變な男に集中した。ひどく氣に成つたのは、ウエリチャーニノフがその男を知らず、その名を忘れてしまつて、それを思ひ出すことが出来ないことだつた。彼が知つて居ること、いへば、彼はその男が會ては非常に好きだつたといふことだけだつた。そこへ來て居る外の連中は、この男から、ウエリチャーニノフが有罪か、無罪かをきめる決定的な

語を期待して居る様子だつた。皆なはしびれを切らして待つて居た。だが彼は身動きもせず、テーブルに腰打ち掛けて、默然として、口を利かうとはしなかつた。騒ぎは暫しの間も止まず、皆なは一層激して來た。どうしても口を利かないので、突然ウエリチャーニノフはかつと成つてその男を打つた上、打つたら一種不思議の快樂が感じられた。彼は自分のしたことが、恐しくつて、悲しくつて胸がどき／＼したが、その竦動の内にも快樂があつた。すつかり腹を立つて彼は二度、三度と彼を打つたが、狂氣の絶頂に達したが、猶その内に強い味の味は、れる怒りと恐怖に酔ひしれて、彼は幾つ打つたか數も忘れて、ぼか／＼彼をなぐり續けた、彼はこいつをめちやくちやにしてしまひ度かつた。突然何事か持ち上つた。皆なは恐ろしい悲鳴を擧げて、何事かを待ち設けて居る如くに戸の方を振り向いたが、その時、ベルが鳴つた。三度鳴つたが、猛烈に鳴らしたので、利かなくなつてしまつた。ウエリチャーニノフは眼を覺まして、不圖正氣に歸つた。彼はひよいと寢床から飛び起きて、戸のところへ驅けつけた。彼はベルが鳴つたのは夢ではなく、事實かよその時ベルを鳴らしたのだとてつきり思ひ込んだ。「あんなはつきりした、あんな確實な、明瞭な音が夢に過ぎないとしたら奇怪な話だ！」

だが驚いたことには、ベルの音も夢だといふことが分つた。彼は戸を開け、階段の中休み場へ出て、階段を覗いても見たが——そこには猫の仔一疋居なかつた。ベルはじつと懸つて居た。驚いたが、ほつとして、彼は部屋へ歸つた。蠟燭を點して、彼は、戸を閉めては置いたが、錠も掛けず、棧も下して置かなかつたことを思ひ出した。彼はこれ迄にも、時々餘り大事なことも思はなかつたので、家へ歸つ

て来て、用心に戸に錠を掛けることを忘れたことがあつた。

ペラゲアはよくそのことを彼に注意した。彼は廊下へ戻つて、戸を閉め、それをも一度開いて、階段の中休み場を注意したが、面倒くさいので錠はかけずに戸を内から、鉤で留めたゞけにした。時計が二時半を打つたから、彼は三時間眠つたに違ひなかつた。

彼の見た夢で彼はひどく心が亂れて、すぐに又床に歸り度くはなかつた。彼は三十分も部屋を歩き廻らう、——「葉巻を呑む間」歩き廻らうかと思つた。急いで着物を着て、彼は窓のところへ行つて、厚い、毛織の窓掛と、その後ろの錠戸を上げた。町は既にしら／＼として居た。ペテルスブルグの明るく夏之夜はたえず彼の神経にたゞつて、近頃彼の不眠症を益々烈しくしたので、二週間以前に、すつかり擴げると、全然光を遮つてしまふ厚い毛織の窓掛けを出したのは、特にこの爲めだつた。光を入れ、テーブルの上に點して置いた蝋燭のことは忘れ、依然として一種、氣持の悪い、重苦しい感じに壓迫されて、部屋をあちこち歩き出した。夢の印象は依然として彼の上のしか／＼つて居た。俺はあの男に手を振り擧げて、彼を打つたのだなといふせつない思ひで依然として續いた。

「あんな男は事實存在しないし、これ迄にも居たのではない皆な夢に過ぎないのだ。何だつて俺はそんなことでよく／＼思つて居るのだらう。」

彼は激昂して、彼の苦勞はすべてこれに集中して居るといつたやうに、自分は確かに病氣に——「病人」に成り出したと考へ始めた。

自分は段々年を取つて、弱く成つて行くのだと思ふと、いつも彼は苦しかつた。そして、氣分の悪い時には、自分の年や、精力の衰へて行くことを大袈裟に考へて、自分から好きで腹を立つのだつた。

「老年か。」と彼はつぶやいた。「俺は段々本式の年寄りに成つて、記憶はなくなるし、幻は見るし、夢を見るし、夢でベルが變てこな音を立てるし……畜生、俺は経験で知つてるが、俺は熱があるといつてもかういふ夢を見る……例の喪章の紳士の一件も夢見たいなものに違ひないや。俺が昨夜考へたことは確かに間違つて居ない。此方こそ向ふを惱まして居るので、向ふが此方を惱まして居るのではない。俺は奴のことで、勝手に話を拵へて置いて、その話におつかながつて、テーブルの下に隠れて居るのだ。それに何だつて俺は奴のことを野郎といふのだらう。あいつ至極上品な人間かも知れない。別段、見苦しむといふこともないが、あいつの顔は確かに愛嬌のある顔ではないが、なりは當り前のなりをして居る。只眼が何だか變だ……。おや、又變なことを考へて居る！ 又奴のことを考へて居る！ 一體、あいつの眼つきが俺に何の關係があるといふのだ。そんなことが俺の生活の重大事か……」

彼の心に湧き上つて来るいろんな考への中で、或る一つの考へが苦に成つた。彼は突然、帽子に喪章をつけたこの紳士は、曾ては彼と懇意にして居た知己で、ウエリチャーニノフに會つた時、彼はウエリチャーニノフの過去の何か或る大きな秘密を知つて居るのだが、ウエリチャーニノフが今、こんな肩身の狭い様子で居るのを見て、冷笑したのに違ひないと思つたのだ。彼は窓を開けて、夜の空氣を一口吸はうと思つて、機械的に窓のところへ行つた。そしたら——そしたら、彼は突然體中の身の毛がよだつ

た。信じ難き、話にも聞いたことがないやうな奇怪事が、突然彼の眼前で、起つて居るやうな気がした。

彼は未だ窓を開けない内に、急いで窓の引つ込んだところにこつそり入つて、身を隠した。向ふ側の人なき人道上に、彼は突然、家と真すぐのところに、帽子に裏章をつけた男を見た。紳士は彼の窓の方を眺めて、人道上に立つて居たが、彼には気がつかず、家は何事か考へて居るやうな様子で、せんさくするやうに眺めて居た。彼はじつと考へ込んで、決斷がつかない様子で、手を舉げて、指を額に當てたやうだつた。とう／＼彼は意を決した。さつとあたりに眼を配つてから、こつそり抜き足差し足で町を横切り出した。さうだ、彼は（夏間は時に依ると、三時迄門が外してある）小門から、門口を襲つた。

「俺のところへやつて来るのだな」とウエリチャーニノフは思った。そして、彼も亦爪先で歩つて、そ／＼と戸のところへ駆けつけ、不安で黙つて、しびれたやうに成つてその前に立ち、さつき掛けの戸の鉤に、ふるふる右の手をそつと當てがつて、耳を澄まして、階段の足音を待つて居た。

彼は胸がひどく波打つたので、かの見知らぬ人が抜き足差し足で忍び寄るのを聞き洩しはしないかと心配した。彼は何が何やら譯が分らなかつたが、万事を普段の十倍もの強さで感じた。夢が何時の間にか現實に變つたやうな気がした。ウエリチャーニノフは大膽な性質だつた。彼は誰も自分を見て居るものではなく、自分で感心するだけであつても、危険に面して、好んで大膽さを發揮することもあつた。然

し今日は大膽さの外に、或るものが加はつた。彼は最近に、憂鬱症と神経衰弱にかゝつて、すつかり變つた。彼や昔の彼では無かつた。薄氣味悪い、聲を立てない笑ひが彼から洩れた。閉まつた戸の此方から彼はかの見知らぬ人の動作を一々憶斷した。

「おつと！ そらやつて来る、やつて来た、あたりを見廻して居るな。下の方へ聞き耳を立て、やがる、息をこらして居る、忍び寄つて来やがるぞ……おつと！ ハンドルを掴まへたぞ、引つ張つてやがる、調べてやがるな！ 錠が掛けてないと思つてるのだ！ ぢや奴、俺が時々錠を掛けることを忘れることを知つて居るのだな！ 又、ハンドルを引つ張つてやがる、鉤が外れると思つて居るのか知らん。これ別れるのは残念だ！ かうして奴を立ち去らせてしまふのも残念ぢやないか！」

そして實際、彼が想像した通りのことが、一つ／＼あつたに違ひなかつた。實際、誰か戸の向つ側に立つて、靜かに、音を立てぬやうに錠を調べたり、ハンドルを引つ張つたりして居たが——「勿論、さうするのは用事があつてのことだつた。」だがウエリチャーニノフは既に片をつける決心で、一種の歡喜を以ていざといふ時を待ち構へて居たのであつた。彼は鉤を外し、突然戸を開いて、「この御化」に面と面と向ひ合つてやり度くて仕方が無かつた。「あなたこゝで何をやつていらつしやるのです。」

そしてその通りのことをした。時を見計つて彼は俄かに鉤を上げ、戸を推し開いて——帽子に裏章をつけて居る紳士にすんでのことにぶつからむ許りに成つた。

第三章

パーウエル・パーウロウイツチ・トルソツキイ

紳士はその場に固定して、黙つて立つて居た。二人は入口に向ひ合つて立ち、じつと互ひに顔を見詰めた。暫らくして突然——ウエリチャーニノフは彼の訪問者が誰か分つた！

それと同時に訪問者もウエリチャーニノフが彼が誰かすつかり分つたといふことが分つたらしかつた。彼の眼には、それを現はす閃めきが現はれた。見て居る内に彼の顔に優しいほゝえみが溢れた。

「アレキセイ・イウワアノウイツチさんでしたね。」と彼はこの場に不調和で可笑しい、感慨の籠つた聲で、御経でも讀むやうに單調にいつた。

「パーウエル・パーウロウイツチ・トルソツキイさんでしたか知ら。」とウエリチャーニノフは當惑した風でいつた。

「九年前、T——で御馴染でしたが、御忘れかも知れませんが——可成り親しくして居りましたが。」

えゝ……さうです。ですけれど今はもう三時です。それなのにあなたはさつき十分間も戸に錠が下りてるかどうか調べて居ましたね。」

「三時ですつて！」と訪問者は時計を出し、實際がつかりし、驚いた様子で叫んだ。「おや、成る程、三時か！許して下さい。来る前に考へなければならなかつたのです。全く面目ない話で。又一日二日の内に拾つて御話しますが、今日は……」

「いや！御話があるなら、今すぐして下さいませんか！」とウエリチャーニノフは口を入れた。「どうか中へ入つて下さい——あなたもきつと部屋へ入るつもりでいらしつたので、この夜更けに只鏡前を調べにいらしつたのではないでせう。」

彼は興奮し、同時にどきまぎして居たので、何が何やら分らぬ氣がした。何だか少し羞しい氣さへした——不思議なことでも、危険なことでもないといふことが分つたから、万事は庇見たいなことでは現はれたのは、馬鹿々々しい、パーウエル・パーウロウイツチといふ人物だけだつた。それで居て、彼はまるで何でもないことだとは思はなかつた。彼は何か知らんが、蟲の知らせがして、氣に成つた。訪問者を眩掛椅子に腰掛けさせ、彼もせか／＼と一ヤードと隔つて居ない寢床に腰掛け、手をひざに置いて前にかゞみ、訪問者が口を利くのをいら／＼して待つた。彼は彼を熟々見て、思ひ出した。だが、變なことには、その男は黙つて居た。まるで黙然として、自分が「義理にも」すぐに口を利かなければならないといふことも分らない様子だつた。それ所か、彼も、自分の方から待ち設けて居るといつた顔つきでウエリチャーニノフをしげ／＼眺めた。全たく彼は臆病で、最初、わなに掛つた鼠のやうに困つて居たのかも知れなかつたが、ウエリチャーニノフは癩癩を起してしまつた。

「それは何の真似です。」とウエリチャーニフは叫んだ。「あなたは夢や幻ではないでせう。眞逆、こゝへ死人の真似をしにいらしたのではないでせう。はつきりしたことをいつて下さい！」

訪問者はもぢ／＼して、ほ／＼えんで、用心深く語り出した――

「どうもあなたを一番驚かせたのは、こんな時刻に、變な盛梅式にやつて来たことらしいですね……實際、昔のこと、御別れたことを思ひ廻すと――本當に不思議な氣がして……尤も、實際、私は御訪ねするつもりではなかつたので、ほんの偶然に……」

「何が偶然です。僕は窓から、あなたが抜き足、差し足で、町を突つ切つて来るのを見て居ましたよ！」

「おや、御覽になつたのですか！ それぢや、或ひはそれ等のことは私よりもあなたの方がよく知つていらつしやるかも知れません！ だが何だか、御氣に障るやうなこと許りいつて居ますね……私は三週間前に自分の用事で此方へ来たのですよ……私は御承知の通り、パーウエル・パーウロイツ・トルソーツキイで御座います。あなたも御分り下さいましたね。私は外の州の、外の部門のすつと上の職に轉任したいと思つて此方へ来て居るのです……だが、これは外の話で、だとも……御話し申し度いことは、私がこの三週間といふもの此方にぶらついて居て、自分の用事――といふのは轉任の一件も何だかわざと自分からのびのびにして居るので、實際、それが片がついても、片がついたといふことにも氣がつかないで、今、やうな氣持ちで、すつとこのペテルスブルグに居るだらうと思ふのですよ。私は何だ

か自分の大事なものをなくしたやうな、又何だかそれを見なくしたことを喜んで居るやうな――かういふ氣持ちでうろついて居るのです！」

「どんな氣持です。」とウエリチャーニフは不興の色を浮べて訊ねた。

訪問者は彼に向つて顔を擧げ、帽子を取り上げて、その喪章を指した。

「見て下さい。かういふ氣持ちがして居るのです。」

ウエリチャーニフはぼんやりして、先づ喪章を、それから訪問者の顔をつく／＼眺めた。突然さつと頬つべたが赤く成つて、彼は恐ろしく激動した。

「まさかナターリヤ・ワシーリエヅナさんではないでせうね。」

「いや、ナターリヤ・ワシーリエヅナです！ この三月に肺病で、急病同前に、二三ヶ月煩らつてから！ それで御覽の通りの一人ぼつちに成つたのです！」

かういひ乍ら訪問者は深く感動して、兩手を兩わきに突き出し、喪章のある帽子は左手に動いて居たが、低く頭を下げ、少なくとも十秒間は彼のはげ頭が現はれて居た。

その様子、その所件がウエリチャーニフの心を引立つたやうに思はれた。皮肉な、人の氣に障るやうな微笑が彼の口元に浮んだが――それはまた／＼く間に消えた。彼がすつと前に知つて居た、そしてすつと前に忘れてしまつたこの女の死んだ知らせは彼に激動を興へた。そしてその激動したことにすつかり驚いた。

「本當ですか。」——彼は心に浮んだことをそのままにすぐにつぶやいた。「何故すぐに報せに来て下さいませんでした。」

「御同情下さつてありがたう。忝じけなく思ひます。あんなに長く……」

「何です。」

「あんなに長年御會ひしなかつた後なものに、私の不幸、私の身にも御同情下さつて、何とも忝じけなく存じます。申し上げ度かつたのは只それだけのことです。友達を疑ふどころではありません。此方にも、例へばステパン・ミハイロウイツチ・バガウトフといったやうな親友も居ます。だが御存知の通りあなたとの御懇意——といふよりも、忝じけない御附合ひは九年前に止んでしまつて、あなたは私達の方へいらしたことは一度もなく、手紙の遣り取りも無かつたが……」

訪問者は樂に合せるやうに、唄ふやうな調子でしゃべつて居たが、勿論、いつも、何事にも氣は配つて居たが、しゃべつて居る間はすつと床を見て居た。だが今やウエリチャーニノフは落ち着けた。

段々強く成り行く、不思議な印象を受け乍ら、ウエリチャーニノフはパーウエル・パウロウイツチのいふことを聞き、彼をじつと見て居たが、彼の語が俄かに切れると、此上無く可笑しい、意外なことが、突然彼の心に閃めいた。

「だがどうして今迄あなたが分らなかつたのでせう。」と、彼は一層元氣に成り乍ら叫んだ。「町中で五遍も御會ひしたのに！」

「さう／＼。私も憶えて居ます。あなたはいつも私は行く前をつ切つて居ましたよ——二度か、それも三度だつたかも知れません……」

「いや、あなたがしよつ中私の方へやつて來たので、私があなたの方へ行つたのではないでせう。」

ウエリチャーニノフは立ち上つて、突然、不意に笑ひ出した。パーウエル・パウロウイツチは黙つて、じつと彼を見て居たが、すぐに語を續けた——

「私が御分りに成らなかつたのも無理はありませんよ。それに、私は瘡瘡を病んで、顔にそのあとがついたのですもの。」

「瘡瘡ですつて？ 成る程、道で會つた時にも氣が附きましたよ！ だがどうして——」

「そんな眼に會やあがつたのだとおつしやるのですか。どんなことがあるか知れないものですよ。分らないものですよ。こんな憂き目を見ることもありますからね。」

「たが又恐しく可笑しな話ですね。だが、話を續けて下さい！」

「あなたに御會ひしましたが——」

「待つて下さい！ 何だつて、今さつき、「會やあがつた」等とおつしやつたのです。僕はもつとすつと丁寧な語を使はうと思つたのですよ。で、それから！」

何故か知ら、彼は段々上機嫌に成つて來た。激動は外の感情の爲めに、すつかり消失してしまつた。彼は足早に部屋を歩き廻つた。

「あなたにも出會はしましたが、ペテルスブルグへ出掛ける時には、あなたを探し出すつもりで來ましたが、さつきにも申した通り、私は三月以來すつと……ひどく意氣はくじけ……心は亂れて……」

「成る程、三月以來心は亂れて……一寸待つて下さい。あなた烟草を吸ひませんでしたか。」

「御承知の通り、昔、ナターリヤ・ワシーリエヅナが生きて居た頃は……」

「成る程、成る程、だが三月以來は？」

「卷烟草の一本位ならば。」

「こゝにありますよ。お點けなさい——で？ 話して下さい、早く——」

そして、葉巻に火を點け乍ら、ウエリチャー・ニノフは急いで又、寢床に身を落ち着けた。

パーウエル・パーウロウイツチは暫らく黙つて居た。

「だがあなたもひどく興奮して居ますね。御體は御丈夫ですか。」

「まるで駄目です！」ウエリチャー・ニノフは突然かつと成つた。「話して下さい！」

訪問者の方は相手の激動を眺め乍ら、寧ろ愉快で、餘計落ち着いて來た様子だつた。

「別段御話することもありませんが」と彼は又語り始めた。「先づ第一に、破滅した人間——單に破滅した許りでなく、いはゞ根本的に破滅し切つた人間を想像して下さい。二十年の結婚生活後に、生活がすつかり變り、これといふあても無く、荒野をさまよふ氣持ちで、ぼんやりして了つて、そのぼんやりした氣持ちに或る魅力を感じて町中をさまよつて居る男を想像して下さい。知り合ひに出會しても、眞實

の朋友に出會はしても、さういふぼんやりした時には、近づくのを避けて、故意と道をそらすことがあつるのは當り前の話ですよ。又かういふ時もある。——いろんなことが胸に浮んで來て、過ぎ去つて又還らぬかの近き過去を目撃し、それに關係のある人に切に會ひ度く成り、胸は烈しく波打つて、晝は勿論夜でも、たとへわざ／＼夜中の四時頃に、起さなければならなくとも、思ひ切つて友達のところへ出掛け、その懷に抱かれ度いと思ふこともありませよ……。私の間違へたのは時間だけで、友情を期待したことは間違ひではありませんでした。何故なら、もう過ぎる程、あなたから友情を報ひられて居ますもの。それに時間も、私は本當に未だ十二時だと思つたのですよ。今もそんな氣がして居ますが、私達は自分の悲しみの盃を、酔つばらふ迄飲み乾すものですね。實際心が挫けるのは悲しみの爲めではなくつて、慣れない境遇に入つたからで……」

「いやにかう變な話方をしますね。」とウエリチャー・ニノフは又ひどく悪く成り、ふさぎ込んでいつた。

「えゝ、如何も變な話方で……」

「冗談……いつて居るのぢやありませんか。」

「冗談ですつて！」とパーウエル・パーウロウイツチは悲しみ、驚いて叫んだ。「悲しいことを御知らせして居る時に……」

「いや、もうそのことはいつて下さるな、御願ひです！」

ウエリチャー・ニノフは起き上つて、又部屋を歩き出した。

かくして五分間過ぎた。訪問者も起き上らうとする様子だったが、ウエリチャーニノフが「座つていらつしやい！ 座つて！」と叫んだので、パーウエル・パウロウイツチはすぐに又溫和しく眩掛椅子にもたれ込んだ。

「だが、あなたは何て變つてしまつたことだらう。」とウエリチャーニノフは突然さう思つたかのやうに彼の前に俄かに立ち止つて、又語を續けた。「あなたは恐しく變りましたよ！ 非常なものだ！ まるで別人だ。」

「それも不思議ではありません。九年間會はなかつたのですもの。」

「いや、いや、年月のせいではありません！ あなたの様子がどんなに變つたかはとても信じられない位です。あなたは別人に成りましたよ！」

「九年ですもの、さうありさうなことですよ。」

「それとも三月以來のことですか！」

「へつ——へつ！」パーウエル・パウロウイツチはこつそり笑つた。「變なことを御考へに成つたものです……だが、一體——どんな風に變りましたか。」

「どんな風にですつて？ 私を知つて居たパーウエル・パウロウイツチは非常に堅實な、品の好い人でした。そのパーウエル・パウロウイツチは非常に利口な男だったが、——このパーウエル・パウロウイツチは本式のヴォーリアン(譯者註、ろくでなし、無頼漢等の意。)です！」

彼はかの内氣な人でも、いつてはならないこと迄いつてしまふやうないらくした氣持ちに成つた。

「ヴォーリアンですつて！ さう思ひますか。今は利口な男ぢやないのですか——利口ぢやないのですか。」とパーウエル・パウロウイツチは面白さうにくすくす笑つた。

「利口な男なんぞ七里けつばいだ！ あなたは實際利口過ぎるらしいや。」

「俺も横柄だが、この野郎と來たら、うは手だ……どういふつもりだらう。」さうウエリチャーニノフは考へ續けて居た。

「いや君！」と訪問者はひどく激動し、椅子に腰掛けたまゝ振り向いて、出し抜けに叫んだ。「私達は何をいつて居るのでせう。今私達は世間を離れて居る。私達は御歴々の世俗の連中に居るのではない！ 私達は舊友だ。非常に舊い友達だ！ 私達はかうして落ち合つて、死んだ奴が貴とひつなぎに成つて居た貴重な友達を、本氣に思ひ出し合つて居るのだ！」

さういつて彼はそれに夢中に成り、ひどく感動して、帽子で顔を隠し乍ら、さつきのやうに頭を下げた。ウエリチャーニノフは厭な氣持にも成り、不安にも成り乍ら、彼に眼をつけて居た。

「こいつ、御太鼓持ちに過ぎなかつたらどうだ！」彼は不圖さう思つた。「いや、然しそんなことはない！ 酔つばらつて居るとも思へない——だが、酔つばらつて居るかも知れないぞ。顔が赤いや、よし酔つばらつて居たにしてからが——同じことだ。何のつもりだらう。この野郎、どうしやうてんだらう。」

「憶えて居ますか。」とパーウエル・パーウロウイツチは少し帽子をわきへ動かして、追憶で眉一層感動して来た様子で叫んだ。「田舎へ出掛けた旅行や、一緒に送つた夜な／＼のこと、此上な客あしらのいゝセミヨーン・セミヨトウイツチ閣下の家の、舞踏があつたり、罪の無い遊戯をして遊んだ小さい會合のこと等を憶えて居ますか、それに夜に成ると私達二人して一緒に本を讀んだりしたものですね！ それにあなたと最初懇意に成つたのは、朝、あなたが自分の仕事を問ひ合せにいらして、興奮して話をはじめなさつた時に突然ナターリヤ・ワシーリエヅナが入つて来たのでしたね。十分と経たない内に、私のところの眞の友達に成つてしまつて、それから一年親しくして呉れましたね。まるでツルゲエネフの芝居の「田舎女」そっくりでしたね。」

ウエリチャーニノフはあちこち、のろくさと歩き廻り、床を眺め、氣短かに、厭な氣がし乍ら——然しそれで居て一心に聞いて居た。

「田舎女」のこと等考へたことも無い。」と彼は少しうろ／＼して、口を入れた。「あなたはそんな金切聲で……そんな可笑しな語を使つて話したことはありませんでしたよ。何の爲めにそんな語を使つたりするのです。」

「私は確かにもつと沈黙家でしたよ——といふのは私はもつと内氣でしたから。」とパーウエル・パーウロウイツチは急いで口を入れた。「私は死んだ奴にしやべらして置いて、それを聞いて居る方が好きでした？ あいつが巧くいろんな話をしたことを憶えていらしやるでせう？ 「田舎女」殊にステペンディエ

フのことはあなたのおつしやる通りです。といふのは私は憶えて居ますが、私達、死んだ奴と私とが、あなたが立ち去つてしまはれてから、靜かな時に、——私達が最初に御會ひした時のこと、あの芝居を比較して、その話をしたものですからね。實際似たところはありましたよ。殊にステペンディエフのことはね。」

「ステペンディエフつて何です。厭なこつた！」とウエリチャーニノフは叫んだ。そして、「ステペンディエフ」と聞いて、その名が呼び起す、心を亂す記憶の爲めにすつかりどぎまぎして、事實地團太踏んだ。

ステペンディエフといふのは芝居の中の人物で、『田舎女』の亭主です。」とパーウエル・パーウロウイツチは甘たるい聲で、高い調子で歌ふやうにいつた。「だがそれは、あなたが立ち去られてから、ステペンミハイロウイツチ・バガウトフが、丸五年間、丁度あなたのやうに私達と交際して下さつた頃の、貴とひ、繁しい記憶にまつたことでした。」

「バガウトフですつて？ 何ですつて？ バガウトフつて誰です。」ウエリチャーニノフは化石したやうに立ち止つた。

「ステパン・ミハイロウイツチ・バガウトフのこと、あなたがいらしてから一年後に……丁度あなたのやうに、私達と交際して呉れたバカウトフです。」

「おやさうか！ 知つて居ます！」とウエリチャーニノフはやつと落ち着いて叫んだ。「バガウトフか

！ あなたの町に勤めて居ましたね……」

「さうです。さうです！ 知事の家からね。ペテルスブルグからやつて来てさ、上流の、素敵に風雅な青年でさ！」とパーウエル・パーウロウイツチは實際有頂天に成つて叫んだ。

「さうだ、さうだ！ 今さつき私は何を考へて居たのだらう。あれも——」

「あれもだ、あれもだ」とパーウエル・パーウロウイツチは彼の相手が不注意に口に出した語を引つ凌つて、相愛らずの有頂天でいつた。「あれもだ！ いや、私達は此上なく客あしらいのいゝセミヨーン・セミヨーンノウイツチ閣下の家の舞臺で『田舎女』をやりましたよ——ステパン・ミハイロウイツチが『伯爵』で、私が『亭主』で、死んだ奴が『田舎女』でしたが——私は『亭主』の役を取り上げられてしまひました。ナターリヤ・ワシーリエヅナがさうしろといひ張つたので、その役には不適當なので、私は

『亭主』を演りませんでした……」

「どうしてあなたがステペンディエフに成れやう。實以てあなたはパーウエル・パーウロウイツチ・トルソツキイだ。ステペンディエフぢやないや。」とウエリチャーニノフは下品に、無作法に、凡んど腹が立つてふるへむ許りに成つていつた。「それはさうと、バガウトフはペテルスブルグに居ますよ。此春私も會ひましたよ！ 何故あなたはバガウトフのところへも會ひに行かないのです。」

「この二週間、毎日出掛けたのですが、會へないので！ バガウトフは病身で會へないので！ それに私が直接に聞いたのですが、バガウトフは實際ひどく悪いつてことですよ！ 六年間の友達です

がね。いや、アレキセイ・イウアーノウイツチさん、さつきにも申した通り、地中にもぐり込んでしまひ度いやうな氣に成ることもありますよ。本當ですよ。だが又、いはゞ過去の目撃者であり、関係者であつたんならば誰でも抱擁することが出来るやうに思ふこともありますよ。といふのは只泣き度い爲め、全たく外はない、只泣き度い爲めで……」

「いや、だが、今日はこれでそろ／＼失禮し度いのですが。」とウエリチャーニノフはだし抜けに口を切つた。

「いやどうも大變御邪魔しました！」とパーウエル・パーウロウイツチはすぐに席から立つた。「もう四時です。それに自分勝手にあなたの氣持を亂してしまつて……」

「それから、明日間違ひなく私もあなたのところへ参ります。それから……ありの儘に、正直に聞かせて下さい。今日あなた酔つぱらつてやしませんか。」

「酔つぱらつてるのですつて。いゝやちつとも……」

「いらつしやる前か、それとももつと前に召し上つたのぢやありませんか。」

「いや、アレキセイ・イウアーノウイツチさん、あなたは實際どうかして居ますぞ。」

「明日の朝一時前に御伺ひします。」

「あなたが變だといふことは、さつきから氣が附いて居ましたよ。」パーウエル・パーウロウイツチは同じ題目にしがみついて、興奮して口を入れた。「實際濟みません。私が不調法な爲めに……いや、失禮しま

す！横に爲つ少し御休みなさい！」

「あなたは未だ居所を教へて呉れませんでしたね。」とウエリチャーニノフはあはたゞしく彼の後ろから呼び掛けた。

「教へませんでしたか。バクロフスカヤ・ホテルです。」

「バクロフスカヤ・ホテルといふのは？」

「そら、バクロフスカヤ教會の傍ですよ。すぐ傍の、横町にありますよ。町の名前を忘れたし、番地も忘れたが何しろバクロフスカヤ教會のすぐ傍ですよ。」

「分るでせう！」

「是非來て下さい。」

その時には既に下へ下りるところだつた。

「待つて下さい。」とウエリチャーニノフは又、彼の後から大聲擧げて呼び掛けた。「あなた、私を外しやしないでせうね。」

「外なつて、そりやどういふことです。」とパーウエル・パーウロウイツチは三段目のところでじつと彼を見詰め、向ふを向いて微笑み乍ら叫んだ。

返答せず、ウエリチャーニノフは戸をびしやりと音を立て、閉め、注意してそれに錠を掛けた部屋へ歸り乍ら、彼はきたないものに觸つてども居たやうに唾を吐いた。

部屋の真中に五分間程も立つて居てから、彼は着物も脱がずに寢床にどさりと身を投げて、一分と経たない内に寝ついてしまった。テーブルの上に忘れてあつた蠟燭は燃え盡きた。

第四章

妻と夫と戀人と

彼はぐつすり眠つて、九時半に眼を覺した。彼はすぐにいろんなことを思ひ出し、寢床に腰掛けて、すぐに「かの女の死」に就いて考へ始めた。昨夜その死の突然の報せを聞いた時の激動が、一種の胸騒ぎとおまけに苦痛を残した。その苦痛と胸騒ぎとはパーウエル・パーウロウイツチと一緒に居た間は、一時、或る變な考への爲めに抑制せられて居たに過ぎなかつた。

だが、今や、眼が覺めたら、九年前にあつた一切のことが、眼に見えるやうにはつきりと彼の心に現はれた。

この女、このナターリヤ・ワシーリエヅナ、「かのトルソツキイ」の細君を、彼は曾つて愛したのであつた。實際彼がそんなに長い間そこに居る必要は無かつたのだが、表面上は私用の爲めにそれも、争ひに成つて居た貴産に關する訴訟だつたが、T——で暮したまる一年間彼は彼女の戀人だつた。彼が止

つた點の理由はこの密通の爲めだつた。このリエゾン(譯者註、密通の意)戀愛に彼はすっかり虜に成つて、まるで彼はナターリヤ・ワシーエヴナの奴隷見たいに成つた。その女の極つまらない氣まぐれを満足さす爲めにも、どんなに言語道斷で、馬鹿げたことでもすぐに悦んでやらうとしたと思はれる程だつた。

彼はその前にはさういふ氣持ちに成つたことが無かつた。その年の暮、ほんの短かい間しか別れては居ない積りではあつたが、どうしても別れなければならなく成つた時、悲しい時が近づくに連れて、ウエリチャーニノフはひどく自棄つ腹に成つて、二人で駆落しやう、私はあなたをあなたの夫からかつさうらつて行く、二人は何もかも擲つて、又と歸ないやうに一緒に外國へ行かうと、ナターリヤ・ワシーリエヴナに持ち出した。女が嘲弄し強情でなかつたら彼女も初めは多分退屈な爲め、即ち面白半分はその目論見にすっかり賛成したのだつた。思ひ詰めて、一人立ち去ることは出来なかつたらう。そして實際、二日と経なたい内に彼はベテルスブルグで、何時も答へることが出来なかつた疑問をわれと自分に訊ねて居た。彼は實際その女を愛したのだらうか。それとも「痴情」に過ぎなかつたらうか。實際、かういふ疑問が起るといふのは浮薄な爲めでも、何か或る新しい所爲でも無かつた。といふのはベテルスブルグのその最初の二月間といふきの、彼は一種の麻痺に陥つて、彼はすぐに又以前の知己と交はり、澤山の女に會つたが、凡んどの女も眼につかなかつたから。だが同時に又、彼は 若しその時——に連れて行かれたら、如何なる疑問にも喰ひ止められずに、又その女の魅力に支配されるだらうといふ

ことは知つて居た。五年後も彼はしかと信じて變らなかつた。だが五年後は心にこれを承認するに憤怒を以てし、「あの女」のことを思つても、憎しみを抱くのだつた。彼はT——で暮したその一年を羞しく思つた。彼はどうしてあんな「馬鹿げた」熱情が、このウエリチャーニノフを訪れたかも知らなかつた。その熱情に關するあらゆる記憶が彼には馬鹿々々しく或り、それを思ひ出すと、涙が出る程羞しく成り、良心の呵責に攻めさいなまれた。尤も二三年後は彼も幾らか落ちついた。彼はそれを忘れやうくとして居た。——そして凡んど成功したところが九年後の今に成つて俄かに、昨夜、ナターリヤ・ワシーリエヴナの死んだことを聞いてから、これ等のことが又、突然、思ひ掛けなく彼の心に立ち現れたのであつた。

今や、ごつちやに成つて群つて居る混亂した考へを心に抱いて、寢床に腰掛け乍ら、彼は或る一つのことだけ、即ち、報せに接した時には「激動」を感じはしたが、彼女が死んだことにはまるで平氣だといふことをはつきり知つた。「俺はあの女のことを何とも思つてないのか知ら。」と彼は自分自身に訊ねた。尤も彼は今や、彼女に對して憎しみを抱いて居ず、彼は彼女をこれまでよりも正當に、公平に批評することは出来た。その別れてからの九年の間に、彼はずつと前から、ナターリヤ・ワシーリエヴナは田舎の相當な社會の中に動いて居る全たく普通の田舎女の部類に屬して居る、「事に依つたら、彼女は實際さういふやうな女で、大方俺だけが彼女をあんなに奇異に理想化したのだらう」といふ意見を拵へて居た。だが彼はそい意見には間違ひがあるかも知れぬと、常に思つて居た。そして今もそれを感じた。

又實際、いろんな事實がその意見に反對して居た。このバガウトフも數年間彼女と交際し、彼も「彼女の魅力に支配されて」居たらしつた。バガウトフは確かにベテルスブルグの上流に屬する青年だつた。そして、彼は恐しく「無茶苦茶な奴」だつたので、ベテルスブルグでも無ければ成功することが出来なかつた。(ウエリチャーニノフは、彼のことをいつもさういつて居た。)然るに彼はベテルスブルグを等閑にし——即ち、自分の最も重大な利益を犠牲にして——全たくあの女の爲めにT——に五年間止つた! さうだ、そして結局彼はベテルスブルグへ立ち歸つたが、それは外ではない、多分彼も、役に立たなくなつた古靴」のやうに棄てられたからのことだらう。だから、あの女には何か特別なもの——人を牽きつけ、奴隷にし、支配する力があつたに違ひない。

而かも彼女に人を牽きつけ、奴隷にする力があるとは思へなかつた。彼女は可愛い、らしいといふ女では無かつた。事實彼女は不器量の方だつたらう。ウエリチャーニノフが初めて彼女を知つた時、彼女は二十八歳だつた。餘り美しくもなかつたが、彼女の顔は生き／＼して人を魅するやうに成ることもあつたが、眼は綺麗では無かつた。權あり過ぎた。彼女は非常に瘠せて居た。頭の方は、彼女は充分の教育は無かつたが、鋭敏な知力は疑ひなかつた。尤も考へることは偏して居たが、彼女の作法は田舎女の作法ではあつたが、素敵に手際が好かつた。彼女は藝術的な趣味もあつたが、それは専ら着物の着方を知つて居るといふ點に表れた。性格はきつぱりして、横柄だつた。何事にも譲るといふ氣に成れたことはなかつた。一切が然らずむば無だつた。難局に處してもしつかり、平然として居ることは驚ろく可き

程だつた。彼女は寛大に成ることも出来たが、又、全然不條理にも成るのであつた。あの女と議論することは不可能だつた。この二倍は四に成るといふやうなことも彼女は無視した。彼女は何事にも自分が間違つて居るとか悪いとか思つたことは無かつた。彼女はしよつ中夫を瞞して居ても、數限りなく彼に不實な事をして居ても、少しも彼女は氣に成らなかつた。だが、ウエリチャーニノフの比較を引用すると彼女は自分を神の母だとすつかり信じ切つて居る「フラチエラント(譯者註、罪惡消滅の爲めわが身に鞭打を加へし基督教一宗派の信徒)の聖母」のやうだつた——だから、ナターリヤ・ワシーリエヴナは自分のすることとは何事でも絶対に信じて居た。彼女は戀人には忠實だつたが、それも厭に成らない内のことに過ぎなかつた。彼女は戀人をいじめることが好きだつたが、又愛に報ゐることも好きだつた。彼女は熱情的で、殘酷で、肉感的な女だつた。彼女は敗徳を嫌ひ、恐しく喧しくいつて、それを非難したが——彼女は自身は腐敗して居た。どんなことがあつても、彼女は自分の腐敗に氣が付かなかつたらう。「實際彼女にはそれが分らないのだらう。」ウエリチャーニノフは未だT——を立たない前にも、彼女のことをかう思つた。(序でだが、彼は彼女の腐敗の助力者だつた。)「彼女は不貞な妻に生れついて居る女だ。さういふ種類の女は決してオールド・ミスに成ることはない。さういふ種類の女はきつと結婚して不貞な妻に成る。その夫は最初の戀人だが、結婚式が濟んだ後迄も戀人では決して無い。かういふ種類の女位素早く、造作なく結婚するものはない。さういふ女の最初の不義は、いつも夫の罪だ。そしてそれには眞心を打ち込む。仕舞ひ迄彼等は自分を絶対に正當で、いふ迄も無く全然無きものと思つて居る。」

ウエリチャーニノフは實際さういふ種類の女があることを信じて居たが、又一方に、彼はさういふ女に相應し、その唯一つの天職がさういふ女のタイプに符合するにある一種の夫があることも信じて居た。彼の考へでは、さういふ夫の眞髓はいはゞ彼が「永久に夫」である、否寧ろ、一生涯夫たる外に何ものでもないといふ點にある。さういふ男は夫に成るだけが能で生れて来て、成長するので、結婚すると、よしはつきりした自分の性格を有する男であつても、すぐに細君の附録に變つてしまふ。さういふ夫の重立つた眼じるしは、或る飾りだ。彼は太陽がかゞやかすには居られないと同じ様に角を着ける(譯者註、角を着けるとは細君を寢取られること。牡鹿には角があるが、その牡鹿は仲間自分の相手を寢取らるゝことあるより來れり。——前に「飽りがある」といへるはこの角のこと。)ことを避けることが出来ない、彼はそのことを知らない許りでなく、生れつきそれを知ることが出来ないやうに出来て居る。「ウエリチャーニノフはかういふ二つのタイプがあること、及び、パーウエル・パーウロウイツチ・トルソーツキイがその一つのタイプの完全な代表者なることを深く信じて居た。勿論昨夜のパーウエル・パーウロウイツチは、彼がT——で知つて居たパーウエル・パーウロウイツチとは非常に違つて居た。彼は彼に會つて、信じ難い程變つて居るのを見た。然しウエリチャーニノフは彼が變らずには居られなかつたこと、及び、變つたのも全たく當り前のことだといふことを知つて居た。トルソーツキイは細君が生きて居た間だけ、昔のトルソーツキイであり得たが、細君が死んでしまつた今は、彼は突然切り取られ、放たれた一つの完全なもの、斷片に過ぎず、不思議な、奇妙なものだつた。

T——に於ける昔のパーウエル・パーウロウイツチに就いて、ウエリチャーニノフは次のやうなことを今、思ひ出した。

「勿論、T——に於けるパーウエル・パーウロウイツチは單に一人の夫に過ぎず」外の何ものでもなかつた。例へば彼がその外に役人を勤めて居たのは、全たくさういふ職が彼の結婚生活の一つの義務だつたからのことだ。彼は職務に熱心であつたが、自分の妻と、T——に於ける社會的位置の爲めに彼は勤めて居るのだつた。彼は當時は三十五歳で、少し財産を持つて居た。彼は彼の勤先きで可もなく、不可もなく勤めた。彼は田舎のあらゆる上流の連中と交際し、彼等との間も巧く行つて居た。ナターリヤ・ワシーリエヴナはT——で深く尊敬されて居た。だが、彼女は當り前位のことと思つて、餘り有難いとは思はなかつた。だが、家では彼女は立派に客をもてなした。そしてパーウエル・パーウロウイツチは彼女によく仕込まれて居たので、州の最高の貴人達をもてなす時にも、彼は品好く振舞ふことが出来た。多分ウエリチャーニノフにはさう思はれた。パーウエル・パーウロウイツチも智慧はあつたらうが、ナターリヤ・ワシーリエヴナはつれあひが餘りしやべることを好まなかつたので、彼の智慧は餘り現はれなかつた。恐らく彼は惡徳も、多くの天然の善い徳も備へて居たことだらう。だが彼の善い性質はいはゞおゝひで隠され、彼の惡癖は凡んど全く息の根を止められた。例へばウエリチャーニノフは、パーウエル・パーウロウイツチが近隣の人々を嘲笑する性質を現はすことがあつたが、これが嚴しく禁じられたことを憶えて居た。彼は又折々好んで逸話を語つたが、その缺點も警戒された。そして彼は短かい、餘

り大したものでないのだけ語ることを許された。彼は外で飲む宴會の酒が好きで、友達と二人切りで飲み過ぎるやうなことも仕兼ねまじかつたが、この缺點は嚴格に二葉の中に摘み取られた。そして注目すべきことは、局外の觀察者で、パーウエル・パーウロウイツチを女房の尻に敷かれた亭主だといつたものはあるまいと思はれることだ。ナターリヤ・ワシーリエヴナは全然従順な細君に見えたし、又多分彼女もさう信じて居たのだらう。パーウエル・パーウロウイツチはナターリヤ・ワシーリエヴナを熱切に愛して居たかも知れなかつたが、誰もそれには氣が附かなかつたし、又實際、それを認めることが不可能だつた。そしてこの遠慮は多分彼女の家庭的訓練の所爲だつたらう。T——に於ける生活の間に何度もウエリチャー・ニノフは、パーウエル・パーウロウイツチは細君の密通に就いて、一體少しでも不審を抱いて居るのか知らとおのが胸に訊ねた。何度も彼は眞面目にそのことをナターリヤ・ワシーリエヴナに尋ねて見たが、何時もうるさいといつた調子で答へられた、夫はそのことを何にも知らないし、決して夫には分りはしない、「夫の知つたことぢやあないのですもの」といふ返事を受け取つた。彼女の今一つの特色は彼女が決してパーウエル・パーウロウイツチを嘲笑したことなく、彼を可笑しな、若くは至極愚直な男とも考へては居ず、若く誰かゞ彼に敢て無作法を働らくやうなことがあつたら、實際彼女はひどく激して彼の肩を持つたゞらうと思はれることだつた。子供が無かつたので彼女は自然社交女になつたが、家庭生活も彼女には必要缺ぐ可からざるものだつた。社交の楽しみで、上の空に成るやうなことは決して無かつた。そして家で裁縫や、家の監督をすることが非常に好きだつた。昨夜パーウエル・パ

ーウロイツチは三人が本を読んで送つた夜のことを思ひ出したが、ウエリチャー・ニノフが朗讀することもあるれば、パーウエル・パーウロウイツチが朗讀することもあつたが、彼が巧く朗讀するのには、ウエリチャー・ニノフは驚いた。扱て、ナターリヤ・ワシーリエヴナはそれを聞き乍ら、いつも靜かに、落ちて着いて縫物をして居た。彼等はドイツケンスの小説や、露西亞の雜誌に載つて居るものや、時とするところ「堅い」ものも讀んだ。ナターリヤ・ワシーリエヴナはウエリチャー・ニノフの教養を高く踏んで居たが、黙つてしつかりしたものと思ひ、今更賞めたりするには當らぬと思つて居た。全たく彼女の智識的、文學的なものに對する態度は、有益なものだらうとは思つても、御門違ひなものに對する好き、寧ろ一種の冷淡だつた。パーウエル・パーウロウイツチはそれに對して可なりの熱心を示すことがあつた。

T——に於けるリエゾンは、ウエリチャー・ニノフの方が極點——即ち凡んど氣違ひ見たいに成つた時、突然破れた。俺は「役に立たぬ古靴」のやうに棄てられたなといふことを知らずに彼が立ち去るやうに計らはれたが、實際彼は突然に斥けられたのだ。

彼が出發する六週間前に、教員養成所を出た許りの若い砲兵將校がT——に着いて、トルソーツキイのところへ足繁く通ひ出した。三人で無くつて、今度は四人の會に成つた。ナターリヤ・ワシーリエヴナは彼を親切にもてなしたが、子供扱ひにした。ウエリチャー・ニノフの胸には、如何なる疑ひも浮ばなかつた。又實際、そんなことを考へる餘裕も無かつた。といふのは、どうしても別れなければならぬといふことを聞かされた許りのところだつたから。ナターリヤ・ワシーリエヴナが、彼が出来るだけ

早く立ち去ることを促がした数多の理由の中の一つは、彼女が身持ちに成つたやうだとのこと、だから従つて彼は、後でどんな噂が立つても、夫が容易に疑ひを抱かないやうに、少なくとも三四ヶ月間、すくなくとも姿を隠して呉れなければならぬとのことだつた。それは少し可笑しい意見だつた。巴里か亞米利加へ一緒に逃げて呉れといふウエリチャーニノフの猛烈な相談後、彼は「勿論、暫らくの間だけ」即ち、三月以内位のつもりで、一人ベテルスブルグへ出發した。でなければ、どんな理由があつても、彼は決して立ち去らなかつたらう。丁度二ヶ月後に彼はベテルスブルグで、妾は既に外の人を愛して居ますから、あなたは決して歸つて下さるなといふ手紙をナターリヤ・ワシーリエヴナから貰つた。身持ちに成つたといふのは間違ひだつたといふことを報せて來た。この報せは餘計なものだつた。今や彼には仔細がはつきりした。彼はかの若い將校を思ひ出した。それですつかりけりが附いた。彼は數年後偶然に、バガウトフがその舞臺に現はれて、そこで丸五年暮したといふことを聞いた。彼はその事件の期間の厭に長いのを、一部分は、ナターリヤ・ワシーリエヴナが既に、可成り年取つたので、戀着が前より永續するやうに成つた所爲にした。

彼はほど一時間が程、寢床に腰掛けて居たが、遂に思ひ切つて立ち上つて、ベルを鳴らしてマーズラに珈琲を持つて來させ、急いでそれを飲んで、十一時に、バクロフスカヤ・ホテルを探しに出掛けた。途中、今朝初めて彼を訪れた一種特別な思ひを胸に抱いた。彼は何か昨夜のパーウエル・パーウロウイツチに對する自分の振舞ひを羞しく思つた。それで、その印象を拭ひ去り度く思つた。

昨夜の戸のハンドルの奇妙な一件を、彼は今、偶然と、パーウエル・パーウロウイツチが酔つぱらつて居た所爲にしたが、未だ外にも理由がある氣がしたが、二人の間が至極自然に無關係に成つて居るのに、何だつて今あのやもめと又新たに關係を拵へやうとして居るのか、實際、確かには分らなかつた。何か知ら彼を誘引するものがあつた。昨夜彼は一種特別の印象を受け、それに誘引されたのであつた。

第五章

リ
ー
ザ

パーウエル・パーウロウイツチは「彼をはづさう」等といふ考へはなかつた。何だつて昨夜ウエリチャーニノフが彼にそんなことを尋ねたか分らない。實際、ウエリチャーニノフも説明に苦んだ。最初バクロフスカヤ教會の側の小さい店で最初訊ねると、二歩許り先きの横丁のホテルを教へて呉れた。ホテルで、トルソーツキかさんは、すぐ側の中庭のはなれ、マリヤ・スイツエヴナの貸間に滞在して居ると教へて呉れた。その貸間がある二階へと、狭い、濡れた、非常に汚ない石の階段を登つて行くと、突然泣き聲が聞えた。八九歳の子供が泣いて居るやうだつたが、その泣き聲は切なげだつた。今にも聲を揚げさうな忍び泣きが聞えたが、それと共に、地團太踏む音、大人の聲らしかつたが、しやがれた金切聲

で、口の中で怒鳴つて居る怒りの叫びが聞えた。この男は子供を鎮めやう／＼として居り、子供の泣くのが洩れないことを切望して居る様子だったが、鎮める聲の方が泣き聲よりも騒々しかった。その叫び聲は無情に聞え、子供は詫言事をして居る様子だった。両側に戸のある、登り切つたところの小さい廊下で、ウエリチャーニノフは脊の高い、肥つた、だらしなさうな、四十代の百姓女に出會はして、パーウエル・パーウロウイツチのことを尋ねた。彼女は物音の洩れて来る戸を指した。この女の肥えた、真赤な顔には何だか憤慨した様子が見えた。

「あの人は變なことをして喜んで居すまよ！」と彼女は不愛想にいつて、下へ下りて行つた。

ウエリチャーニノフはすんでのことに戸をたゝかうとしたが、考へ直してすか／＼入つて行つた。普通の、彩色した道具をうんと然し亂雑に入れた小さい部屋に、パーウエル・パーウロウイツチは上衣もチョツキも着ずに立つて居た。激昂して赤く成つた顔で、叫んだり、身振したり、おまけに蹴つたり（さうウエリチャーニノフは思つた。して、八フに成る、短かい、黒い、毛織の上衣を着て、みすぼらしい風體の少女を、彼は黙らせやうとして居た。彼女は今現にヒステリーの發作を起して居る様子で、ヒステリー患者のやうに息せき、パーウエル・パーウロウイツチをつかまへ、彼に抱き付き、彼に何事かを懇願し、切願しやうとするが如くに彼に向つて手を差し出して居た。忽ち、場面が一變した。訪問者を見ると子供はわつと叫んで、隣りの小さい部屋に走り去り、パーウエル・パーウロウイツチは、昨夜ウエリチャーニノフが階段の上、彼の前へ戸を矢庭に押し開いた時と丁度同じ様に、暫しが程はどきまぎ

して居たが、忽ち微笑を顔に浮べた。

「アレキセイ・イワーウイツチさんでしたか！」と彼は心から驚いて叫んだ。「思ひ掛けなかつた……だが、まあ入つて下さい！このソファアか、それとも此方の脇掛椅子へ、私は……」

さういつて彼は急いで、チョツキを着ることも忘れて、上衣を着やうとした。

「その儘で、御遠慮無く。」

ウエリチャーニノフは椅子に腰掛けた。

「いや、今ちやんとしますから、いや、ちやんと成りました、だが何故隅に腰掛けていらつしやるのです。此方の脇掛椅子へ、テーブルの側に腰掛けて下さい……いや、思ひ掛けなかつた。實に思ひ掛けなかつた！」

彼も籐椅子の端に腰掛けたが、「思ひ掛けない」訪問者と並んでゝはないが、彼に近く向き合ふことが出来るやうに椅子を斜にした。

「どうして思ひ掛け無かつたのです、昨夜此時刻に来るといつたぢやありませんか。」

「いらつしやらないと思つて居ました。今朝眼を覺まして、昨夜のことをいろ／＼思ひ返して、あなたにもう二度と御目に掛けることは出来ないと思ひました。」

その間ウエリチャーニノフは己が身の廻りを眺めて居た。部屋は亂雑で、寢床も片づけてなければ、着物は散らかつて居るし、テーブルの上には珈琲のおりの溜まつたコップ、パン屑、栓の抜けた、半分

入つて居る三鞭のびん、それからその側にコップが置いてあつた。彼は隣りの部屋の方を盗み見たが、そこは靜かに成つて居た。子供は隠れて、ひっそりして居た。

「今それを飲んでいらしたのぢやないでせうね。」とウエリチャーニノフは三鞭を指していつた。

「残りもので……」とパーウエル・パーウロウイツチはうるたへていつた。

「いや、あなたは變りましたよ！」

「悪い癖ですよ。突然附いちやつたのです。實際、あの時からのことですよ。嘘ぢやありません！我慢が出来ないのでですよ。御心配には及びません。今日は酔つて居ませんから、昨日あなたのところでしたやうな馬鹿な真似はしませんから。だが、實際のところ、こんなに成つたのも、あの時から此方のことですよ！六ヶ月以前に、私がこんなに參つてしまふだらうてえことを誰がいつても、鏡にこんなに成るぞとかつて見せて呉れる人があつたにしても——私はそれを信じはしなかつたでせう。」

「それぢや、昨夜は酔つていらしたのですか。」

「え、さうです。」とパーウエル・パーウロウイツチは、どきまぎして下を見乍ら、小さな聲で承認した。「いや實はあの時は酔つばらつて居るといふ程でもたかつたのですが、あれより少し前には酔つばらつて居たのです。辯解させて戴たき度いのですが、私はいつも、酔つばらつて暫らく經つてからが却つていけないのです。少しでも酔つばらつたが最後、亂暴に成り、馬鹿に成るのです。そして又自分の悲しみを一層強く感ずるので。大方私は悲しいので、酒を飲むのでせう。飲むで了と、どんな悪戯をも

仕兼まじいし、恐しくぶまな眞似して、罪も無い人に侮辱を與へます。昨日もきつと變でしたでせう。」

「覚えがないとおつしやるのですか。」

「覚えがないつて？ いゝえ、すつかり覚えて居ます……」

「いや、私もさう思つて居たのですよ。」とウエリチャーニノフは和解的な口調でいつた。「それに私も昨夜あなたに對して少しいらいらして居たし、それに氣短かでもあつたので……そのことは快よく承認します。私は折々氣分が勝れないことがあるのですよ、そこへ持つて來て、あなたは昨夜突然やつていらしたので……」

「さうです、夜でしたからね、夜で！」パーウエル・パーウロウイツチは驚いたやうに、又、善くないことだつたといつたやうに頭を振つた。「一體何に取つ付かれて居たのでせう。あなたの方で戸を開けて下さらなかつたら、どんな事があつても、私はあなたのところへ這入つて行きやしなかつたでせう。私は戸のところから立ち去つてしまつたこととせう。私は一週間前にもあなたのところへ參りましたが、あなたは御留守でした。だが、或は二度と御伺ひせず終つたかも知れなかつたところですよ。といふのは私は自分が今どんな有様に成つて居るか承知しては居ますが、私だつても自負心はあります。私達は町中に出會わしましたが、奴は私が分つたに違ひないのに、向を向いてしまふ。九年といふ年月は馬鹿には成らない。」と私はしよつと思つて、御伺ひする氣にはなれなかつたのですよ。ところが昨夜は、ベテルスブルグ區をさまよひ出て、時間を忘れてしまひました。皆なあの所爲ですよ。」（彼は瓶を指さした。）

「それに自分の氣持の所爲ですよ。頓間な話だ！ 實際！ あなたは昔のことを思つて、昨日のやうなことをやつた後でも、私に會ひに来て呉れましたが——あなたでなかつたら、又新たに御近附きになる望みがすっかりなくなつたことでせう！」

ウエリチャー・ニノフはじつと耳を傾けて居た。彼には、この男が誠心誠意から、それに品のある態度で語つて居るやうに思へたが、それで居て彼はこの部屋へ入つて來てから聞いたことを一言も信じなかつた。

「それから、あなたはこゝに一人でいらつしやるのぢやないでせう。今さつき、あなたと一緒に居たのはどなたの御娘さんです。」

パーウエル・パーウロウイツチはぎつくりして額を擧げはしたが、ウエリチャー・ニノフを快活に眺めた。

「誰の娘ですつて。リーザですよ！——と彼は愛想よく微笑んでいつた。

「リーザてえのは？」とウエリチャー・ニノフはぞつとつぶやいた。その身震ひは實に思ひ掛けなきものだつた。さつき彼は入つて來てリーザを見た時、彼は驚きはしたが、まるで何も氣に成らず、彼女のことと特別に何も考へなかつた。

「私達の娘のリーザですよ！」パーウエル・パーウロウイツチは微笑んだ。

「あなたの御娘さんですつて？ あなたとナターリヤ……ナターリヤ・ワシーリエヴナさんの間に御子

さんがあつたとおつしやるのですか。」とウエリチャー・ニノフは非常に低い聲でおづく、怪しみ乎ら訊ねた。

「ありますとも！ だが、待つて下さい。實際、あなたは御存知の筈はないのだ。私は何を考へて居たのでせう！ あなたが行つてしまはれた後の話だ。私達に女の子が授かつたのですよ！」

パーウエル・パーウロウイツチは、それが又氣持が好かつたらしかつたが、何だか激動して、實際椅子から跳び上つた。

「さういふことは少しも知りませんよ。」とウエリチャー・ニノフはいつて、青く成つた。

「成る程、成る程、御存知の筈がない。」とウエリチャー・ニノフは感動の爲めに微弱な聲でいつた。「あなたも覺えて居て下さることでせうが、妻も私もすつかり諦めて居ましたところが突然、この幸福が授つたのですよ。どんな氣持がしたか——神様だけが御存知です！ あなたがいらしつてから丁度一年後のことだつたと思ひます。いや、一年ぢやない。どうして、一年とは經ちやあしない。一寸待つて下さい。あなたが私達と別れたのは、私の記憶では十月か十一月だつたと思ひますが。」

「私は九月の初め、九月の十二日に——を立ちました。それは好く憶えて居ます。」

「九月でしたか？ ふむ……私は何を考へて居たのでせう。」とパーウエル・パーウロウイツチはひどく驚いて叫んだ。「で、さうだとすると、はてな、あなたは九月に立つて、リーザは五月の八日に生れたから——九月——十月——十一月——十二月——一月——二月——三月——四月と——八ヶ月より少し

經つてからです！　そして、若しあなたが、私の家内が……」

「見せて下さい……呼んで下さい……」とウエリチャーニノフは片々の聲でいひ淀んだ。

「あゝ呼びませうとも！」とパーウエル・パーウロウイツチは、自分のしやべつて居たことを、何うでもいふことゝいつたやうに早速中絶して、大騒ぎしていつた。「直ぐに、早速引き合せて上げます！」

さういつて彼は急いで他の室に居るリーザのところへ行つた。

丸三分間か四分間経つた。忙しない、口早の私語が聞えて、彼はリーザの聲を聞いた。「連れて行かないで下さいと頼んで居るのだ」とウエリチャーニノフは考へた。遂に二人が現はれた。

「まるでうろ／＼して居るのですよ。」とパーウエル・パーウロウイツチはいつた。「そりやあはにかみ家で、つんとして居て……死んだ家内をつくりですよ！」

リーザは下を向いて入つて来たが、もう涙ぐんでは居なかつた。彼女の御父さんが彼女の手を引いて居た。彼女は脊の高い、瘠せぎすの、非常に可愛らしい娘だつた。彼女は好奇心から訪問者を、青い眼を擧げて見て、不愛想な顔して居たが、すぐに又下を向いた。彼女の眼は知らない人のところに一人きり残され、片隅に引つ込んでその知らない訪問者を眞面目くさつて、怪し氣に見張つて居る子供に見るやうな眞面目に充ちて居た。だが彼女は或ひは、何か外のまるで子供らしくないことを考へて居るかも知れない——ウエリチャーニノフはさう思つた。

彼女の父親は彼女を眞直に彼のところへ連れて行つた。

これは御母さんがずつと前に知つて居なかつた小父さんだよ。私達の御友達だつたのだよ。羞しがらなうで、おてゝを御出しなせよ。」

子供は少し前へ屈んで、おづ／＼手を差し出した。

「ナターリヤ・ワシーリエヴはリーザに禮儀を仕込まず、只、英吉利流に軽く御辭儀して、手を差し出すことを教へたのです。」と彼は、ウエリチャーニノフをじつと見詰め乍ら辯解するやうに附け加へた。

ウエリチャーニノフは注目されて居るといふことを承知して居たが、自分の感動を隠すことに努めることはすつかり止めた。彼は椅子にすつかり落ち着いて座し、リーザの手を自分の手で持つて、子供をしげ／＼眺めた。だがリーザは何か知ら非常に心配して居る様子で、訪問者の手の内にあるおのが手を忘れて、自分の父親にじつと眼をすえて居た。彼女は彼がいふことに、心配氣に耳を傾けて居た。ウエリチャーニノフは又すぐにその大きい青い眼に氣が附いたが、彼を一番感動させたのは、彼女の顔の不思議な、やさしい白さと、髪の色だつた。これ等の特色は非常に顯著で、重大なものだつた。彼女の目鼻だち、唇の線は彼にはつきりナターリヤ・ワシーリエヴナを思ひ出させた。一方パーウエル・パーウロウイツチは非常な熱心、非常な感慨に満ちた様子で、さつきから彼に何か語つて居たが、ウエリチャーニノフは彼のいふことに耳を籍さなかつた。彼は最後の文句を聞き取つたゞけだつた。——「……ですから、この賜物を神様から戴いた時の私達の喜びといつたら、人様には分らない位です！　リーザが私達のところへ來るとすぐに、リーザは私の生命に成りました。ですから、神様の思し召しで、この平穩

な、幸福な生活がくづれることがあつても、リーザはいつも私の側に居るだらうと思つて居ました。確かにさうだと思つて居ました！」

「で、ナターリヤ・ワシーリエヰナさんは？」とウエリチャーニノフは訊ねた。

「ナターリヤ・ワシーリエヰナですか。」とパーウエル・パーウロウイツチは氣取つていつた。「あなたはあれの日常を御存じでせう。あれが餘りべちやくちやしやべりたがらなかつたことは覚えていらつしやるでせう。だが、あれが死ぬ時にリーザに別れを告げた時に……何もかもすつかり分りました！」「死ぬ時に」と申しましたが、死ぬ一日前に、家内は氣が變に成つて怒つて、皆なが私に藥を飲まして治さうとして居るが、私は只、普通の熱が出て居るだけの話で、家の御醫者さんは誰もそのことが分らない。コツホさんさへ歸つていらつしやれば（私達の昔からの御友達の、その軍醫を覚えていらつしやいますか。）二週間の内に私は起きられるやうに成れますなどといつて居りました！死ぬ五時間前には、三週間経つたら、彼女の叔母で、リーザの教母の女の命名日には、皆なで訪ねなければなりませんねなどといて居りました……」

子供の手は離さない儘で、ウエリチャーニノフは俄かに椅子から立ち上つた。子供が父親をにらめて居る鋭い眼ざしに、何だか恨めしい様子があることに氣がついた。

「リーザさんは何處か御悪いのぢやないのですかね。」彼は慌しく、何だか變な調子で訊ねた。

「さうぢやあないでせうが……こゝは周圍が非常に……」とパーウエル・パーウロウイツチは、しをれ

て、氣遣しげにいつた。「この子は變な子で、しよつ中びく／＼して居ます。母親が死んでから、此奴は二週間程、ヒステリーに罹りました。あなたがいらつしやるすぐ前に、そりやあ、泣いたり、わめいたりの騒ぎでしたよ……」リーザ、さうだつたらう。それが何の爲めでしたらう。私が此奴を残して置いて外出することです。此奴はそれといふのも、私が御母さんが生きて居た時のやうに此奴を可愛がなくなつた證據だといふのです——さういつてこぼすのです。玩具でも持つて遊んで居るが本當の、ごらんな子供が、そんな變なことを考へてゐるなんて……尤もこゝには遊び相手も居ませんがね。」

「まさか……あなた御一人ぢやないでせう。」

「全たく一人ぼつちで。召使が日に一度やつて来るだけです。」

「ではかうしてリーザさんを一人切り残して置いて外出なさるのですか。」

「外に仕様もありませんからね。昨日外出した時には、あれを、あの小さい部屋に閉ぢ込めて置いたのです。だから、今日泣いたり、騒いだりがあつたのです。だが外に仕様もありませんからね。まあ聞いて下さい。一昨日、私が外出した時に、あれが下へ下りたのですが、男の子があれに石を投つたり、あれの頭を打つたりしたのですよ。そんなことが無けりや又、あれは泣き出して、庭の寄宿人のところを走り廻つて、私は何處へ行つたかつて尋ねるのですよ。餘り體裁のいゝ話でもありませんからね。それに私も好くありませんや。一時間の積りで出て行つて、翌る朝歸つて来るのです。昨日もさうだつたのです。それに困つたことには、御主婦があれを出してしまつたのです。錠前をこわす爲めに錠前屋を呼

ひにやつてね——全たく不面目な話で——實際自分が人非人のやうな気がしましてな。何もかも氣持ちが錯亂して居るからのこと……」

「御父さん！」と子供はおづく、心配さうにいつた。

「そら又！ 又同じことを。今さつき私が何といひましたか。」

「止めます。止めます！」とリーザは急いで、彼の前に、両手を握り締め、恐い／＼の一念で繰り返した。

「こんな周圍に居て、かうして何時迄も辛抱は出来ません」とウエリチャーニノフは、命令するやうな調子で、性急にいつた。「あなたは……あなたは金持ちなのに、どうしてこんな離れで、こんな周圍のところに宿つていらつしやるのです。」

「離れにですつて。だが、私達は、一週間も経てば、立ち退くかも知れませんが、それにもう可成り御金を使ひましたからね。いくら、御金があるからといつて……」

「いや、分りました。分りました。」とウエリチャーニノフは益々せき込んで「何もいふには及ばない。お前のいひ度いこと、お前がどんな氣持ちでしやべつて居るかといふことはよく分つて居る。」といつたやうに、彼の語を遮つた。

「いゝことを教へて上げます。あなたはもう一週間か、事に依つたら二週間逗留するかも知れないとおつしやいましたが、私は此方に一軒知り合ひの家がありますが、それはもう私は自分の家のやうな氣が

して居る家で——二十年來の知り合ひです。主人のアレキサンドル・パーウロウイツチ・バガレーリツロフといふのは樞密顧問官ですから、あなたの用事にも、何か御役に立つかも知れませんよ。皆今、夏間の別莊に行つて居ます。素敵な別莊を持つて居るのです。クラヴディア・ペトロワナは私には姉さんか母親同前です。八人子供があ、ますがね。リーザさんを私がすぐにそこへつれて行きませう……詰らなく、愚圖々々して居ないで。あなたが此方にいらつしやる間はいつ迄も、喜んで引き取つてくれ、自分の子供のやうに可愛がつて呉れるでせうから！」

彼は恐ろしくあせつて居たが、それを隠しもしなかつた。

「さういふ譯にも参りませんので」とパーウエル・パーウロウイツチはひそかにウエリチャーニノフの顔色を伺ひ乍ら（さう彼は思つた。）しかめつ面していつた。

「どうしていけないのです。」

「どうしてつて、そりやあ、あなたのやうな心の分つて居る方のところならかまひませんが、彼奴がどんな風にもてなされるかも知らぬ、見ず知らずの、それにそんな立派な身分の方の家へ、どうしてこんなに突然に、子供が遣られませう。」

「だが、私がまるでその家の人間と同様だといつたぢやありませんか！」とウエリチャーニノフは、まるで怒つたやうに叫んだ。「クラヴディア・ペトロワナは、私が一寸一語話せば——私の子供のやうに思つて、喜んで引き取つて呉れますよ。へん！ あなたも、何かいつて見たさに、そんなことをいつ

て居らるのだといふことを御承知のくせに……何もかれこれおつしやるには及ばない！」

彼は實際地團太踏んだ。

「いや只、何だか變ぢやあないかといふだけの話です。何しろ一度か二度は、此奴に會ひに出かけなくちやなりませんまい。でないと、父親の顔を見ることも出来ませんからね！へつ——へつ！……そんな素晴らしい御家庭に一人ぼつちに成つてしまつて。」

「いや、至極あつさりした家庭ですよ。ちつとも「素晴しく」なんぞありやあしない！」とウエリチャー・ニノフは叫んだ。「澤山子供がありますよ。そこへ行けば、リーザさんも元氣に成れますよ。だから連れて行つて上げ度いのです……。好かつたら、明日あなたを紹介して上げませう。それから、勿論、あなたは御禮に出掛けて下さらなくちやなりません、何なら、二人が毎日、馬車にでも乗つて出掛けてもよござんすよ。」

「全たくどうも——」

「馬鹿な！それに、自分でよく御分りのくせに！好かつたら、今夜私のところへ来て、宿つてらつしやいさうしたら、明日の朝早く、向ふへ十二時に着けるやうに出掛けませうから。」

「ありがたう！それにあなたのところへ宿めて下さるなんて……。」とパーウエル・パウロウイツチは、突然、熱情的な調子で承諾を與へた。「大助かりです……その別荘は何處にあります。」

「レスノエにあります。」

「だが、これの着物はどうしませう。といふのは、御存知の通り、さういふ御歴々の家で、それに夏間の別荘のことですからね。御察し下さるでせうが……父親の心として……」

「着物がどうしたのです。リーザさんは喪服を着て居ますが、外の着物を着る譯には行きますまい。喪服でちつとも羞しくありません！只、綺麗な下着や綺麗な……半襟だけは着けなくちやあ……」

實際彼女の半襟と覗き出して居た下着とはひどく汚れて居た。

「すぐに着物を取換えさせなくちや」とパーウエル・パウロウイツチはせか／＼していつた。「外に、下衣のやうなもので、リーザが要るものを纏めませう。マリヤ・スイソイヴナが洗濯に持つて行つて居るのです。」

「それから馬車を連れて来るやうにいつて下さらなくちやあ」とウエリチャー・ニノフは遮つた。「出来たら早く願ひ度いのですが。」

ところが、一つ困難が生じた。リーザはどうしても厭だといふのだつた。彼女はしよつ中、恐い思ひをして聞いて居た。若しウエリチャー・ニノフが、パーウエル・パウロウイツチを説きつけて居る間にじつと彼女の顔を見たら、彼女の小さい顔に現はれた、身も世もあらぬ様子に氣が付いたことだらう。「私、行くのはいや。」と彼女は小さい聲で、きつぱりいつた。

「そうら！御母さんそつくりでせう。」

「御母さんなんぞに似てはいないわ！」とリーザは小さい手を揉み絞り、父親の前で、何だか母親のや

うだといつて叱られる恐しい叱責に對して、おのが身を守るやうな所作をし乍ら自棄に成つて叫んだ。

「御父さん、御父さん、私を捨てるなら……」

彼女は俄かにウエリチャーニノフの方に向つた。彼はまご／＼した。

「あなた、私を連れて行くなら、私……」

だが、彼女が更らに語を繼ぐ間もない内に、パーウエル・パーウロウイツチは彼女のかひなを、しかと捉えて、満面に激昂を現はし、襟を引つ張るやうにして、彼女を小さい部屋に引きずり込んだ。暫しの間、私語が洩れて居たが、やがて忍び泣く聲が聞えた。ウエリチャーニノフも入つて行かうとしたが、その時パーウエル・パーウロウイツチが出て来て、不愉快な顔に笑を浮べて、リーザはすぐ來ますと告げた。ウエリチャーニノフは彼を見ないやうに顔をそむけて居た。

マリヤ・スイソエヴナが出て來た。さつき彼が廊下で出會はした百姓女だつた。彼女は持つて來た下着類をリーザの綺麗な、小さな手提に詰め出した。

「それでは、あなたが御娘さんを連れていらつしやるのですか。」と彼女はウエリチャーニノフに訊ねた。「それぢや、あなたに御家族が御ありに成るのですか。功德に成りますよ。リーザさんに溫和しい子ですよ。リーザさんを正真正銘の氣違ひ病院から救ひ出して下さるのも同前のことで。」

「おい／＼、マリヤ・スイソエヴナさん！」とパーウエル・パーウロウイツチはつぶやいた。

「マリヤ・スイソエヴナですつて！ 私の名前はさうです。確かに。こゝは瘋癲病院ではありませんか。」

物心のついて居る子供が、あんな行狀を見るといふことはいゝことですか。もしあなた、馬車が來ましたよ——レスノーエでしたね。」

「さうです。さうです。」

「よくいらして下さいましたね！」

リーザは青い顔して出て來て、うつむいて手提を手に取つた。ウエリチャーニノフの方へは眼も呉れなかつた。ちつと我慢して、別れといふにも拘らず、さつきのやうに、走つて行つて、父親に抱き付くといふやうなことはなかつた。彼女は彼の顔を見ることも好まぬらしかつた。父親は彼女の頭を行儀よくキツスして、それを軽くたゞいた。彼がさうすると、彼女の唇はひきつつて、小さい唇は震へたが、それでも彼女は眼を擧げて、父親を見るやうなことはしなかつた。パーウエル・パーウロウイツチの顔は青ざめ、彼の手はふるへて居た——ウエリチャーニノフはパーウエル・パーウロウイツチを見まい見まいとして居たが、それは、はつきり氣がついた。彼は只、出来るだけ早く立ち去り度いものと切に願つて居た。

「なあに、俺の咎ぢやあない。」と彼は思つた。「かうならなければならなかつたのだ。」

彼等は下へ下りて行つた。そこで、コリヤ・スイソエヴナガリーザに別れのキツスをした。彼女は、馬車の中に座るとすぐに、父親の方を見て、手を差し上げ、叫び聲を擧げた。今一分したら、彼は其馬車から乗り出して、彼に抱きつくところだつたが、馬が出發してしまつた。

第六章

なまけもの、新しい道樂

「気分が悪いの。」とウエリチャーニノフは驚いて尋ねた。「止めてもらふよ。水を持って来させるよ……」

彼女は彼に眼を向けて、じつと、恨めしさうに彼を見た。

「何處へ連れて行くの、私を。」と彼女はだしぬけに、はつきり尋ねた。

「それやあまい人達のところだよ。今、素敵な別荘に居るのだよ。澤山子供か居てね。御前を可愛いがつて呉れるよ。親切な人達だから。リーザ、私を怒らないでね。悪いやうにはしないから。」

彼を知る人々にして、若しその時の彼を見ることが出来たならば、どんなに不思議なことに思つたらう。

「私……あなた、いや！」とリーザは泣き度いのを堪へて苦しい息を吐き乍ら、怒氣を含んだ美しい眼で、彼をにらんでいつた。

「リーザ、私は……」

「あなたはいけないんだ！ あなたはいけないんだ！」

彼女は手を揉み絞つた。ウエリチャーニノフは弱つてしまつた。

「リーザは、私はどんなに困つてしまふか知れないよ！」

「御父さんが明日来るつて本當？ えゝ？」と彼女はきつぱり尋ねた。

「本當だ。私が連れて行くよ。私が一緒連れ一行くよ。」

「御父さん、私をだましたので、来やしないわ。」と彼女はうつむいて、さゝやいた。

「御父さんは可愛いがつて呉れないのかい。」

「可愛がつちやあ呉れないわ。」

「ひどい目に會ふのかい。えゝつ？」

リーザは憂鬱な顔して彼を眺めて、黙つて居た。彼女は又彼から顔をそむけて、しつこく下を向いた儘座つて居た。彼は彼女の御機嫌を取らうとして、熱心に彼女に話し掛けた。彼はすっかり熱狂して居た。リーザは疑深い氣持ちで、敵意を以て聞いて居たが、聞くには聞いて居た。彼女が注意して聞いて居るので、彼はすつかりうれしく成つた。彼は人間が酒飲むとどうなるかといふこと迄説明し出した。彼は彼女に、私があなを可愛がつて上げる、そしてあなたの御父さんを世話して上げるといつた。と、うぐ／＼リーザは眼を擧げて、じつと彼を見た。彼は昔彼女の母親を知つて居たことを話し出したが、その話は彼女も面白かつたらしかつた。用心しい／＼、えゝとか、いゝえとか答へるだけではあつたが、段々彼女も彼の問ひに答へ出した大事な質問に成ると、彼女は矢張り、頑として答へなかつた。これ迄

の父親との關係に就いては、一切、執拗に沈黙を守つた。ウエリチャーニノフは彼女に話し掛け乍ら、さつきのやうに手を取つて、それを持つて居たが、彼女はそれを引つ込めはしなかつた。だが、彼女も黙つて許りは居なかつた。彼女は混亂した答への内に、御母さんよりも御父さんの方が好きだ、といふのは、いつも御父さんの方が私を餘計好いて、呉れたから。御母さんは私をそんなに可愛がつては呉れなかつた。だが、死ぬ時には、皆なが部屋を出て行つてしまつて、二人切りに成つたら、御母さんは私をキウスして、大層泣きになつた……今私は誰よりも御母さんが好きだ。誰よりも、世界中の誰よりも好きだ。で、毎晩私は誰よりも御母さんを戀しく思ふといふことを洩した。だがこの子は確かに知識があつた。腹藏なくしやべり過ぎたといふことに気がつくつと、彼女は又俄かに尻込みして、自分をこんなにしやべらせたウエリチャーニノフを憎さげに打ち守つた。道程が終りに近づくと、彼女のヒステリー性の激動は凡んど消失したが、思案に沈んで、野獸のやうな顔つきをし、むつとし、ふさぎ込んで、恐ろしく強情な様子をして居た。一度も行つたことのない、知らない家庭へ連れて行かれといふことは、その時には、大して彼女を惱まして居ないやうに思はれた。彼女が苦しんだのは何か外のことだつた。ウエリチャーニノフにはそれが分つた。彼は彼女が、彼に對して羞しく、父親があんなにも容易に、彼女を彼と共に行かせ、投るやうにして、彼女を彼に預つたことを羞しく思つて居るのだなと思つた。「リーザは病氣なのだ。」と彼は考へた。「事に依るとひどく悪いのかも知れない。死ぬ程、苦勞して來たのだ。……お、あの、酔つ拂ひの、見下げ果てた畜生め！ 奴のことはよく分つた！」

彼は馭者を急がせた。彼は田舎、新鮮な空氣、庭、子供等、新しい、珍しい生活等に希望を置いた。それから、後には……だが、後に成つて來るものに就いては、彼は少しも疑ひを抱かなかつた。未來に對しては、彼は大きい、輝かしい希望を抱いて居た。このことだけは、確實に知つて居た。といふのは彼が今經驗して居ることをこれ迄ついぞ感じたことがなかつたこと、今後、一生の間それは彼を離れることがないだらうといふことだつた。

「こゝに目的物があつたのだ。こゝに生命があつたのだ！」と彼は喜び勇んで考へた。

非常にいろんな考へが彼の心に浮んだが、彼はそれに拘泥することなく、こまかいことは片つ端から捨て去つた。こまかいことに入りさへしなれば、それ等は明瞭で、間然するところなきやうに思はれた。彼の計畫は言をまたすして明かだつた。

一私達か力を合せて、あの可哀さうな奴を感化することは出來ないことではない。」と彼は考へた。「最初は一時的のことで、或る期間だけだらうが、彼はリーザをバガレーリツエフ家に残して、一人で立ち去り、リーザは私の手許に残るだらう。それさへ叶へば、その外に私は何をか願はう。それに……いふ迄もなく、それは彼も欲するところだ。でなければ、どうして、彼は彼女をいぢめやう。」

とうとう彼等は到着した。バガレーリツエフ家の田舎の家は實際、いゝ家だつた。第一に彼等は玄關へ群り出て來る騒々しい子供の群に出會はした。ウエリチャーニノフは、そこへ暫らく御無沙汰して居た後だつたので、子供達は狂喜した。彼等は彼が好きだつたのだ。年上の連中はすぐに、彼が未だ馬車

から出ない内に、

「裁判はどうなのです。裁判はうまく行つて居ますか。」
と彼に向つて叫んだ。

一番年下のものまでがそれを真似して皆な年上のものにならつて面白さうに叫んだ。彼等は訴訟事件のことで、よく彼をからかつた。だがリーザを見ると、彼等はすぐに彼女を取り巻いて、じつと、黙つて、子供らしい好奇心だから彼女を眺め出した。クラヴディア・ペトロヴナ並びにそのあとから彼女の夫が出て来た。彼女も彼女の夫も、笑ひ乍ら、先づ訴訟のことを訊ねた。

クラヴディア・ペトロヴナは三十七位の女で、むつくり肥えて居たが、依然として美貌のプリユネツト(譯者註色の淺黒い女)で、生き／＼した、ばら色の顔をして居た。彼女の夫は抜目のない、利口な男であつたが、何よりも第一に好人物だつた、彼等の家は、彼もいつた如く、ウエリチャーニノフに取つて、本當の意味での「家庭」だつた、だが、この基礎をなすものとして、二十年以前に、クラヴディア・ペトロヴナが、當時學生で、未だ子供同前のウエリチャーニノフとすんでのことに結局しやうとしたといふ特別の事情が伏在して居た。それは例の初恋で、熱烈で、たわいのない、大變なものだつた。だが結局、彼女はバガレーリツエフと結婚してしまつた。五年後彼等は再會したが、結居、落ちついた、穩やかな友情が結ばれてけりがついた。二人が仲に充つる或る温かさ、一種特別の熱情はいつまでもいつまでも續いた。この友情に關するウエリチャーニノフの記憶はすべて清淨で、疚しいところがなかつ

た。さういふのは多分これだけだつたので、ウエリチャーニノフには一層尊とく思はれた。この家庭では、彼は天真爛漫で、氣取らず、親切だつた。彼は子供をあやしたりした。彼は自分の缺點をすべて承認し、自分の過失を白狀して、勿體振るやうなことは決してなかつた。彼は一度ならず、間もなく世塵を拂つて、皆なと一緒に住んで、もう二度と別れるやうないことはしないと、バカレーリツエフ家の人々に誓約した。彼は心中この企てを眞面目に考へて居た。

彼は彼等に、リーザに就いて必要なことをくわしく語つたが、彼が頼むとさへいへばそれで充分で、特に説明等は要らなかつた。クラヴディア・ペトロヴナはこの「みなしご」にキツスして、彼女の爲めにどんなことでもして上げると約束した。子供達はリーザを自分達のものにして、彼女を庭へ遊びに連れて行つた。

三十分許り賑やかに話してから、ウエリチャーニノフは立ち上つて、別れを告げ出した。彼は皆ながそれに氣がついた程せか／＼して居た。皆なが驚いた。彼は三週間も來なかつたのに、今日は又三十分で立ち去らうとする。彼は笑つて、明日來ると約束した。彼等は彼がひどく興奮して居るやうだといつた。彼は突然クラヴディア・ペトロヴナの手を取つて、彼女に大事なことを話すことを忘れて居たといつて、別の室へ連れて行つた。

「あなたは私が、あなただけ話したこと——御主人も御存知ないことですが——私のT——での話を覚えて居ますか。」

「よく覚えて居るわ。あなたよくその御話をなすつたのですもの。」

「普通の御話ではありません。あなたにだけした懺悔です！私はあの女の名字を御話したことはありませんでしたが、實はこのトルソーツキイといふ男の細君だつたのです。彼女は死にました。そしてリーズは彼女の娘で、そして又——私の娘なのです！」

「大當にさうなの。思ひ違ひをして居るのぢやありませんか。」とクラヴデイヤ・ペトロヴナは少し興奮して尋ねた。

「實際確かなことで、間違ひではないのです！」とウエリチャーニノフは夢中に成つていつた。

そして出来るだけ簡単に、急いで、ひどく興奮して、彼は仔細に物語つた。クラヴデイヤ・ペトロヴナは既に仔細は知つて居たが、女の名前は知らなかつた。

ウエリチャーニノフは、彼を知つて居るものが、トルソーツキイ夫人に會ふことがあつて、奴はこの女をあんなに迄愛したのかと思ふことがあるかも知れないと思つただけで、いつまでもひどく恐慌を感じて居たので、今日迄「その女」の名は、彼の唯一の友なるクラヴデイヤ・ペトロヴナにも打ち明けられなかつたのだ。

「で、御父さんの方は何にも知らないの。」と、彼の話を聞き終るとクラヴデイヤ・ペトロヴナは尋ねた。

「えゝつと、知つて居ます……未だそれが突き止められないので、気が氣でないのです！」とウエリチャーニノフは熱心に語を續けた。「彼は知つて居ます。昨日も今日もそれに気がつきました。だが、彼が

どれ程度迄知つて居るか突き止めなくちや。だから今気が氣でないのです。彼は今夜私のところへ來ます。だが、どうして彼に分つたか——といふのは何もかものことですよ——どうして分つたのかと分りません。彼はバガウトフのことは知つて居ます。それは確かです。だが私のことは？ あゝいふ場合に女といふものは巧く夫を安心させるものですからね！ 天使が天から下りて來たつて——夫はその天使といふことは信じなくつて、自分の細君のいふことを信じるものですからね！ 怒らないで下さい。その事件ではすつかり僕は自分を悪いと思つて居る許りでなく、すつと前からさう思つて居たのですから！……私は今朝あそこへ行つた時、確かに彼は知つて居ると思つので、却つて粗忽な、怪しまれるやうなことをしました。實際私は昨夜彼にあつて、ひどく無禮な眞似をしたので、羞しい、みじめな氣がして成りませんでした。(そのことはあとですつかり御話しますが)彼は昨日、俺は俺に對して犯した缺を知つて居るし、誰がしたかも知つて居るぞといふことを私に報せやうといふ、止めて止まらぬ惡氣から私のところへやつて來たのです。その爲めに、酔つばらつてから馬鹿々々しくも訪ねて來たのです。だが、彼の身に成れば、それは實に當然のことです！ 彼は全く無念晴しに來たのです！ 今朝も、昨日も、私の彼に對する態度は全く輕卒でした！ 不注意で——まぬけだつた！ 此方から秘密の洩れるやうなことをしました。何だつて彼は僕が轉倒して居た時にやつて來たのでせう。彼はリーズもいぢめて居たのですよ。多分それも無念を晴らす爲め——せめて子供にでも、恨みを漏らしたいと思つたのですよ！ さうです、彼に執念深いのです——屁見たいな奴ですけれど、執念深いのです。實際執念深い

や。一體、彼は道化者に過ぎません。尤とも、實際彼も昔は一かどの紳士見たいな様子をして居ました。が——奴がおちぶれるのは至極當然のことです！ 私達はそれに基督教的な考へで向はねばなりません！そこで、私は彼に對して態度を一變したのです。彼に親切になりたいのです。それは確かに「い、ことですから。何といつたつて、私は彼に悪いことをしたのですからね。聞いて下さい。外にも御話しなければならぬことがあるのです。T——に居た頃、四千留程金の入用があつたことがありましたが彼は即座に、何の抵當も取らずにその金を貸して呉れて、私の役に立つことが出来たのを心から喜んで呉れました。それで、私はそれを彼から受取つたのですよ。彼の手から受取つたのです。私は極親しい人から借りるやうな気持ちで、彼から借りたのです！」

「もう少し落ちついてさ」とクラヴディア・ベトロヴナは、それに應答して心配氣にいつた。「あなたは何て無我夢中に成つて居らつしやることだらう。私あなたが心配ですわ！ 勿論リーザは、私の子のやうに思つて預つて上げますわ。だが未だ極りをつけなければならぬことが澤山残つて居りますわ！もつと慎重になることが大事だわ。楽しい時や、そんなに有頂天に成つていらつしやる時には、もつと慎重に成ることが絶対に必要ですわ。楽しい時にはあなたは餘り寛大過ぎますわ。」と彼女に微笑を湛へて附け足した。

皆ながウエリチャー・ニノフを見送りに出て來た。庭でリーザと一緒に遊んで居た子供達は、彼女を一緒に連れて來た。彼等は今最初會つた時よりも、餘計驚いて彼女を眺めて居るやうに思はれた。リーザ

は別れに當つてウエリチャー・ニノフが皆なの前で彼女に接吻し、明日、彼女の御父さんと一緒に來るといふ約束を懇ろに繰り返した時、羞しくつてたまらなかつた。しまひ迄彼女は黙つて、うつむいて居たが、俄かに彼女は彼のかなひを捉え、哀願するやうな顔付きで彼を眺めて、彼をわきへ引つばつた。彼女は何か彼に話し度いことがあつたのだ。彼は直ちに彼女を外の部屋へ連れ去つた。

「何だい。」と彼は優しく、促がすやうに尋ねたが、尙も彼女は氣遣し氣にあたりを見廻し乍ら、彼を隅つこに連れて行つた。彼女は皆なから「元えないところへ行き度かつたのだ。」

「何だい。どうしたの。」

彼女は黙つて居た。物をいぶことが出来なかつた。彼女はその青い眼で、じつと彼の顔を眺めて居たが、彼女の小さい顔の目と鼻も狂的な恐怖に充ちて居た。

「首くゝるのよ！」と彼女は興奮してつぶやいた。

「誰が首縊るの。」と彼はうろ／＼して尋ねた。

「御父さん！ 夜ほそびきで首をくゝらうとして居たのよ！」と子供は息を切らしていつた。「私見たのよ！ ほそびきで首をくゝらうとして居たのよ、自分でさういつて居たのよ！ 前からさうしやうと思つて居たのよ。しよつ中さうしやうと思つて居たのよ……私見ましたわ、夜ね……」

「馬鹿な」と驚いてウエリチャー・ニノフはつぶやいた。突然彼女は彼の手をキツスし出した。彼女は泣き、涙にむせんで、彼に歎願し、哀願したが、彼女の

ヒステリー的なさゝやきの意味はさつぱり分らなかつた。そして、彼を自分の最後の希望として打ち守つた、恐怖に襲はれた子供のその苦しうな顔はいつ女でも彼の記憶に残つて、目覺めて居る時にも付き纏ひ、寢ては夢を訪れた。

「彼女は彼をそんなに愛することが出来るのか。」と、少しもちつとして居られないやうな気持ちで町へ歸り乍ら、嫉妬の念を抱いて考へた。「彼女自身今朝、私は御母さんが一番好きだといつた。……多分彼女は彼を憎んで居るので、彼を少しだつて愛しては居まい！……奴が首をくくるなんて何のことだらう一體何のことだらう。あの馬鹿が首をくくるのだらうか。此奴つあ突きとめなくちや！出来るだけ早く——根こそぎ突きとめなくちや。」

第七章

夫と情夫とがキツスする

彼は恐しくあはて、「突きとめ」やうとした。

「今朝俺はひどく參つて居た。今朝俺は實狀を悟る餘裕がなかつた。」と彼は初めてリーザを見た時のことを思ひ出して考へた。「だが、今は突きとめなくちや。早く突きとめる爲めに彼は馭者にトルソーツキ

イの止宿へ連れて行けといはうと思つたが考へ直してかうきめた。「いや、彼が来た方がいゝ。そして、その間に俺は急いでこのいま／＼しい裁判の一件を片づけやう。」

彼は熱狂的に着手した。ところが、今度は彼自身、自分が非常に茫然として居て、凡んどそれをする事が不可能なことに氣がついた。五時に成つて、御飯を食へに出た時、彼は初めて可笑しなことが胸に浮んだ。といふのは、彼は自身訴訟に干渉をし、法廷を騒ぎ廻り、もう既に彼から隠れるやうにして居る辯護士を探し立てたりして、實際、事件の邪魔をして居るだけのことだらうとのことだつた。彼は自分の想像を樂しげに笑つた。「若しこんなことを昨日考へたのだつたら、俺は恐しく苦んだことだらうが」と彼は一層樂しげに附け加へた。愉快だつたに拘らず、彼は段々上の空に成り、又段々せか／＼して來た。考へ込んでしまつた。彼は落ちつかず、かう思ひ、あゝ考へたが、彼の心を満足さすやうなものに到着することは出来なかつた。

「あの男の正體を突きとめなくちや！」と彼は遂に心をきめた。「あの男の正體を突きとめてから心をきめなくちや。決闘だ！」

七時に家へ歸つたが、パーウエル・パーウロウイツチが來て居なかつたので、ひどく驚いた。それからひどく腹が立つたが、それから後も依然としてひどくふさいで居た。遂に、彼は心からこわく成り出した。

「どう成ることやら、どう成ることやら！」と彼はしよつ中時計を眺め乍ら、部屋を歩き廻つたり、ソ

フアーに體をのぼしたりして繰り返した。九時頃に成つて、とう／＼パーウエル・パーウロウイツチが現はれた。若し此奴が俺をだまさうと思つて居るのなら、今日位都合のいゝときはない。――俺は今ひどく亂れて居る。」と彼は思ったが、勇氣は恢復し、再び氣が引き立つた。

どうしてこんなに遅く成つたのかといふ、彼のてきばきした、快活な問ひに對して、パーウエル・パーウロウイツチは苦笑ひして、昨夜の所作とはまるで違つて、遠慮なく、氣輕に腰かけ、すぐそばにあつたほかの椅子の上に、裏章のついた帽子をぞんざいに放つた。ウエリチャーニノフは忽ちこの遠慮の無い、氣輕な様子に氣がついて、それに注意した。

靜かに、要領よく、朝現はしたやうな興奮は更に無く、彼は報告でもするやうに、リーザを連れて行つた話、親切に引き取つて呉れたこと、彼女の爲めに非常に好いだらうといふことを話し、徐々に、リーザのことは忘れたやうに、氣がつかない内に話をすつかりバガレーリツエフ家の上に轉じた。――彼等がどんなに愛す可き人々であるか、随分久しい知り合ひなること、バガレーリツエフは非常に有名な有力な人であること等。パーウエル・パーウロウイツチは上の空に聞いて居て、不機嫌な、するい冷笑を浮べて、相手を、時々上眼を使つて見上げ一居た。

「あなたは感情家だ。」と彼は特に厭味な笑を浮べてつぶやいた。

「だが、あなたは今日は少し不機嫌ですね。」とウエリチャーニノフは心外に思つていつた。

「私は外の人のやうに不機嫌に成つてはいけないといふ理由があるでせうか！」とパーウエル・パーウ

ロウイツチはさういはれるのをだけ待つて居たかのやうに、出し抜けに叫んだ。

「あなたが御好きなやうになさるのを誰もいけなすとは申しません。」といつてウエリチャーニノフは笑つた。「何かあつたのですか。」

「さうなのです！」と一方は、何かあつたのを誇るやうに叫んだ。

「どうしたのです。」

パーウエル・パーウロウイツチは暫らく答へなかつた。

「ステパン・ミハイロウイツチが人をだましたのです……バカウトフ、あの上流の、上品な、ペテルスブルグの若い紳士がね。」

「又會へなかつたのですか。」

「いえ、今日は會へました。初めて私は通されまして、彼をつく／＼眺めました……彼は死んでたのですよ！」

「何です！ バカウトフが死んだのだつて。」とウエリチャーニノフは恐ろしく驚いたものゝ、何故彼がそんなに驚いたのか、はつきりした理由はなかつた。

「さうです。六年間の眞實な、變らない友達でしたよ！ つい昨日、凡んど正午頃に死んだのですよ。私は少しも知りませんでした！ 私は多分その時刻に病氣見舞に出かけてたところでせう。明日祈禱や葬式がありませう、もう棺の中へ入つて居ました。棺は金の飾りが附いた眞赤なびろうどで裏が附いて

居ました……彼は脳の熱病で死んだのです。私は通されました——通されて、彼の顔をつくく眺めました！ 私は戸のところで、親友だと申しました。だから、私は通されたのです。六年の長い間、眞實の、變らない友だつた彼のこの態度をどう考へたらいいでせう。私がベテルスブルグへ来たのは、只彼に會ひ度い爲めだつたかも知れませんのに！」

「だが何だつて彼を怒つて居るのです。」とウエリチャーニノフは笑つた。「彼は故意と死んだ譯でもありませんのに！」

「だが、私は残り惜しい気持ちで申します。彼は大事な友達でした。私に取つて彼はかうでした。」

かういつて突然、思ひ掛けなく、パーウエル・パーウロウイツチは二本の指を、はげた額に角のやうに當てがつて、小さい聲で、長つたらしく笑ひをはじめた。彼は狂ふやうな悪意に満ち、ウエリチャーニノフの顔を眺め乍ら、丸三十秒間もさうして居た。ウエリチャーニノフは幽霊にでも會つたやうにぎくりとした。だが彼の麻痺は極一瞬間のことで、ずう／＼しい、落ちつき拂つた嘲笑が靜かに彼の唇に浮んだ。

「何ですか。それは」と彼はさりげもなく、ゆつくりした調子で訊ねた。

「これですか——角です！」とパーウエル・パーウロウイツチはやつと額から指を取り去つていひ放つた。

「それは……あなたの角ですか。」

「私のです。貰ひものです！」とパーウエル・パーウロウイツチは胸の悪くなるやうなしかめつ面をしていつた。二人は黙つた。

「あなたは膽つ玉が座つて居ますよ！」とウエリチャーニノフはいつた。

「飾りを御覧に入れたからですか。何か出したらいゝでせう！ T——で、丸一年間、毎日あなたを御もてなしゝたのだから。一杯飲ませて下さい。のどが乾いちやつたから。」

「よろしいとも。早くさうおつしやれば好かつたのに。あなた何を召し上りますか。」

「何故あなたとおつしやるのです。私達といつて下さい。一緒に飲まうぢやありませんか。」とパーウエル・パーウロウイツチは挑むやうな、同時に變に落ちつかぬ顔つきで彼の顔を眺め乍らいつた。

「三鞭にしますか。」

「勿論。未だウオツカを飲む時刻ぢやありません……」

ウエリチャーニノフはゆつくり立ち上つて、ベルを鳴らしてマーヴラを呼び、指圖をした。

「九年も會はなかつた後の、この喜ばしい遭遇を祝つて飲まう。」と、パーウエル・パーウロウイツチは要りもしない、取つてつけたやうな忍び笑ひを浮べていつた。「もうあなただけが、私に残つて居る唯一の友達です！ ステバン・ミハイロウイツチ・バガウトフは今はなし！ 詩人もいつて居るやうに——

「偉大なるパトロークル(譯者註、ホーマー・イリアッド中の人物。トロイ戦争に於ける希臘の首領にして、アキレスの友なり。)は今はなく

卑しきサーサイテイズ(譯者註、同じくホーマー・イリアッド中の人物、醜惡な口汚ない希臘人。アキレスに殺さる。)ぞ今も世にあり！」

そして、「サーサイテイズ」といひ乍ら、彼はおのが胸のあたりを指でつゝいた。

「遠慮なしにしゃべるが、この豚野郎め。俺は當てこすりは好きぢやない。」と彼は一人考へた。彼は腹が立つて来て、いつ迄も我慢して居ることが出来なくなつた。

「ね」と彼はいま／＼しいといつた調子でいつた。「あなたはステパン・ミハイロウイチ(彼は今や單にバカウトフといふことは出来なかつた。)を非難なさるから、悪いことをした男が死んだのを悦んでいらつしやるのだと思ひました。どうしてそれを怒つて居るのです。」

「悦んで居るのですつて。どうして悦ぶ筈がありません。」

「悦んでいらつしやるに違ひないやうに私には思へます。」

「へつ——へつ！ 私の気持ちを、あなたはすつかり誤解して居ます。何處かの賢人がいつたやうに、死したる敵はよし、されど、生ける敵は更によしですからね。へつ——へつ！」

「だがあなたは五年間毎日彼に會つて居たでせう。見飽きる程、彼に會つて居たでせう。」とウエリチャーニノフは、意地悪く、づけ／＼いつた。

「だが、私がその時知つて居たとは思はないでせう……私が知つて居たとは思はないでせう。」とパーウエル・パーウロウイチは宛かも、暫らく待ち兼ねて居たことを訊ねられたのを悦んだといつたやうな

鹽梅に、突然口を沁らせた。

「ちや、私のいつたことをどう思つたのです。」

すると、彼の顔に、或る全く新しい、思ひ掛けないものがほの見えた。それがその時迄意地悪さうで、卑しいしかめ面をして居た彼の顔色を一變したやうに思はれた。

「ちや、本當に知らなかつたのですか！」と、ウエリチャーニノフは、不意を打たれ、どきまぎしていつた。

「知つてるものですか。知つてるものですか。あゝ、ジュピターの種族！ あなた方には人間は犬見たいなものに過ぎません。そしてあなた方は自分のけちな根性から推して何ものをも批判なさる。さうですよ！ さうでせう！」さういつて、拳を固めて、狂亂したやうにテーブルをぼか／＼なぐつたが、すぐに周章狼狽して、心配しさうな顔に歸つた。

ウエリチャーニノフはきつとした様子を見せた。

「御聞きなさい。あなたも御分りの通り、あなたが知つて居たか、知つて居なかつたかといふやうなことは、私にはまるで關係のないことです。あなたが御存知なかつたのなら、それは何しろいゝこと……だが、何だつてあなたが好んでその秘密を私に御洩しになるのか分りません。」

「何も私は……怒らないで下さい。何も私は……」とパーウエル・パーウロウイチはさしうつつむいてつぶやいた。

「ヴァーヅラが三鞭を持つて入つて来た。」

「そら来た！」とパーウエル・パウロウイツチは叫んだが、彼女が入つて来たので、ほつとしたらしい様子だつた。「おい、コップを。結構、結構！外にもう用はないや。もう栓も抜いてあるね！いや、どうもありがたう！さあ、もういつてもいよよ！」

そして元氣を恢復して彼は再びウエリチャーニノフをすう／＼しい顔付きで眺めた。

「さあ、さあ」といつて彼は突然くす／＼笑つた。「この話は非常に面白くつて、あなたがおつしやつたやうな「全然あなたに無關係な話では決してないといふことを打ち開けなさい。若し今私が立ち上つていろんな話をせずに立ち去るやうなことがあつたら、あなたはがっかりなさるでせう。」

「なあにがっかりしやあしませんよ。」

「いやそれは嘘だ」と、パーウエル・パウロウイツチの微笑が語つて居た。

「さあ、一杯やりませう。」さういつて彼は自分のコップにいつた。

「今はなきわれ等の友、ステパン・ミハイロウイツチの健康を祈つて飲まう。」と彼はコップを取り上げいつた。

彼はコップを舉げて、それを飲んだ。

「私はそんな祝盃は上げられません。」とウエリチャーニノフはコップを下に置いていつた。

「どうして舉げられないのです。愉快的祝盃だ。」

「ね、君は酔つばらつて来たのぢやありませんか。」

「少しやつて来ました。だが、それがどうしたのです。」

「別に何でも無いのですが、殊に今朝は餘計さう思つたのですが、あなたはナターリヤ・ワシーリエワナさんを失つたことを、心底から悲しんで居ますね。」

「あれをなくしたことを今心から悲しんで居ないと誰がいひました。」パーウエル・パウロウイツチはばね仕掛にでも掛つたやうに又跳び出した。

「さういふ積りではなかつたのです。だがあなたはステパン・ミハイロウイツチに就いて誤解して居るかも知らないといふことは承知しなければいけませんよ、そして、それは——重大な事です。」

パーウエル・パウロウイツチはせゝら笑つて、目をしばたいた。

「どうしてステパン・ミハイロウイツチのことが分つたか、御話しませうか。」
ウエリチャーニノフは赤く成つた。

「實際、そんなことは私に關係のないことです。」「奴を追つばらつた方がよくはないか。酒やなんかも」と彼はかつと成つて考へて、一層赤い色に成つた。

「よろしい！」とパーウエル・パウロウイツチは宛かも彼を鼓舞しやうとするが如くにいつて、自分で又一杯注いだ。

「分つた仔細をすぐに御話して、あなたの熱望を満足させませう……あなたはものに熱する質ですから

ね。あなたは恐しく熱する質ですよ！　ヘッ——ヘッ！　一寸巻煙草を一本下さい。三月以來ずつと……

「さあどうか。」

「私は三月以來零落しました。その仔細を御話ませう。——聞いて下さい。肺病は君も知つてゐる通り」と彼は段々親しい調子に成つて「可笑しい病氣だ。肺病患者は俺は明日死ぬかも知れないといふやうな疑ひは凡んど抱かない。さうして突然ころつと參つてしまふ。ね、ほんの五時間前には、ナターリヤ・ワシリエヅナは、三十哩隔つて居る叔母を訪問する計畫をして居ました。あなたも多分御存知でせうが、ナターリヤ・ワシリエヅナは、三十哩隔つて居る叔母を訪問する計畫をして居ました。あなたも多分御存知でせうが、女によくあることですし、又、その崇拜家にもよくあることのやうですが、戀文といふと、どんな層でもとつて置く習慣、といふよりも、悪習がありますね……ストローヴに入れてしまつた方がずつと安全ぢやありませんか。ところが、どんな紙切れでも注意して、箱や化粧箱の中へしまひ込んで置き、おまけに年や月の見出しをつけ、順序立つてとつて置くのです。それが彼等には、一つの慰さめであるかどうか——それは知りませんが、疑ひも無くそれは快い思ひ出の爲めです。死ぬ僅か五時間前に叔母を訪ねに出掛ける話を極めやうとして居た位ですから、ナターリヤ・ワシリエヅナは最後迄死ぬことは頭無かつたのです。彼女は依然としてコツホさんを待つて居ました。かういふ風にしてナターリヤ・ワシリエヅナは死にましたが、青貝と銀をちりばめた黒檀の箱が彼女の箆笥の上に残つて居ました。それは綺麗な箱で、錠や鍵が附いて居て、あれの御婆さんが彼女に寄越した寶物なのでした。その箱の中

に万事が、全たく万事が、もうすつかり、例外なしに、年月日も、この二十年間のことがすつかり明かに成つて居ました。そしてステパン・ミハイロウイツチは確かに文學の嗜好をもつて居たので（現に彼は或る新聞へ熱烈な戀物語を送りました。）彼が寄越したものは何百といふ數に上つて居ました——實際それは五年間に渡つて居りました。ナターリヤ・ワシリエヅナ自身の手で註の附いて居るものもありました。亭主の身に成れば驚き入りますよ。どう思ひますか。」

ウエリチャ・ミノフは急いで思ひ返して、彼は一本も、どんな手紙も、ナターリヤ・ワシリエヅナにやつたことは確かに無かつたと思つた。彼はベテルスブルグから二度手紙を書いたことがあつたのだけれど、二人の間の約束に従つて、細君と夫と二人の宛名にした。彼の追放を命じたナターリヤ・ワシリエヅナの最後の手紙には彼は返事を書かなかつた。

話をすませると、パーウエル・パーウロウイツチは、せつくやうな、待ち焦れたやうな微笑を浮べて來る一分間許り息を入れた。

「何故私の問ひに答へて下さらないのです。」と彼は、如何にも心懸りな様子で、遂に口を切つた。

「どういふ問です。」

「その箱を開いた時の夫の驚きの話です。」

「お、それが私に何の関係がありません！」とウエリチャ・ミノフはだといつた所作をして叫び、立ち上つて、部屋を歩き廻つた。

「あなたは今きつと、自分の恥を晒すなんて豚見たいな奴だと思つていらつしやるに違ひない。へつ—
—へつ！ あなたは實際氣むづかし屋だ……あなたは。」

「私はそんなことは何にも考へて居ません。それどころか、あなたは自分に仇をした人間が死んだので
ひどく腹を立つていらつしやるし、それに、随分酔つて居られる。何も異つたことがあるとは思へませ
ん。あなたが何故バガウトフが生きて居たらばと思はれたか、私にはよく分ります。私はあなたの苦し
みを尊敬しますが、然し——」

「何故、私がバガウトフに會ひ度がつたのだと思ひますか。」

「そんなことは私の知つたことぢやありません。」

「あなたは屹度、決闘を考へて居たに違ひない！」

「馬鹿な！」と、段々激して来て、ウエリチャーニノフは叫んだ。「上品な人は……そんな場合には、自
分の品位を落すだけに止まるやうな、可笑した御喋り、まぬけた道化、馬鹿げな不平、胸が悪くなるや
うな諷刺を弄せず、公明に、眞直に、直截に——上品な人間らしく振舞ふと思ひます。」

「へつ——へつ！ だが、私は恐らく上品な人間ではありませんまい！」

「それも私の知つたことぢやありません……だが、何だつてバガウトフが生きて居ればいゝと思つたの
ですか。」

「友達ですもの、會ひ度いと思つたのですよ。酒の一本も取り寄せて、一緒に飲んだことでせうよ。」

「バガウトフはあなたと一緒に飲むなんてことはしなかつたでせう。」

「何故です。ノーブレス・オブ・リーグですよ！（譯者註、貴族には貴族なる高尚、寛大の行動をなす可き義務
の意。）現にあなたは私と一緒に飲んで居て下さる。あなたと彼と何處か變つたところがありますか。」

「私はあなたと一緒に飲みはしなかつた。」

「何だつて突然そんなにぶるのです。」

ウエリチャーニノフは突然神経質な、いら／＼したやうな笑をはじめた。

「へん！ あなたは實際『兇暴なタイプ』ぢやない！ あなたは『永遠に夫』たるに過ぎないと思ひま
した。」

「『永遠の夫』つて、どういふことなのです。」とパーウエル・パーウロウイチは俄かに聞耳を立てた。

「いや、それは一種の夫のことです……御話すれば長いこと。御歸りに成つた方が好うござんせう。も
う御歸りに成つてもいゝ時刻で、私はもう御別れし度くて仕様がなないので。」

「兇暴なといふのは、あなたは『兇暴』ていひましたね！」

「あなたのことを『兇暴なタイプ』だと申しました。諷刺的に分つたのですよ。」

「『兇暴なタイプ』て何のことです。どうか聞かせて下さい。後生だから。御願ひだから！」

「いや、又今度！」とウエリチャーニノフは俄かに恐しく腹を立つて叫んだ。「もう御歸りに成る時刻で
す。歸つて下さい！」

「いや、帰りません。」パーウエル・パウロウイツチはむかつ腹を立てた。「私に飽き／＼なさつても、私は帰りません。私達は一緒に飲んで、乾盃しなくちやなりませんもの！一緒に飲んでから、私は歸ります。未だ一緒に飲みもしない内に歸ることは出来ません！」

「パーウエル・パウロウイツチさん！今日は歸るので、歸らないのですか。」

「歸ることは歸りますが、先づそれよりも一杯やりませう！あなたは前と一緒に飲むことは厭だとおつしやいましたが、私はあなたと一緒に飲み度いのです！」

最早しかめ面をしてなければ、くすくす忍び笑ひもして居なかつた。彼は俄かにすつかり變り、氣品も様子も、一瞬間前のパーウエル・パウロウイツチと別人のやうに成つたので、ウエリチャー・ニノフはあつげに取られた。

「さあ一緒に飲みませう！厭だなんておつしやるな」とパーウエル・パウロウイツチはウエリチャー・ニノフの手をしっかりと握り、變な顔をしてその顔を眺め乍ら、しつこくいひ張つた。

酒を飲むだけでおさまらなくなつて來た。

「飲んでもようござんす」とウエリチャー・ニノフはつぶやいた。「だが飲むといつたとて……これ位しきしか残つてないでせう……」

「丁度二杯位残つて居ます。濃いけれど、乾盃して飲みませう！さあ、あなたのコップを御取りなさ

301

二人はコップを觸れ合はせて、それを飲み乾した。

「かうなつたからには——かうなつたからには……あゝ！」

パーウエル・パウロウイツチは手で自分の額をしかとらへて、暫らくさうして居た。ウエリチャー・ニノフは、彼が今に、口を開いて、最後の語をいひ出すだら、と思つて居た。だがパーウエル・パウロウイツチは何にもいはず、只彼をまじまじ眺めて、又例の皮肉な、するい微笑を浮べた。

「何だつてんです。人をからかつて居ますね！」とウエリチャー・ニノフは、荒々しく足踏して叫んだ。

「まあ、大聲を揚げなさんな。何の爲めに大きな聲を立てるのですよ。」とパーウエル・パウロウイツチは急しい所作をして叫んだ。

「ふざけちや居ませんよ！今私はあなたを何と思つて居るか分りますか。」

さういつて彼は突然ウエリチャー・ニノフの手を捉えて、それをキツスした。ウエリチャー・ニノフはあつげに取られた。

「今、私のあなたに對する氣持ちはかうなのです！さあ、私はもうあなたが行けとおつしやればいつでも歸ります！」

「一寸待つて下さい！」とウエリチャー・ニノフははつとして叫んだ。「御話するのを忘れましたが……」

パーウエル・パウロウイツチは戸口から引き返した。

「ね」とウエリチャー・ニノフは眞赤に成り、目をそらして、急いでいつた。「明日パーガレーリツエフ家

へ行つて下さらなくちや、挨拶や御禮にね。是非……」

「参りますとも。よく分りました！」とパーウエル・パウロウイツチは、そんなことを注意するには及ばないといつたやうに急いで頭を振つて二つ返事で承諾した。

「それにリーザさんもあなたに非常に會ひ度がつて居ますし。リーザさんに約束したのですよ——」

「リーザですつて！」とパーウエル・パウロウイツチは後へ戻つた。「リーザは私に取つてこれ迄如何なるものであり、今も如何なるものであるか分りますか。如何なるものであつたか、そして今も如何なるものか、えつ！」と彼はやにわに、狂亂したやうに叫んだ。「だが……だが、それは又あとで、あとでいゝことは皆あとにしてですが、一緒に飲んだだけでは駄目です。もう一つ御願ひしたいことがあるので……」

彼は帽子を椅子の上に置き、今さつきもしたやうに、暫らくあへぎ乍ら、彼をじつと見詰めた。

「キツスして下さい！」と彼は突然いつた。

「あなた酔つばらつて居ますよ！」とウエリチャーニノフは後退りしていひ放つた。

「酔つて居ますが、キツスして下さい！ さつき、あなたの手をキツスして上げたぢやありませんか。」

頭を打たれて目を廻した時のやうにウエリチャーニノフは暫らく黙つて居た。だが突然、丁度顔が肩の高さのパーウエル・パウロウイツチのところへ屈んで、その唇にキツスしたが、アルコールのほ

ひがぶん／＼した。それにも拘らず彼はキツスしたい氣がしなかつた。

「ね……」とパーウエル・パウロウイツチは酔つた眼を輝かし、酔つた紛れに又叫び出した。「ね、私はその時思ひ出したよ。彼もですね。あの男もそんなことをするのだと思ふと……こんなことがあつてから誰を信じる事が出来ませう！」

パーウエル・パウロウイツチはわつと許りに泣き出した。

「だから、今と成つてはあなただけが私の唯一の友達です！」

——といふ言葉を残し、帽子を持つて彼は部屋を駆け出した。ウエリチャーニノフはパーウエル・パウロウイツチが最初訪ねて來た後と同じく、暫らくその儘立つて居た。

「なあに、酔つばらつた馬鹿者に過ぎないのだ！」パーウエル・パウロウイツチのことは頭から拂ひのけるやうに、手を振り動かした。

「實際さうなのだ」と着物を脱いで、床に入り乍ら、力を籠めて繰返していつた。

第八章

あくる朝ウエリチャーニノフは部屋を歩き廻り乍ら、バガレーリツエフ家へ行くのにおそくならないやうに来る約束をした。パーウエル・パーウロウイツチを待つて居た。彼は煙草をくゆらし、珈琲をすゝり等して、自分を、朝目を覺して、昨夜受けた侮蔑を片時も忘れることが出来ない人のやうな氣が絶えずして居た。「ふむ！……奴はすつかり感づきやあがつたので、リーザで敵打ちする氣なのだらう！」と思つて、ぶるぶるとふるへた。

かのあはれな子供のいぢらしい姿が、うれひを含んで、ちらと彼の心に立ち現はれた。間もなく、二時間経たぬ内に、又わがリーザの顔を見ることが出来ると思ふと彼はどき／＼した。「なあに、兎や角いふものはないのだ！」と彼はきつぱり心を定めた。——「今やリーザは私の全生命、全目的なのだ！侮辱や過去の思ひ出が何するものぞ、今日迄の俺の生涯は如何か。混亂と悲哀だ……だが今や、萬事眞面目が一新した！」

だが、熱狂して居たにも拘らず、次第に彼は考へ込んだ。

「奴はリーザを使つて俺を苦めて居る——さうなのだ。それに奴はリーザも苦めて居る。さういふ風にして奴は萬事の復讐の爲めに俺を粉々にするつもりなのだ。ふむ！……勿論昨日のやうな眞似はさせちや置かない」——彼は突然眞赤に成つた——「それに……もう十二時なのに、未だやつて来ない。」

彼は長い間、十二時半迄も待ち、次第にひどくふさぎ込んだ。パーウエル・パーウロウイツチはやつて来なかつた。遂に、さつきから彼の心に動いて居た、パーウエル・パーウロウイツチは又昨夜のやう

な芝居を打ち度いので故意と今迄来ないのだといふ考へが加はつて、彼は腹を立ててしまつた。「奴は俺が奴を當にして居ることを知つてるのだ。リーザは今頃どうして居るのだらう。奴を連れずに、どうしてリーザの前へ出られよう。」

彼は遂に辛抱出来なく成つて、一時間、一人でバクロフスカヤホテルへ駆け出した。止宿で聞くと、パーウエル・パーウロウイツチは昨夜家にとまらなかつたので、今朝九時に成つてやつて来たが、十五分位しか居ないで又出て行つたとのことだつた。ウエリチャーニノフはパーウエル・パーウロウイツチの戸口に立つて、召使のいふことを聞き乍ら、錠のかゝつて居る戸のハンドルをわれともなしに廻してそれを引つばつたり、入れたり等して居た。自分のして居たことに氣がつくと、呪ひ言を口にして、召使にマリヤ・スイソエヴナのところへ連れて行つて呉れと頼んだ。だが、お主婦は彼がそこに居ると聞いて、ちよ／＼出て来た。

彼女は氣の好い女だつた。ウエリチャーニノフがあとでクラヴディヤ・ペトロヴナに、彼女と話した顛末を告げる時に批評したやうに「大様な女」だつた。マリヤ・スイソエヴナは昨日、子供を連れて出掛けてからの顛末を手短かに尋ねてから、パーウエル・パーウロウイツチの話をはじめた。彼女はかういつた。「御子さんさへなかつたら、もうすつと前に用事を済ませなさいといつて出してやつたのですけれど。あの人は亂暴なことがあつたので、ホテルを出されたのですよ。物心のついた子供が居るのに、何處からか、娘を引つばつて来るなんて好くないぢやありませんか。あの人は「事に依るとあの人は御前

「御母さんに成るぞ！」と叫んで居りました。その町娘がどんなことをしたと思ひます。その女はその人の顔に唾をひつかけたりさへしました。「その女は御前は私の娘ではないか、あの人は——」等と叫びました。

「さう！」ウエリチャーニノフはぞつとした。

「現に私が聞きましたよ。あの人はまるで覺えがなくなる。酔つぱらつては居ましたもの、子供の前でそんなことするのは本當にいけないことですよ。リーザさんは未だ小さいには相違ありませんが、心の中ではなくよ／＼と思つて居ますよ！泣くんですよ。リーザさんが死ぬ程きなく／＼思つて居ることといふとは分りますよ。せんだつても、私達のところでは恐いことがありましたよ。書記だと皆ながいつて居るのですが、前の晩にホテルで一間借りて、そのあくる朝、首をく／＼つたのですよ。金をすつかり使つちやつたとのことですがね。皆なが見に来ましたがね。パーウエル・パーウロウイツチは家に居ませんでした。子供は誰も世話する人もなしに一人で走り廻つて居りました。見るとその廊下の、人込みの中に居て皆なの後ろから覗いて、そりやな變な顔して死骸を見て居るのですよ。私は手速く此方へ連れて來てしまひましたがね。それがどうでせう——あの子は體中ぶる／＼ふるへて、こわい顔をして居ましたが、連れて來るとすぐに、氣を失つて、床の上へばたりと倒れてしまつたのですよ。あの子は苦しみ、もがきました。私は正氣に返すだけが關の山でした。一種の發作だつたのですよ。それから此方といふもの、あの子はしよつ中體が悪いづめでした。そのことを聞いてあの人は歸つて來て、あの子の體

中をつねり廻すのですよ——一體あの人は打つ方ではなく、つねる方ですからね。それから後の話ですが、一杯飲んで歸ると「私も首く／＼つて死んでしまふ。御前が無理をいふので、私は首く／＼つて死んでしまひ度くなる。この錠戸の紐ですよ。」などいつておどして、あの子を見る前で、わなわを拵へるのですよ。「するとあの子は身も世もあらぬ思ひで、きやあつといつて、小さいかひなである人に抱きついて、「もうしませんから。もうしませんから。」と大聲を擧げるのです。かはいさうでしたよ。」

ウエリチャーニノフは何か變なことがあるとは思つて居たもの、この話には、それを信じて居ることが出來ない程驚いた。

コリヤ・スイソエヴナは未だ外にもいろ／＼話した。例へば、或る時等は、コリヤ・スイソエヴナが居なかつたならば、リーザは窓から身を投げたかも知れないこともあつたとのことだつた。

ウエリチャーニノフは酔つぱらつたやうによろ／＼して家を出た。

「犬見たいに奴をぶんなぐつてやる！」彼は不圖さう思つた。そしていつ迄も一人それを繰り返した。彼は辻馬車を雇つてバガレリーツエフ家へ走らせた。途中、馬車が十字街のところ、運河の橋の近くで立ち往生した。その橋の上を長い葬式が通つて居たのだつた。そして橋の兩方の袂に數臺の馬車がごとく／＼押し合つて待ち合せ、通行人も立ち往生して居た。立派な葬式で、長いこと馬車が續いたが、見よ！或る馬車の窓に、ウエリチャーニノフ・パーウエル・パーウロウイツチの顔をちらりと認めた。パーウエル・パーウロウイツチが頭を突き出して、笑を浮べて會釋しなかつたら、彼は自分の眼を信じなかつ

たらう。彼はウエリチャー・ニノフに気が附いたことを喜んで居るらしく、馬車から彼に向つて手招きさへし出した。ウエリチャー・ニノフは辻馬車から飛び出し、人込みをかまはず、警官にかまはず、パーウエル・パウロウイツチの馬車が橋の方に駆け行くのにもかまはず、窓に向つてまともに駆けつけた。パーウエル・パウロウイツチは一人だった。

「どうしたのです。」とウエリチャー・ニノフは叫んだ。「何故見えなかつたのです。こゝへはどうして。」
「借金を返すのです。大きな聲をしないで下さい。私は借金の拂ひをして居るのです。」パーウエル・パウロウイツチはふさけて可笑しい眼付きをして、くすくす笑つた。「信義ある友、ステパン・ミハイロウイツチのなきがらを送つて居るのです。」

「馬鹿な！ 酔つ拂ひの、俯抜けだ。君は」ウエリチャー・ニノフは、暫しあつげに取られて居たが、前よりも大きな聲が叫んだ。「すぐに出て、私と一緒に辻馬車には乗りなさい。」

「駄目です。義務ですから……」

「引きづり出しますよ！」とウエリチャー・ニノフはわめいた。

「そんなことをすると私は大聲を挙げますよ！」とパーウエル・パウロウイツチは馬車の一番遠い隅つこにへばりつき乍ら、遊戯か何かの積りで、さつきのやうにふさけてくすくす笑ひ乍らいつた。「おい！ 危ない！」と巡査が叫んだ。

實際、向うの橋のはづれのところで、一臺の馬車が行列を突つ切らうとして騒動を引き起した。ウエ

リチャー・ニノフはしらすには居られなかつた。ずん／＼続く馬車と群衆とに操られて、彼は忽ちの間に遠くへやられてしまつた。呪ひごとを口にしながら、彼は辻馬車のところへ戻つた。

「いや、何、あんな奴を連れて來られなかつたからつて心配なことぢやない！」と依然として面喰つた氣持ちで考へた。

彼がクラヴダイヤ・ペトロウナにマリヤ・ストソエウナが話したことを語り、又、葬式での奇遇を話すと、彼女はひどく考へ込んだ。

「あなたの爲めに心配するのですが」と彼女はいつた。「あなたはあの人とすつかり関係を御絶ちにならなくちやいけませんよ。それも早ければ早い程ようございます。」

「なあと彼奴は酔つ拂ひの馬鹿ものに過ぎませんよ！」とウエリチャー・ニノフは熱中して叫んだ。「私が奴を怖がつて居るか何ぞのやうに！ リーザといふものゝあるのに、どうして彼と關係が切れませう。リーザのことを考へて下さい！」

ところがリーザは病氣でふせつて居た。彼女は昨夜から熱が出たので、今朝町のある有名な醫者のところへわざわざ使ひをやつて、今はその醫者の來るのを待つて居るところだつた。これでウエリチャー・ニノフはすつかり心配のとりこに成つた。

クラヴダイヤ・ペトロウナは彼を病人のところへ連れて行つた。

「私は昨日リーザをよく氣をつけて見て居ましたが」と彼女はリーザの部屋の外に立ち止つていつた。

リーザさんは氣位の高い、内氣な子供ですよ。此處に居ること、御父さんに捨てられたことを羞しがつて居るのです。病氣に成つたのも全たくその爲めだと私は思ひますがね。」

「何が捨てられたのです。どうしてリーザを捨てたとおつしやるのです。」

「彼が此處へ來させたといふそのことが、見ず知らずの人間の中へ、あなたに連れられてさ……そしてそのあなたもまるで見ず知らずの人間前、といつて悪ければ……」

「だが、連れて來たのは私、私が厭態なしに連れて來たので、私はあなたのは思ひませんが——」
「まあ、リーザさんのやうな子供だつてそれに氣が付いて居ますよ！ パーウエル・パーウロイツチさんは決してやつては來ないと、私は思つて居ますよ。」

リーザはウエリチャー・ニノフ一人なのを見ても驚きはしなかつた。彼女は憂ひを含んだ微笑を浮べただけで、熱であつい、小さな頭を壁の方へ向けた。彼女はウエリチャー・ニノフがおづくし乍ら、彼女を慰さめるのにも、明日は間違ひなく彼女の御父さん連れて來ると熱心に約束するのにも應答しなかつた。彼女の側を離れると、彼はわつと泣き出した。

日が暮れてから醫者は來た。病人を診察してから、彼はもう初めの語から——もつと早く呼びに來なかつたのは失錯だつたといつて皆なを驚かせた。子供は昨夜初めて悪く成つたのですと話しても、初めは中々信じなかつた。

「今日の経過如何んが重大です。」と彼は最後にいつた。いろ／＼指圖をしてから、明日又成る丈け早く

來ると約束して立ち去つた。ウエリチャー・ニノフはどうしても今夜は此處に居るといつたが、クラヴディヤ・ペトローヴナはもう一度「あの化物に來るやうに誘つて來て下さい。」と頼んだ。

「もう一度當つて見るか。」とウエリチャー・ニノフは荒々しく受答へした。「なあに、今度は彼の手足をしぼつて、抱いて連れて來ますよ！」パーウエル・パーウロイツチの手足を縛つて此處へ連れて來てやらうといふ考へが彼の頭にこびりついて、それがやり度くて、矢も楯も堪らなかつた。「今私は彼に對してちつとも濟まないといふ氣がして居ません！」彼は別れを告げ乍ら、クラヴディヤ・ペトローヴナにさういつた。昨日此處でいつた意氣地の無い泣き言は皆な取消します。」と彼は憤然として附け加へた。

リーザは眼を閉ぢてふせつて居て、眠つて居る様子だつた。好くなつたやうに思はれた。ウエリチャー・ニノフが別れを告げ、せめて着物の端なりとキツスしたいものと思つて、彼女の頭の上のところへ用心しい／＼屈むと、彼女は彼を待つて居たかのやうに突然眼を開いて、彼は私語いた——
「連れて行つて下さい！」

それは穩かな、あはれつぽい歎願で、昨日のやうないら／＼した調子は微塵も無かつたけれど、彼女が彼女の願ふことをして呉れはしまいといふ確信を、ウエリチャー・ニノフはその内に認めることが出來た。ウエリチャー・ニノフは身も世もあらぬ思ひで、そんなことは出來ないといふことを彼女に納得させやうとし出した。

黙つて彼女は眼を閉ぢ、もう何ともいはなかつた。それは宛かも、彼の姿が眼に留らず、彼のいふこ

とが聞えないかの如くであつた。

ホテルスブルグに入ると彼は馭者にすぐにバクロフスカヤ・ホテルへ連れて行けといつた。十時だつたが、パーウエル・パーウロウイツチは止宿に居なかつた。ウエリチャーニーフは病氣にでも成りさうな不安な氣持ちで、彼を待ち受け、廊下をあちこち歩いて、まる三十分費した。遂にマリヤ・スイツエヴナが、パーウエル・パーウロウイツチはきつと、明日の朝早くでなければ歸つて來ますまいといつた。「それでは朝早く参ります。」とウエリチャーニーフは心を定めて、夢中で家路に就いた。

だが、彼の借り間の戸のところまでマールツラに、昨日いらした方が十時頃からあなたを待つて居らつしやいますと聞いた時の彼の驚きは如何許りだつたか。

「そして此處で御茶を召し上つてから、又、酒を取つて來てくれとおつしやつて、その御金に青さつを一枚御渡しに成りました。」

第九章

幽 靈

パーウエル・パーウロウイツチは納り返つて居た。彼は昨日と同じ椅子に腰掛け、巻烟草をくゆらし、

酒のびんから、おつもりの四杯目をついだところだつた。急須と、未だ飲み乾していない御茶のコップとがすぐそばのテーブルの上に立つて居た。赤く成つた顔は喜色を浮べて居た。暖かつたので、上着も取つて、ジャケツの儘で腰掛けて居た。

「失禮！ 失禮！」と、彼はウエリチャーニーフを見て、飛び上つて上衣をつけ乍ら叫んだ。「大いに愉快にやらうと思つて、脱いだので……」

ウエリチャーニーフは威嚇するやうな顔して彼のところへ行つた。

「未だすつかり酔つ拂つちやつたのではないのですか。未だ話が分りますか。」

パーウエル・パーウロウイツチは少しどぎまぎした。

「酔つ拂つちや居ません……死んだ人を追懐してやつて居たのですが——酔つ拂つちや居ません。」

「話を聞いて下さいませるか。」

「御話を承りに聞たのですから。」

「ちや、初めつから、短刀直入に申しますが、あなたはやくざ者、大悪者だ！」とウエリチャーニーフは叫んだ。

「初めがそんなで、御しまひはどんなです。」と、パーウエル・パーウロウイツチはおぢけた様子でいひ張つたが、ウエリチャーニーフは彼のいふことに頓着せず、叫び続けた。

「あなたの御娘さんが死にかゝつて居ます。悪いのです。あなたは御娘さんを見棄てたのですか。」

「本當に死にかゝつてゐるのですか。」

「ひどく悪いのです。危いのですぜ！」

「恐らく何か一寸した發作で……」

「馬鹿なことをいつちやいけません！ ひどいのですよ！ 危ないのですよ！ これ迄に顔を出してないなんといふことは不埒な話で……」

「よくして貰つた御禮をいひにとおつしやるのでせう！ よく分りました！」——といつて彼は突然、ウエリチャーニノフの手を両手でぎゅつと握り、酔つ拂ひの涙もろさで、殆んど涙をこぼさむ許りにして、許しを乞ふが如くに叫び続けた。「アレキセイ・イウアーノウイツチさん、まあ大きな聲をしないでさ！ 私が死なうと、ネヴァア河へ酔つ拂つておつこちやうと。——大したことはない。バガリレーリツエフさんのところへは未だいつでも行きますよ……」

ウエリチャーニノフは氣を落ちつけ、少し自制した。

「あなたは酔つ拂つて居ますよ。あなたのおつしめることはよく飲み込めません。」と彼はきつぱりいつた。「私はいつでもあなたというく話合つて、意志を疎通し度く思つて居ます。實際ですよ。成り丈け早く話をつけたいのです。……實際私は……だが初めに斷つて置きますが、私は何とか手段を講じます。今夜はこゝにとまつてお行きなさい！ 明日の朝一緒に参りませう。逃しませんよ。と彼は又わめいた。「あなたを縛つて、抱いて連れて行きます……このソファアは如何です。」と彼は、自分が普段休む向

ふの壁に接したソファアに向ひ合つた、廣い、大きなソファアを指し乍ら息を切らしていつた。「なあに、何處でも寝られます……」

「何處でもちやありません。そのソファアに寝て下さい！ さあ、敷布と蒲團と枕とを取つて下さい。」ウエリチャーニノフはそれ等を戸棚から出して、おとなしくかひなをさしのべて居るパーウエル・パーウロウイツチに投つた。「さあ、すぐに床を御取りなさい！」

パーウエル・パーウロウイツチは重荷をしょひ込んで、どろんとした顔に、にや／＼笑を浮べ、愚圖々々して部屋の真中に立つて居た。だが又、ウエリチャーニノフにけんつくを食ふと、彼はにわかにな速度で動き出した。テーブルを押し戻し、溜息を吐いたり、うなづたり等しながら敷布を擴げて、床を取り出した。ウエリチャーニノフは彼をすけに行つた。訪問者の恐慌とよくいふことを聞くのとで、彼は幾らか氣が濟んだ。

「コツプの酒を飲んでしまつて。御休みなさい。」と彼は命令を下した。彼は何だか命令せずには居られないやうな氣がした。「あなたその酒を買ひにやつたのでせう」

「さうです。……あなたが取つて呉れないといふことを知つて居ましたから。」

「それが分つて、下さつたのはあり難い。未だ外に分つて下さらなくちやならぬことがあります。もう一度いつて置きますが、私は手段を講じましたよ。もうこれからはあなたの戲談を我慢しません。昨日のやうに酔つ拂つてからキツス等すると承知しません。」

「よく分つて居ます。あんなことは二度と出来ることぢやありません。」パーウエル・パウロウイツチはくすくす笑つた。

それを聞くと、部屋を大股に歩き廻つて居たウエリチャーニノフは眞面目くさつた顔で、パーウエル・パウロウイツチの前に立ち止つた。

「ざつくばらんに話して下さい！ あなたは譯の分つた人です。それは分りましたが、あなたは道を間違へて居ますぜ！ ありの儘に話し、眞正直に振舞ひなさい。さうしたら私はきつと、あなたがどんなことを御尋ねに成つても御答へします。」

パーウエル・パウロウイツチは又にくすくす笑つたが、それを見るとウエリチャーニノフはかつと成つた。

「御止なさい！」とウエリチャーニノフは又叫んだ。「とぼけちやいけない。あなたの氣持ちはよく分ります！ 何度も同じことをいふやうですが、きつと、どんなことでも御答へして、きつと満足の行くやうに上げてあげます。あ、私のいふことが分つて下さりさへしたら！」

「あなたがそんなに善い方だから——パーウエル・パウロウイツチは靜かに彼の方へ身を寄せた。

——「あなたが昨夜「兇猛なタイプ」に就いておつしやつたことが可笑しかつたのです！……」

ウエリチャーニノフは呪ひ言を口にし乍ら、さつきより早足に部屋をあちこち歩き出した。

「いや、呪ひなごるな。私は非常に面白く思つたので、わざ／＼確めに來たので……いひ度いことが巧

くいへませんが、許して下さいさなくちや。私がある雑誌の、文學批評の中で讀んだ、あの「兇暴なタイプ」と「平和なタイプ」のことは御存知でせう。私はそれを今朝思ひ出したのですが……忘れちやつたのですよ。正直なところをいふと、讀んだ時には譯が分らなかつたのです。これがあなたに説明して戴き度いことですが、死んだステパン・ミハイロウイツチ・バガウトフ——あれは「兇暴」なでせうか。それも「平和的」なでせうか、あなたはどちらへ入れますか？」

ウエリチャーニノフは依然として黙つたまゝで、相變らず部屋をあちこち歩いて居た。

「兇暴なタイプといふのは」と、にわかにかつと成つて立ち止つて語りはじめた。「今日あなたがなさつたやうに、譯の分らぬ、隠れた、厭な出來心、品を落すが落ちの、さうだ品を落す、ねちけた感情から墓地迄棺のあとにくつついて行くよりも、昨日私と一緒に飲んだやうに、うれしい遭遇を祝つて一緒に三鞭を飲む時に、バカウトフのコツプの中へ毒を入れることを喜ぶやうな人のことです。」

「成る程、昨日は出かかなかつた方がようござんしたよ。」とパーウエル・パウロウイツチは承認した。「だがあなたは厭に攻め立てゝ來ますね……」

「かういふ人間ではありません。」とウエリチャーニノフは、彼のいふこと等には耳を藉さずに、躍起と成つて叫び續けた。「譯の分らぬことを一人思案したり、自分の曲直を計算し、學課かなんかのやうに自分の不平の種を何處も／＼お浚へして氣を揉み、ありとあらゆる道化や馬鹿悪戯をやり、人の首にすがるやうな人間とは違ひます。——そして多分彼もそんなこと許りして日を暮してたでせうよ！ あなた

首をくゞらうとしたつて、本當ですか。」

「酔つばらうと實際出鱈目なことを申しましたが——覺えがありません。酒へ毒を入れるなんて餘り好いことではありません。信用のある文官だといふことを別にしても、御承知の通り、私には御金もありませんし、それに又結婚したく成るかも知れませんからね。」

「それに、首つり臺へやられなければなりませんからね。」

「本當に、あの面白くない眼に會はなければなりませんまいからね。尤も、此頃の法廷はいろ／＼事情を斟酌して呉れますがね、短かい話ですが、たまらない話をして上げませう。今朝馬車の中で思ひ出したのですよ。その時あなたに御話して上げたいと思ひました。今あなたは「人の首にすがる」とおつしやいましたね。あなたは多分セミヨーン・ペトロウイツチ・リフツオフを覺えて居ませう。あなたがT——にいらした時、私達のところへよく來た人ですよ。その弟は矢張り、若いペテルスブルグの御歴々でしたが、T——で知事の附添ひの役をして居ましたが、彼も多方面的な才能を持つて居ました。彼は女連の前、而かも自分の意中の人の前で、ゴルベンコといふ陸軍大佐と喧嘩をして——辱しめられたとは思ひましたが、侮辱を我慢して隠して居りました。ところがゴルベンコは彼の意中の女を横取りしてしまつて、女から結婚を申し込むといふやうなことに成つてしまひました。ところがどう成つたと思ひます。このリフツオフはゴルベンコと心底から仲が好くなり、すつかり仲直りをした許りでなく、是非私をゴルベンコの附添人にして呉れと申しました。彼は結婚式の冠を捧げましたが、二人が結婚式の冠を

ぬぐと、彼はゴルベンコにキツスして、御祝ひを述べに近づきました。ところが、知事や、立派な連中が居る前で、燕尾服を着け、髪の毛を縮らした彼が突然花むこの腹にナイフをつきさしたのです。花むこはころげ廻る！ 外ならぬ彼の附添ひがやつたのです！ 何といふ汚辱でせう！ それ許りでなく、彼はさうして花むこを突きさすと「あゝ、私は何といふことをしたらう！ あゝ私は何といふことをしたらう！」と叫んで駆け廻り、涙を雨のやうに流し、ぶる／＼全身をふるはせ、男と女の見境なく、人の首に抱きついて廻りました。「あゝ、私は何をしたらう！」と彼はいひ續けて居りました。「私は何をしたらう！」てね、へつ、へつ、へつ！ 抱腹絶倒でしたよ、ゴルベンコは可哀さうですが、でも多分あとで全快したでせう。」

「何だつてそんな話をなさるのです。」とウエリチャーニノフはむづかしい顔していつた。

「ナイフで突きさしたからつて」とパーウエル・パーウロウイツチはくす／＼笑つた。「兇暴なタイプといふわけぢやありませんやね。弱蟲ですよだつてびつくりして行儀作法を忘れ果て、知事の居る前で女の首に抱きついたりしたの。——ですもの、だが何しろ、ゴルベンコを突き刺しました。むかつ腹を立つたのですよ！ それだけの話です。」

「くたばつて了へ！」とウエリチャーニノフは、心中で何ものか、爆發したかのやうに、普段とは違つた聲で、突然わめき出した。

「畜生、君は至たく下劣な男だ。君は僕をおどさう 思つたのだな。この卑劣漢め、子供をいぢめやあ

がつて、大悪黨め！」と彼はわれを忘れ、一言々々に息を入れて叫んだ。

パーウエル・パーウロウイツチはすっかり激變して、實際眞面目に成つたやうに思はれた。唇もふるへた。

「大惡ものだとおつしやいましたね。」

だがウエリチャーニノフは既に自分のした事に氣がついて居た。

「謝りもしませうが」と彼はふさぎ、躊躇して、暫らく黙つて居てから答へた。「あなたもすぐにちやんと振舞ふやうに成られよばの話です。」

「私があるたどつたら、何にもいはずに謝りますがね。」

「さうですかね。」とウエリチャーニノフは又少しの間黙つて居てからいつた謝りはしますが、この後私はあなたに何か負ふところがあると考へるには及ばぬといふことを認めて下さるでせう。私は事柄全體に就いていつて居るので、單に、今の出來事に就いていつて居るのではないので。」

「よく分りました。どうして私に負ふところがある等と考へるのです。」パーウエル・パーウロウイツチはしよつ中下を向いて居たが、くす／＼笑つた。

「それなら至極結構です！ 酒を飲んでしまつて、床へ御入りなさい。何しろ、今夜は御歸しませぬから……」

「あゝ酒ですか……」とパーウエル・パーウロウイツチは何だか少しどぎまぎした様子だつた。然し、

彼はテーブルのところへ行つて、もうさつきに注いで置いた御つもりの一杯を飲みほした。

多分彼はうんと飲んだ後に相違なかつた。手がふるへて、床や、シャツやチヨツキの上に幾滴か酒をこぼした。だが彼は一滴も残すに忍びないといつたやうに飲み乾してから、のコツプを恭々しくテーブルに返して、いはれた通り着物を脱ぎに寢床へ行つた。

「だが、私は今こゝにとまらない方がよくありますまいか！」と、もう片々の靴を脱ぎ、それを手に持つて居たに拘らず、何故か知らそんなことをいひ出した。

「いや、おとまりなさい。」とウエリチャーニノフは、彼の方は見ず、依然として部屋を彼方此方歩き廻り乍ら、怒つたやうに答へた。

パーウエル・パーウロウイツチは着物を脱いで床に入つた。十五分後ウエリチャーニノフも床に入つて、蠟燭を消した。

彼は不安な眠りに入つた。思ひ掛けなく立ち現はれて、全事件を複雑にした新しい要素がこれ迄よりも彼を攻めさいなみ、又同時に彼は何故か知ら自分の不安を羞しく思つて居るといふことに氣がついた。彼はまどろみ掛つたが突然、さら／＼いふ音で眼を覺めた。彼はやにわにパーウエル・パーウロウイツチの寢床の方を見廻した。

部屋は暗く（カーテンは引いてあつたが）ウエリチャーニノフは、パーウエル・パーウロウイツチは寢て居るのでなく、寢床の上に座つて居るのだと思つた。

「どっしたのです。」とウエリチャーニノフは彼に呼び掛けた。

「幽霊だ。」と、少し間を置いて、凡んど聞えない位の聲で、パーウエル・パーウロウイツチはいつた。「何ですつて。どんな幽霊です。」

「あの部屋にです。何だか戸口に幽霊が居るやうな気がします。」

「誰の幽霊が。」とウエリチャーニノフは、暫らくしてから又訊ねた。

「ナターリヤ・ワシーリエヴナの幽霊です。」

ウエリチャーニノフは敷物の上に立ち上り、廊下越しに向ふの部屋を眺めた。その部屋の戸はしよつ中開いてあつた。窓にはカーテンがなく、錠戸だけたてゝあつたので、そこはずつと明るかつた。

「あの部屋には何にも居ませんよ。あなたは酔つぱらつて居ますよ。床へ御入りなさい！」とウエリチャーニノフはいつた。彼は床へ入つて、蒲團に身をくるんだ。

パーウエル・パーウロウイツチも何もいはずに床へ入つた。

「あなたこれ迄幽霊を見たことがあつたのですか。」と、十分も経つてからウエリチャーニノフは突然訊ねた。

「一度會つたことがあるやうに思ひます。」とパーウエル・パーウロウイツチはかすかな聲で答へた。又沈黙。

ウエリチャーニノフは眠つて居たのか、眠つて居なかつたのかはつきり分らなかつた。だが、凡そ一

時間が程も経つて——突然又あたりを見廻すと、又物音で眼が覺めたのかどうかは分らなかつたが、眞暗闇の中に、何か白いものが、彼のすぐそばではなく、部屋の眞中どころだつたが、彼をじつと見張つて居るやうな気がした。彼は寢床に起き上つて、まる一分間も暗闇を見詰め居た。

「パーウエル・パーウロウイツチさんかね。」とウエリチャーニノフは弱々しい聲でいつた。

突然自分の聲が沈靜の内に鳴り渡つて、暗闇が何だか彼には不氣味に思はれた。

答へはなかつたが、確かにそこには誰か立つて居た。

「パーウエル……パーウロウイツチさんか。」と彼は前より大きな聲で同じことを繰り返した。實際、大きな聲だつたから、パーウエル・パーウロウイツチがよく安眠して居たにせよ、確かに眼を覺して、返事をしたに違ひなかつたのだが。

だが又もや答はなく、白い、凡んど眼にもとまらぬ姿が自分の方に近づいて来るやうに思へた。と今度は變なことがあつた。丁度さつきあつたやうに、彼の心中で何ものか爆發したやうで、彼は一語々々で息を吐き乍ら、ぞつとするやうな、氣違ひ染みた聲で、聲を限りに叫んだ。

「君が……俺を……おどかすことが……出来ると思ふなら……俺は壁の方へ向いて……寢巻を頭から冠つて……一晩中……振り返りはしない……お前がそこに……朝迄……馬鹿見たいに……立つて居るといふのなら。……つばをひつかけろぞ……」

さういつて彼はパーウエル・パーウロウイツチが居ると思つた方角に、かつと成つて唾を吐き、その

言の如くに、壁の方に寝返りを打ち、寝巻を頭の上に引つばつて、そのまゝしびれたやうに成り、びくりともしなかつた。それから死の如き沈黙。幽霊は近づくのかそれともじつと立つて居るのか彼には分らなかつたが、彼の胸は烈しく、烈しく波打つた。まる五分間経つた。と突然、二歩離れたところに彼はパーウエル・パウロウイツチの温和しく、あはれつばい聲を聞いた。

「私は……探しに起きたのです。(彼はある必要品の名をいつた。)あそこになかつたので……静かにあなたの寢床の下を探さうと思ひましたので。」

「さつき私は大きな聲をしたときに何故何ともおつしやらなかつたのです。」とウエリチャーニノフは半分間許り黙つて居てから、變な聲で訊ねた。

「おどろいてしまつたのですよ。あんな大聲を擧げるのですもの。おどろいちゃつたのですよ。」

「あの、左の隅の小さい棚の中にあります。蠟燭をおともしなさい……」

「なあと蠟燭は要りません。」と、隅の方へ向ひ乍ら、パーウエル・パウロウイツチはいつた。「御騒せして濟みません……面くらつちやつたのです……」

だがウエリチャーニノフは答へなかつた。彼は依然として、壁の方へ顔を向けたまゝ、一晚中一度も寝返りを打たずにさうして居た。さつきいつたやうにして、パーウエル・パウロウイツチを馬鹿にしてやり度くつてさうして居たのかどうか——自分でも自分の氣持が分らなかつた。神経がいら／＼して居た状態は遂に恍惚とした状態に變つたが、眠に就く迄には長く時間がかゝつた。あくる朝、九時と十

時の間に眼を覺して彼は誰かにどんと押されでもしたかのやうに飛び上つて、寢床に起き上つたが——パーウエル・パウロウイツチは部屋には居なかつた。——片づけてない寢床はあき巢に成つて居た。彼は明方に逃げ出してしまつたのだ。

「かうなることとは初めから知つて居た。」とウエリチャーニノフはおのが額を叩き乍ら叫んだ。

第十章

墓地にて

醫者の心配は事實に成つた。リーザは突然悪く成つた。ウエリチャーニノフやクラヴダイヤ・ペトロ・ヴナが前夜想像したよりも悪く成つた。ウエリチャーニノフが朝見た時には、ひどい、ひどい熱ではあつたが、まだ氣は確かだつた。あとで彼は彼女がほゝえんで、熱のある、小さい手を差し出しさへしたと主張した。實際さうだつたのか、それとも無意識の内にも、自分を慰めやうと思つて、さう想像したのか、それを確める餘裕は無かつた。といふのは、日暮頃には病める子供は既に無意識に成つて居り、死ぬ迄その儘だつた。彼女がベガレリツエフ家へ來てから十日後に、彼女は果敢なくなつた。ウエリチャーニノフに取つては悲しむ可き時だつた。ベガレリツエフ家の人々は彼のことを非常に

心配した。彼はその痛ましき日々を主に彼等と共に過した。リーザが病氣の最後の数日の間彼は茫然として、何時間もぶつ續けに隅つこに座つて居ることがよくあつた。クラヴテイヤ・ペトロヴナは彼の心を紛らさうとしたが、彼は碌すつぽそれに返答せず、彼と語ることをさへ大儀なことに思つて居る様子だつた。クラヴテイヤ・ペトロヴナは「これ等のことが彼にこんな結果をもたらさう」とは夢にも思はなかつた。子供達が心を引き立てるのは一番成功だ。彼等の中へ入ると彼は笑ふことさへあつたが、凡んど一時間毎に彼は椅子から立ち上つては、忍び足して病人を見に出かけるのだつた。彼は彼女が彼を認めたと思ふこともあつた。彼は彼女が治るものとは思はず、誰もさう思ふものはなかつたけれど、彼は彼女が死に瀕して居る部屋から離れることが出来ず、しよつ中次の部屋に控えて居た。

だが、その組の日々の間に二度彼は大活動をした。彼はやにわに身を起して、ペテルスブルグの醫者のところへ駆けつけ、一流の醫者をすべて訪問して相診の手配りをした。二度目のそして最後の相診はリーザの死ぬ前晩にあつた。その三日前にクラヴテイヤ・ペトロヴナは、「若しものことがあつた時、彼が居なくちや葬式が出来ますまいから。」といつて、ウエリチャー・ニノフに是非トルンツキイさんを探していらつしやいといつた。ウエリチャー・ニノフは手紙を書きませうと口籠つて答へた。そこでバガレーリツエフは警察に頼んで彼を見付けて上げますといつた。結局、ウエリチャー・ニノフは二行の手紙を書いて、それをバクロフスカヤ・ホテルに持つて行つた。パーウエル・パーウロウイチは例に依つて家に居なかつたので、その手紙はマリヤ・スイソエフナに預けて來た。

美しい夏の夕、日没の頃に、リーザは遂に果敢なくなつた。その時初めてウエリチャー・ニノフは眼を覺したやうな様子だつた。皆なが、クラヴテイヤ・ペトロヴナの娘のもので、祝ひの時等に着るやうに取つて置いた白い上衣を死んだ子供に着せて、彼女の合掌した手に花をさして客間のテーブルの上に寝かした時、彼はたゞならぬ様子でクラヴテイヤ・ペトロヴナに近づき、すぐにあの「人殺し」を連れて來るといつた。皆なが出かけることは明日迄御待ちなさいといふのも聞き入れずに、彼はすぐにペテルスブルグへ出かけた。

彼は何處へ行つたらパーウエル・パーウロウイチに會へるか知つて居た。これ迄も彼は醫者を連れて來る爲めだけに、ペテルスブルグへ出掛けたのではなかつた。彼はかの日々の中に、若し彼がリーザの父親を彼女のところへ連れて來て、彼女が彼の聲を聞いたならば、彼女は正氣に戻るかも知れないと思ふことがあつた。で、彼は何かにとつつかれたものやうに、彼を探しにかゝつた。パーウエル・パーウロウイチは以前のところに居たが、そこを尋ねても何にもならなかつた。彼はもう三晩といふもの家にとまらないし、こゝらあたりに姿も見せません。」とマリヤ・スイソエフナは報告した。「それにやつて來ればきまつて酔つぱらつて居ますし、歸つて來ても一時間とは家に居ません。又出て行つてしまひます。あの人は段々變な人間に成つて行くやうです。」バクロフスカヤ・ホテルの給仕がウエリチャー・ニノフに語つたことの内にはかういふこともあつた。といふのは、パーウエル・パーウロウイチはウオズネセンスキイ通りの女のところへよく出かけるとのことだつた。ウエリチャー・ニノフは直ちにその

若い女達のところを訪れた。彼が彼等に御馳走してやつたり、ものを遣つたりすると、帽子の裏章が記憶の目記しになつて彼等は彼等の訪問者を造作なく思ひ出したが、思ひ出してから、勿論彼等は彼が二度と訪れて呉れないといつて散々罵るのだつた。彼等の内の一人、カーチャは「いつでもパーバエル・パウロウイツチさんを見つけて上げます。彼はこの頃しよつ中コーシニカ・プロスタコワのところに来ますから。」と引受けて呉れた。「彼は幾らでも金が續きます。彼女はプロスタコクといふよりもプロフトク(譯者註、暴漢、畜生、卑劣漢といふ程の意。)といつた方が本當です。彼女は病院に入つて居りました。私が一言いへばすぐ出来ませんが、私の了見一つであんな尼は西伯利亞へ迫つ立てることも出来ません。——私が一言いへばすぐ出来ません。」とのことだつた。だがその時はカーチャはパウエル・パウロウイツチを訪れはしなかつた。だが、その内訪ねますと堅く約束した。今ウエリチャーニノフが頼りにして居るのは彼女の助けだつた。

十時にベテルスブルグへ着くと彼は直ちに彼女を訪ねに出掛け番人に彼女を借りる御金を拂ひ、彼女をつれて探しに出掛けた。パウエル・パウロウイツチに會つてどうしやうといふのか、殺さうといふのか、それとも只、彼の娘の死んだこと、葬式へは是非顔を出して呉れなければいけないといふことを告げる爲めに探して居るのが自分でも分らなかつた。最初彼等は不成功だつた。二日前にこのコーシニカガパウエル・パウロウイツチは一合戦おつはじめ、出納係が「腰掛で彼の頭を打ちわつた」とのことだつた。實際長い間めつからなかつた。午後の二時に成つてやつとウエリチャーニノフは、あそこへ行つていらつしやいと遣られた「家」から出て来て思ひ掛けなく彼にぶつかつた。

パウエル・パウロウイツチはへべれけに酔つばらつて居り、この「家」へ二人の女に案内されて行くところだつた、その内の一人の女は彼のかひなを捉へて、彼を支へて居た。彼等の彼には背の高い、屈強な男がついて居たが、彼は聲を限りに叫び、いろんなこわいことをいつて、パウエル・パウロウイツチをおどして居た。彼は「パウエル・パウロウイツチは俺を利用し、俺の生存を毒害して居る。」などと怒鳴つて居た。金のことでいさかひがあつた様子だつた。女達はびく／＼もので、うろ／＼して居た。ウエリチャーニノフを見るとパウエル・パウロウイツチは大手を擴けて走り寄り、殺されやうとでもして居るか何ぞのやうに

「助けて呉れ給へ！」と叫んだ。

ウエルチャーニノフの強さうな姿を見ると、暴漢は遂早く姿をくらました。パウエル・パウロウイツチは凱歌と共に、逃げて逸く奴の後から、意氣揚々とし手を振り廻した。途端に、ウエリチャーニノフはかつとなつて彼の肩をとらへ、何といふことをなしに、パウエル・パウロウイツチは齒ががた／＼した程、彼の體をゆすぶつた。パウエル・パウロウイツチは直ちに凱歌を止め、ぼんやりとした、酔つ拂つた顔に恐怖を浮べて、ウエリチャーニノフをしげ／＼見守つた。今度はどうしてやつたらいいのか分らなかつたのだらう、ウエリチャーニノフは彼をたゞんで、邊石に座らせた。

「リーザさんが死にましたよ！」と彼はいつた。

パウエル・パウロウイツチは尙もウリエチャーニノフを見守り乍ら、一人の女に支へられて、邊

石に座つて居た。ウエリチャーニノフのいつたことがやつと分ると、彼の顔は突然わびしい色を帯びた。「死んだ……」と彼は變な調子でさゝやいた。彼が胸糞が熏く成るやうににやりと笑つたのか、それとも、何か感じて、變な顔をしたのが、それはウエリチャーニノフには分らなかつたが、少し経つと、パーウエル・パウロウイツチは、ふるふる手をやつとこさと上へ舉げて十字を切らうとしたが、切り終らない内にだらりとたれてしまつた。暫らくすると彼は邊石からゆつくり立ち上り、女につかまり、茫然として——宛かもウエリチャーニノフが居ないかなぞのやうに、女に倚つかゝつて歩き出した。だがウエリチャーニノフが再び彼の肩をとらへた。「おい、お化の酔つばらい！ 君が居なくちや葬式が出来ないといふことは分つたか。」と彼は息を切らして叫んだ。

パーウエル・パウロウイツチは彼の方に頭を向けた。

「砲兵……あの中尉……覚えがありますか。」と彼はどもり乍らいつた。

「何だつて！」とウエリチャーニノフは厭な氣持ちに成つてわめいた。

「奴が彼女の父親です！ 葬式するなら、彼を探しなさい。」

「嘘いつてらあとウエリチャーニノフは亂心したもの、如くにわめいた。「意趣時しに君はそんなことをいふのだ……君が俺にさういふと思つて居たことは前から分つて居た。」

われを忘れて、彼は恐しい拳を振り擧げて、パーウエル・パウロウイツチを打たうとした。今一分

したら、彼は一打ちで彼を打ち殺したかも知れなかつた。二人の女は泣きわめき、退却しやうとしたがパーウエル・パウロウイツチは髪の毛一筋動かさなかつた。彼は瘁猛な憎しみに襲はれて顔が變つた。「あなた」と彼はすつと落ちつき、酔ひが覺めたやうな様子でいつた。「あなたは露西亞の何々（絶対に印刷することの出来ない悪口をいつた。）を知つて居ますが、ぢや、あなたはそこへ行くといふ！」

それから一心に成つてウエリチャーニノフの手を振り拂ひ、躓いて、倒れかゝつた。二人の女は彼をとらへ、泣きわめき乍ら、パーウエル・パウロウイツチを引きづるやうにして、今度は走り去つた。ウエリチャーニノフは彼を追つかけはしなかつた。

翌日の午後、非常に人柄の好い、中年の、政府の屬官が、制服で、バガレリツエフ家にやつて来てパーウエル・パウロウイツチ・トルソツキイから、クラヴダイヤ・ペトロヴァ宛の封書をうやくしく渡した。その中には、三百留と、葬式に必要な法律上の書類を入れた手紙があつた。パーウエル・パウロウイツチの書いて來たことは簡單で、叮嚀で、實に穩當なものだつた。彼は彼女が小さい、母のない娘に現はした、神様だけが彼女に報ゐることが出来る親切な同情を切實に感謝した。彼はひどく不健康ですから、自分の愛する、不仕合な娘の葬式の支度に御伺ひすることが出来まい。あなた様の天使のやうに親切な御心に御すがり申すしかないといふやうなことを書いて居た。その三百留は、續いて手紙に説明してあるところに依ると、葬式と、子供の病氣で要つた費用を拂ふ爲めだつた。この御金が餘つたら、どうか「死者の靈魂を慰める永代供養」に御使ひ願ひ度いとのことだつた。手紙を持つて來

た陽官は別に話すこともなかつたが、實際、その陽官の言では、パーウエル・パーウロイツチが仕切りに頼むので初めて彼は手紙をクラヴダイヤ・ペトロヴナに渡すことを引き受けたのらしかつた。パガレーリツエフは「子供の病氣の費用」といふ話で氣を悪くした。それで、子供の葬式の費用を、父親に拂つてはいけないといふことは出来ないから、葬式の分の五十留は暫らく差し置き、残りの二百五十留はすぐにトルソツキイに送り返さうといひ出した。結局クラヴダイヤ・ペトロヴナは二百五十留も送り返さず、今はなき乙女エリザベタの靈の安き眠の爲めの永代供養にそれだけ拂つて、墓地にある教會からそれを受取つて、それを送るのを止めることにした。この受取りはあとで、パーウエル・パーウロイツチのところへ早く送つて下さいといつてウリエチャーニノフに渡された。ウリエチャーニノフはそれを彼のところへ郵便で出した。

葬式が済むと彼は別荘を去つた。まる二週間といふもの彼は只二人當り途なく町のをさまよひ歩き、道路で人によつた程、思ひに沈んで居た。幾日も打つ續けに、日常のこと迄失念して、ソファアに體をのばした儘で居ることもあつた。パガレーリツエフ家からは何處もいらして下さいといつて来たが彼は行く約束し乍ら、すぐにそれも忘れてしまふのであつた。クラヴダイヤ・ペトロヴナ自身が出馬したが、彼は家に居なかつた。彼の辯護士も同じ目に會つた。實際、辯護士は彼に話さなければならぬことがあつた。訴訟は非常に巧く落着して、彼の相手はいさかひに成つて居た家産の詰らない切ればしを受け取ることを承知して和解するに至つた。今は最早ウリエチャーニノフ自身の承諾を得れば

よかつた。とう／＼家に居るところを突きとめたが、曾てはあんなに厄介な依頼人だつたウリエチャーニノフが彼の説明を冷淡で無關係な態度で聞くのには驚いた。

七月の極暑い時節に成つたが、ウリエチャーニノフは時節のこと等念頭になかつた。彼が心中の悲しみは段々大きくなる腫物のやうに痛み、彼ははつきりそれを、しよつ中居ても立つても居られないやうな烈しさを以て意識して居た。彼の最大の苦しみは、リーザが彼のことを知る暇も無い内に——彼が彼女を痛ましい程愛して居るといふことも知らずに死んでしまつたと思ふことだつた。彼がちらりと見てあんなにも喜しく思つた生活の目的が果てしなき暗闇の内に姿を消した。その目的といふのは——彼は今もしよつ中そのことを考へて居るのだつたが——リーザに一生涯、毎日、毎時間おのが愛を身に泌みさしてやらうとのことだつた。誰もこれより高い目的を持つては居ない。持つて居る筈がない。」と彼は憂鬱に熱して考へることがあつた。外に如何なる目的があらうともあれより神聖なる目的のあらう筈は無い！「リーザに對する愛で」と彼は考へた。「私の昔のくさつた、役に立たない生涯は清められ、あがなはれるだらう。自分ののらくらした、いけない、浪費された生涯のつぐのひに私はこの純潔な素敵な子供を大事に育てやう。彼女の爲めなら、何事も許され私も何事をも許すことが出来る。」

これ等の正氣の考へが、死んだ子供のはつきりした、絶えず顔を出すとこしえに痛切な記憶と共にしよつ中彼の心に立ち現はれた。彼は一人で彼女の小さい、青白い顔を拵らへ、そのあらゆる表情を思ひ出した。彼は花に飾られた棺の中の彼女、じつと、大きなを見開いた儘、熱で正氣を失つて寢て居た

彼女を思ひ出した。彼は彼女がテーブルの上に横に成つて居た時に彼女の或る指を心をとめて見たことを突然思ひ出した。どういふものかそれは中に黒色を帯びて来た。その時彼はひどく驚き、その可哀さうな小さい指がひどくふびんに成り、その時初めて彼はパーウエル・パーウロウイツチを探し出して、殺してやらうと思つたのだつた。その時迄は彼は宛かも無感覺なもの、如くであつた。彼女の口を苦しめ、傷けたのは自負心の傷つけられたのに依るが、それとも突然愛が憎しみに變り、ひどいことをいつて彼女を侮辱し、彼女のこわがるのを見て嘲笑し、遂には見も知らぬ人のところへ彼女をうつちやつてしまつた。彼女の父親の手に掛つて苦んだかの三ヶ月間が災はひをしたものだらうか。これ等のことを彼は絶えず兎や角と思案した。「私に取つてリーザは如何なるものであつたか知つて居ますか。」——彼は突然かの酔つばらひの叫びを思ひ出したが、その叫びは眞誠なもので、見えではなく、その内には愛がこもつて居ると思つた。「あの怪物があんなに愛して居た子供にどうしてそんなに殘酷な筈があらうぞ。そんなことが信じられやうか。」だがいつでも彼はその疑問をおつばらひ、謂はば拂ひのけるやうにした。といふのはその疑問には何か知ら恐しい、忍ぶ事の出来ぬ、解くことの出来ぬものがあつたから。或る日、凡んど自分の行く先のこと意識せずには彼はリージが葬つてある墓地をさまよひ、彼女の小さい墓を見つけた。彼は葬式以來墓地へ行つた事がなかつた。彼はいつも苦しみに堪へまいと思つて、出掛ける事をこわがつて居た。ところが不思議なことには、彼女の小さい墓を見つけてそれにキッスしたら、彼は心が軽くなつた。晴れた夕暮で、日は沈みつゝあつた。墓のまわり一面に、新鮮な、みどり

の草が生ひ育ち、すぐそばの野ばらには蜜蜂がうなり聲を立て、子供達やクラヴィヤ・ペトロヴィツナがリーザの墓に残して行つた花や花環は、花びらが半ば散つて、そこに横つて居た。久し振りで彼の心に希望に似たのがかすかにほの見えた。

「何て晴れ／＼として居ることだらう！」墓場の静かさを感じ、雪なき、穏かな空を眺め乍ら、さう思つた。

何ものかに對する純潔な、穏やかな信仰がさつと彼の靈に溢れた。

「リーザがこれを私に寄越したのだ。リーザが私に話し掛けて居るのだ。」と彼は思つた。

彼が墓地を後にして、家へ歸る頃にはもうすつかり暗く成つて居た。墓地の門から程遠からぬところ大きな道にある木製の家には、一種の飲食店、即ち茶屋があり、窓から、皆ながテーブルに坐つて居るのを見ることが出来た。突然、その人々の中の一人、窓ぎわに居るのはパーウエル・パーウロウイツチで、彼も自分を見て、しきりに此方を見て居るやうに思へた。彼はそれにかまわず、歩みを續けたが、まもなく誰か自分の後を追つて来る物音を耳にした。實際、パーウエル・パーウロウイツチが彼のあとを追つかけて来たのだつた。多分彼は窓からウエリチャー・ミノフを見守つて、その打ち解けた表情に心を牽かれ、勵まされたのだらう。彼に追ひついて、パーウエル・パーウロウイツチはおど／＼した微笑を浮べたが、それは曾て、酔つばらつて居た時のやうな微笑ではなかつた。本當に彼は酔つては居なかつた。

「今晚は」と彼はいつた。
「や、今晚は」とウエリチャーニノフは答へた。

第十一章

パーウエル・パウロウイツチ結婚せむと思ふ

「今晚は」と答へ乍ら、われとわが身に驚いた。この男に今會つて、更らに憤怒の如きものを感じず、その時の後に對する感じには何かまるで違つたものがあり、實際、何か知ら新しいものに對する一種の衝動の現在することは極めて不思議なことに思はれた。

「何て氣持ちのいゝ晩でせう」とパーウエル・パウロウイツチは後の顔をつく／＼眺め乍らいつた。

「あなたは未だ行かなかつたのですね。」とウエリチャーニノフにはなく、頭に浮んだことを口にした
とけといつた調子で歩き乍らにいつた。

「いろ／＼長引きましたが、俸給も高い職が得られました。もう明後日は是非とも出發します。」

「職がありましたか。」と今度訊ねるやうにしていつた。

「ないことはありませんよ。」パーウエル・パウロウイツチは可笑しく顔をねじつた。

「なに、只お訊ねしただけで……」と、ウエリチャーニノフは諷刺見たいなことをいつたのぢやないといつた調子にいつて、パーウエル・パウロウイツチを尻目に掛けた。

驚いたことには、トルソウツキイ氏の着物、裋褌の紐のついた帽子、その他全體の様子が、二週間前と比べて似もつかぬ程立派だつた。

「何の爲めにあの茶屋に居たのだらう。」と不審が去らなかつた。

「私は少し目出度いことを、あなたに御報せしやうと思つて居ました。」パーウエル・パウロウイツチは又口を切つた。

「目出度いことつて？」

「私は結婚しやうと思つて居るのですよ。」

「何ですつて？」

「悲しみの後には喜びが来る、人生いつもさうですよ。ゆつくり御話出来るとうれしいのですが、何だか御急ぎの様子ですね……」

「え、急いでも居ますし……それに體の工合も悪いので。」

彼は突然、如何にもして彼から遁れたくなつた。或る新しい感情を待つ氣持ちも忽ち消失した。

「實は……」

パーウエル・パウロウイツチは自分の希望を述べなかつた。ウエリチャーニノフは黙つて居た。

「それでは又いつか、御目にかゝる折もあつたらぬことにして……」

「え、またいつかのことにして」とウエリチャーニノフは立ち止りもしなければ、彼を見もしずに口早につぶやいた。

二人は又暫し沈黙して居た。パーウエル・パーウロウイツチも彼と並んでいた。

「それでは又いつか」とパーウエル・パーウロウイツチは遂にいつた。

「さいなら、ちや又……」

ウエリチャーニノフは又腹の中でひつくり返つたやうな氣持ちで家へ歸つた。「あの男」に接觸するとは彼のたへ得るところでなかつた。彼は床へ入り乍ら又考へた。「何だつて、墓地に居やあがつたのだらう。」

翌朝彼はバガレーリツエフ家に行かうと心をきめた。彼は厭ではあつたが、出かけることにした。誰からの、たとへバガレーリツエフ家の人々からの同情でも、今の彼には實にうるさかつた。だが彼等は彼のことを非常に心配して居たから、是非とも出掛けなければならぬ氣がした。彼は突然、あれから初めて顔を合はすのだが、恐しく羞しい氣がするだらうといふ氣がした。

行つたものか、止さうか、そゝくさと朝飯を齎せ乍ら考へた。と、實に驚いたことには、パーウエル・パーウロウイツチがやつて來た。

昨日出會しはしたものの、ウエリチャーニノフはこの男が又やつて來るとは思ひも掛けなかつたので、

あつけに取られて、彼をきよろく眺めて、どういつていゝか分らなかつた。だがパーウエル・パーウロウイツチは常と變らなかつた。彼は挨拶してこの前訪ねて來た時に腰掛けたと同じ椅子に就いた。ウエリチャーニノフは突然、その時の訪問のことを變にはつきり思ひ出したが、訪問者を落ちつかぬ、無愛想な顔して眺めた。

「驚きましたか。」パーウエル・パーウロウイツチはウエリチャーニノフの表情を語にして口を切つた。

全たく彼は昨日よりずつと打ちとけて、儀式張らない調子だつたが、同時に又昨日よりも神經質に成つて居るといふことも見て取ることが出來た。特に様子が變だつた。トルソーツキイ氏はちやんとしたなり所か、すつかりりゆうとした風體で——輕快な夏の短衣、いきな、びつたりした仕立方のうす色のズボン、輕快なチョツキ、手袋、どういふ風の吹き廻しか、にわかには掛けた金ぶちのロールネット(譯者註、長柄つきの眼鏡)。下衣類も申し分なく、香水のほひ迄させて居た。彼の様子全體に何處か滑稽な、同時に變に、不愉快に暗示的なところがあつた。

「そりやあもう」と、うごめき乍ら、彼は語を續けた。「私がやつて來たので、あなたが驚いていらつしやるといふことは私にも分ります。だが私の思ひますのには、人と人との間には何か高いものがあるし、又私の考へではなければならぬと思ひますがね。といふのは、あらゆる事情、ないとは限らぬ不愉快なことよりも……この高いものですがね……さうぢやありませんまいか。」

「御話を早く、さつくばらんに聞して下さい。」としかめ面をして、ウエリチャーニノフはいつた。

「簡単に申せば」とパーウエル・パウロウイツチは急しく語り出した。「私は結婚しやうと思つて居ます。で、その御よめさんに會ひに行かうと思つて居るところで。その一家も夏間の別荘に行つて居るのですが。一つ、何なら、あなたをその一家に紹介させて戴き度いと思ひますが。實はそれで一緒に來て戴だく譯には参りますまいかと御願ひに上つたやうな次第で……」(パーウエル・パウロウイツチは丁寧に頭を下げた。)

「何處へ行くのです。」ウエリチャーニノフは眼を見開いて、きよろ／＼眺めた。

「その一家へ、といふのは、その別荘へですが。許して下さい。私のいつて居ることは何だか熱病やみのいつて居るやうなことで、或ひは私の申したことがはつきりして居なかつたかも知れませんが、あなたに厭だといはれると實に困るので。」

さういつて彼は悲しげにウエリチャーニノフを眺めた。

「一緒に俺の嫁に成る女を見に來て呉れとおつしやるのですか。」と、ウエリチャーニノフはおのが目や耳を信じてることが出來ずに、素速く彼を正視して繰り返した。

「さうです。」とパーウエル・パウロウイツチは穴へでも入り度い様子でいつた。怒つちやあ困ります。すけ／＼御願ひする譯ではありません。只、行つて下されば、非常にあり難いと思ふ。だけのことから、或ひは行つてやらうとおつしやるかも知れないと思つたので……」

「第一、そんなことはとても思ひも寄らぬことです。」ウエリチャーニノフは落ちつかぬ様子で振り返つ

た。

「なに、只、私が是非さうして戴き度いと思つたゞけの話で」とパーウエル・パウロウイツチは哀願し乍ら、語を續けた。「それに、それには譯のあることだといふことも包まずに申し上げますが、その理由を明かにすることはもつと後のことにした方がいゝと思ふので、今は只、是非とも來て戴き度いと御願ひするに止めて置きますが……」

さういつて彼は尊敬を示す爲めに、實際席から立ち上つた。

「だが、何しろ、行くことなんぞ出來ません。あなたにもそれは御分りでせう……」

ウエリチャーニノフも立ち上つた。

「いや出來ない相談ぢやありません。あなたを友達として紹介しやうと思つて居ましたので。それに、もうあなたはその一家を御存知なので、ね、ザフレビニンのところですよ。ザフレビニンの別荘ですよ。相談役のザフレビニンですよ。」

「何ですつて。」とウエリチャーニノフは叫んだ。

それは一ヶ月前に彼がしよつ中探して居たが、家へ行つても會へなかつたかの相談役のことだつた。彼は既に判明した如く、相手方の爲めに働いて居たのだつた。

「さう／＼」とパーウエル・パウロウイツチは微笑み乍ら、ウエリチャーニノフが非常に驚いたので大いに元氣づいた様子でいつた。「あの男ですよ。憶えていらつしやるでせう。私に向ふ側に立つてあな

たを見て居た時、あなたが並んで歩いて、話をしていらした男ですよ。私はあなたが話を済ませたら彼のところへ行かうと思つて待つて居たのでしたよ。二十年前には私達は同じところに勤めて居りました。あの日、あなたが話を御済せなされたら彼のそばへ行かうと思つて居た時分には、私はこんな考へはちつとも無かつたので。ほんの一週間前、突然に思ひついたことで。」

「だが、あそこは立派な家庭ですぜ。」とウエリチャーニフは眞正直に驚いていつた。

「立派な家庭だつたらどうです。」とパーウエル・パウロウイツチはしかめつ面した。

「いや、決してさういふつもりぢやないので……只、あそこへ行つた時、私が見たところでは……」

「皆なが、あなたがあそこへいらした時のことを憶えて居ますよ。」とパーウエル・パウロウイツチは喜しさうに口を入れた。だけど、その時、家族の人々に御會ひなさることは出来なかつたでせう。だけど、彼はあなたを憶えて居て、あなたには非常に尊敬を拂つて居ます。私達は非常な尊敬を以てあなたのことを噂しましたので。」

「だが、未だ奥さんに御別れに成つてから三月にしかならないのに。」

「だが、結婚式はすぐにはやりません。式はもう九ヶ月か、十ヶ月の内にやります。その時にはもう裏が明けて居ますからね。實際、万事調子がいいのです。第一フエドセイ・ペトロウイツチは子供の時から私を知つて居ますし、死んだ家内も知つて居ますし、私の暮し向きも、世間の私の評判も知つて居ます。それに、私もまあ少しは金もありますし、そこへ持つて来て、月給の上る職を得やうとして居ま

すし——でまあかういつたことがあり難いことで。」

「彼の娘と結婚しやうといのふのですか。」

「悉しいことを御話しませう。」パーウエル・パウロウイツチは相手の氣を引くやうな所作をした。「一寸待つて下さい。烟草の火をつけますから。今日あなたにも彼女に會つて戴きますがね。第一、フエドセイ・ペトロウイツチのやうな手腕のある男は、巧く注意を牽けば、このペテルブルグでも非常に敬服されることはありますがね、だが御承知の通り、俸給やその外の謝禮、賞與、食卓費、一杯飲んで呉れといつて呉れる御金の外には、彼は何にも——といふのは、資本といふことの出来るやうなしつかりしたものは何にもありませんからね。彼等は安樂に暮しては居ますが、家族があつちや残しませんからね。まあ聞いて下さい。フエドセイ・ペトロウイツチのところには娘が八人あり、息子は一人しきやありませんが、その息子といふのが未だ子供ですよ。若し彼が明日が日にも死ぬやうなことがあれば、あとにはけちな恩給しきや残りません。八人の娘ですぜ！ 考へて御覽なさい。靴代だけでも大したものですよ！ この八人の娘の中、五人はもう大きく成つて、一番上は二十四で（あとで御覽に成れば分る通り、そりやあ惚れくするやうな女ですが）六番目の十五に成る娘は未だ高等學校に通つて居ます。勿論、上の五人の娘にはもう亭主を見つければならず、而かも成り丈け時季を失しないやうに見つけねばならぬので、親爺が娘を社交界へ連れ出さなければならぬ譯ですが、連れ出すには随分御金が掛りますから。ところが私が現はれたのですが、彼等の家へ結婚を申し込んだのは私が初めてですが、そ

の私は先方ではよく知り抜いて居る、といふのは私には實際少しは御金もあるといふことをですがね。まあ、かういつた譯で。」

パーウエル・パウロウイツチは熱心に説明した。

「一番上の娘と結婚するのですか。」

「いやなに、その娘ぢやないので。六番目の娘に申し込んで居るので。未だ高等學校へ行つて居る娘ですよ。」

「何ですつて。」とウエリチャーニノフは思はず知らず微笑んでいつた。「未だ十五だといふぢやありませんか！」

「今は十五ですが、九ヶ月経てば十六に成りますよ。十六歳三ヶ月に成りますよ。だから別に可笑しくもありませんや。だが今は變ですから、おつびらに婚約はせずに、兩親と内約する丈けに止めて置きます……全たく万事巧く行つて居るのですよ！」

「ぢや未だしつかりとはきまつてないのですか。」

「なに、すつかり話がついて居るのです。實際、万事巧く行つて居るのですよ。」

「そして、その娘は知つて居るのですか。」

「變だから向ふの家ぢや彼女に話をしないやうですが、勿論彼女は知つて居ます。」パーウエル・パウロウイツチは媚びるやうな眼付きをした。「祝つて下さいますか。」とパーウエル・パウロウイツチは非

常におどくして最後にいつた。

「何の爲めに私が出掛けなければならぬのですか。だが」と彼は慌しく附け加へた。「どうしたつて私に行きやしませんから、骨折つて理由なんぞ見つけなくともよろしい。」

「アレキセイ・イワーノウツチさん……」

「私がああなたの側に乗れ込んで、一緒にそこへ出掛けるものと思つて居るのですが。考へて見るがよい！」

パーウエル・パウロウイツチの未來の花嫁に關するおしやべりで一時まぎれて居た嫌惡の情が又訪れて來た。もう一分もしたら、彼は彼を追つぽり出しさうだつた。何故か知ら、彼はわれと自分が腹立たしくさへ成つた。

「是非御出で下さい。さうすれば後で後悔するやうなことはありませんから！」パーウエル・パウロウイツチは一心に彼に懇願した。「いや、いや！」——と彼はウエリチャーニノフの自烈つたいといつたやうな、又決然とした所作を見て手を振り動した。「アレキセイ・イワーノウイツチさん、まあきめることを一寸御待ちなさい！ あなたが或ひは私のいつたことを取つ違へて居られるかも知れないといふことが分ります。そりあもう、私に取つてあなたは、又あなたに取つて私は……何といつていゝか、私達はお仲間ぢやあないといふことはよつく承知して居ます。私もそれが分らない程の馬鹿ぢやありませんや。それに、今御頼みし居ることの爲めに、あとであなたがどうかうしなければならぬといふこと

ではなし。又實際私は明日はすつぱり此方を立ちのきますもの。まるで何ごとも無かつたかのやうにね。今日だけは例外にませう。私はあなたの特に御寛大な御心——この頃よく施して戴いた御寛大な御心を頼りにしてやつて来たやうな譯で。私のいふことははつきりして居ると思ひますが如何です。」

パーウエル・パウロウイツチは興奮の絶頂に達した。ウエリチャーニノフは變な顔して彼を眺めた。「私に何か働いて呉れとおつしやるのですね。」とウエリチャーニノフはためらひ乍らいつた。「そしてひどく熱心な御頼みですが、變な氣がします。御用をもつと悉しく承知したいもので。」

「いや只、一緒に御出でを願ひ度いといふだけの用事で。あとで、歸り途に、いろんなことは懺悔する時のやうに打ち明けて御話します。本當ですよ！」

だがウエリチャーニノフはそれでも拒絶した。而かも一層頑固に。といふのは、彼は止め難き、性質の悪い衝動に氣がついて居たから。このいけない衝動は初めつから、パーウエル・パウロウイツチがその未來の花嫁の話をして以來すつと、彼の心中で微かに動いて居た。それは單に好奇心に過ぎないかそれとも外の全たく不分明な衝動のせいかそれは分らなかつたが、彼は承知したいやうな氣がした。そして承諾し度くなればなる程、彼は抵抗した。彼は片ひぢついて、考へ込んだ。

パーウエル・パウロウイツチは彼のそばへ行つて、しきりにすかしたり、すゝめりして居た。「よろしい。参りませう。」と彼は席から立ち乍ら、突然、そばへくした、凡んど氣遣しげな様子で承知した。

パーウエル・パウロウイツチは有頂天に成つた。

「だが、あなた着物を着かえなくちや。」とパーウエル・パウロウイツチは嬉しくつて彼の廻りをまどしく乍ら諂るやうにいつた。「よそ行きの着物を着るといふ。」

「何だつてこんなことに御せつかいするのだらう。變な奴だな。」とウエリチャーニノフは一人胸に問ふた。

「實はあなたに御頼みし度いと思つて居るのはそれだけではないので。一緒に行くことを承知して下さつた上からは、どうか私の顧問に成つて下さい。」

「何の顧問に成るのです。例へていふと？」

「例へば喪章の大問題です。喪章を取つてしまつた方がいゝか、着けてた方がいゝか、どちらがいゝでせう。」

「あなたの御好きなやうになさつたらいい。」

「いやあなたにきめていたゞき度いのです。あなたが私だつたら、といふのは帽子に喪章をつけて居たらどうなさいますか。私はそれを附けて居ると、私の感情の動かないことを示して、都合のいゝ一種の推與狀に成ると思ひますがな。」

「勿論取つてしまつた方がいゝ。」

「考へる迄もないことだと本當に御思ひなのですか。」パーウエル・パウロウイツチはいひ淀んで「私

はつけてたが、いいと思ひますがね……」

「好きなやうになさつたらいいでせう。」

「奴は俺のいふことを信任しないが、その方がいい。」とウエリチャーニノフは思つた。

二人は外へ出た。パーウエル・パーウロウイツチはウエリチャーニノフの身じまじした様子を、満足

氣にじつと眺めた。彼の顔には更らに謙讓と威嚴とが現はれて居るやうに思はれた！ ウエリチャーニ

ノフは彼を見て驚ろき、自分自身に對して更に驚いた。非常にいい馬車が門のところまで彼等を待つて居

た。

「ぢや馬車迄用意して置いたのですか。私が行くものと思つて居たのですか。」

「馬車は自分が乗る爲めに雇つたのですが、あなたが私と一緒に來ることを大丈夫承知して下さるもの

と思つて居ました。」とパーウエル・パーウロウイツチはこの上なく楽しさうな様子で答へた。

「パーウエル・パーウロウイツチさん。」と、二人が馬車に乗り、出發してから、何だかいらくしたや

うに笑ひ乍ら、ウエリチャーニノフはいつた。「私が行くことをあまりといへば大丈夫と思ひ過ぎては居

ませんでしたか。」

「だからつて、私を馬鹿ものとはおつしやりはしますまい。」とパーウエル・パーウロウイツチは熱心に

答へた。

「リーザは」とウエリチャーニノフは考へたが、神聖を瀆すことを恐るゝものゝ如くに、すぐに急いで

②
ウエリチャーニノフは、パーウエル・パーウロウイツチの、

でせう？ この戀は、彼女を一目見た時から始まつたので、其の時、私のすべての感覺は天使のやうに魅

力のある子供の顔に快く刺激されたのでした。彼女のものにはみんなが美しく、生れつき一つの缺點さへ

も彼女にはなかつたのでした。——すべての缺點は外から附いたもので、それを除かうとして彼女は努

力してゐたのでした。この争から始まつて彼女の中のものには悉べて華やかな希望で輝き、あらゆるもの

が美しい未來を豫告してゐました。皆が彼女の氣に入り、皆が彼女を愛してゐましたが、私一人が除け

者でした。私達が三時間位遊びに耽つて居ることがありましたが、其の時、すべての通行人は驚いた様

子で立止り、彼女を見ただけで此の幸福な子供を見送つて驚きの叫びをあげることがよくありました。

彼女は幸福に生れ、幸福のために育つて行くに違ひない——これが彼女を見た時の印象でした。美的情

操、優雅な感情、といふものが最初に私を驚かしたので、最初はそれが美によつて眼さまされたやうに

見えました——これが私の戀の生れた原因のすべてです。

彼女の重な缺點といふのは、もつと良く言へば、彼女の性格の重な源といふのは、自分の本來の身體

に肉づいて了ふやうにつとめてゐて、どうにもならないもの、従つて除けやうとし、戦つてゐる有様に

あるもの——それは傲慢でした。この傲慢は無邪氣な、些かな程度のもので、例へて見ると、彼女に何

のやうな反對でもすると、彼女は侮蔑したり怒つたりしないで唯々驚かされるに過ぎない位の自己愛に

陥るといふ程度でした。彼女は自分の傲慢を除けやうとして努めても、まるで自分が欲してゐない何か

外のものもあるかのやうに何うしても目的を達することが出来ませんでした。でも公平の感情は心の

上にいつも捉へてゐました。若しも彼女が正しくないといふことが信じられたならば、直ぐさま不平もなく自若として罪に服したでせう。そして其の時分までに彼女が私に對し交情を裏切つたとすれば、それはみんな彼女の全存在が調和、均整を保たうとする時に苦しんだ、譯の分らない嫌忌であつたと私は解釋したでせう。またさうなけれやならないのでした。彼女は餘り激しく自分の情熱に乗り過ぎたのです。そして何時も前例と經驗とが彼女を眞實の道へ導いたのでした。彼女の企てのすべての結果は立派で眞實のものでしたが、のべつなしの失錯と迷誤とで購はれたものでした。

カーチャは直ぐ様私に對する自分の觀察に満足しました。でやうやく私を靜かに殘して置かうと考へました。彼女は私が家に居ないかのやうに振舞ひました。私に無駄な言葉は一つもかけなかつたし、例へ必要なことでも口を利きませんでした。私は遊戯から除け者にされたので、無理矢理に除け者にされた譯ではありませんでした。しかし、私自身がそれに同意したかのやうに巧妙なものでした。課業が順番にすんでから、私を聰明な落付いた性質の手下としてカーチャに示すことになる、家のブルドッグのサア・ドジョン・ファリスタフでさへ侮る位の極端にセンチメンタルな自己愛といふものを私が侮ることが出来なくなつて了ふのでした。ファリスタフは冷淡な冷酷な犬で、怒らすと虎のやうに怒りつぽく、主人の命令に逆らう位に怒るのでした。其他に變つた點といふのは、彼はまつたく何者も愛してゐないので、しかし彼に取つては頑強な生れつきの敵といふのは疑ひもなく公爵老嬢でした……けれどもこんな事は後廻しにしませう。自愛家なるカーチャは何うにかしてファリスタフの憎惡に打勝ちたいと骨折

りました。家ちゆうで唯一つの動物でありましたが、彼女の權力を認めず、彼女に従はず、彼女を愛しないものが居る、といふことが面白くなかつたのでした。さういふ次第で彼女はファリスタフを背めてやらうと心を極めました。彼女は強制的に皆に言ふことを聴くやうにしたのでした。どうしてファリスタフが自分の運命を逃れることが出来るでせうか？ けれども勇猛なブルドッグは降参しませんでした。

或る時、食事後でしたが、私達はみんな階下の大きな部屋で休んで居ました。ファリスタフは部屋の真中に寝そべつて倦さうに食後の休息を楽しんでゐました。丁度其の時、令嬢はブルドッグを征服する考へが浮びました。さうなると彼女は遊戯をすつかり止めて了つて、ブルドッグの趾先を撫で、名前を可愛らしい風に呼んで、手で愛想よく誘きよせながら用心深く近寄り始めました。でもファリスタフは怖しい齒を遠くから露き出してゐました。で彼女は諦めて了ひました。ファリスタフを擦つてやることは、ファリスタフの寵愛者なる公爵夫人以外の人には許されてなかつたのでしたが、ファリスタフに近づいて身體を擦つてやり、それから曳き出さうとするのがカーチャの企てなのでした。旨くやり了ふせることは難しいことで、大きな危険を伴つてゐました。といふのは、若しやらうと思つたら、ファリスタフに取つて、カーチャの手を噛み切つたり引裂いたりすることは何でもない事でしたから。彼は熊のやうに力強いのでした。私は不安と恐怖とをもつてカーチャの計畫を遠くから眺めてゐました。仲々初めは思ふ壺、はまらないので、無作法に露き出してゐるファリスタフの齒を見ただけでも計略が旨く

行きさうに思はれませんでした。初めから彼に近づくのは良くないと知つて居たので令嬢は當惑して、敵の周囲をクルリと廻りました。フアリスタフは其處から動きませんでした。二度目にカーチャは、ずつと小さな圓を廻り、それから三度目には、フアリスタフに取つて大切な線と思はれる場所まで近寄りました。と、犬はまた齒を露きました。令嬢は足を踏み鳴らして忌々しさに其處を離れ、もちもぢしながら肱椅子に腰を下しました。

十分も経つて、彼女は新しい誘き出しの方法を考へ出しました。で、すぐ出て行つて、藏つてあつたビスケットや菓子を取り出して來ました——武器を取り換へたと言ふ譯です。けれどもフアリスタフは満腹した所爲か冷淡なものでした。投げ與へられたビスケットには眼も呉れませんでした。フアリスタフが自分の境界線と思つてゐる大切な線まで令嬢は出て、反對側へ、前よりもずつと深く廻りました。フアリスタフは頭を擡げ、齒を露き出して低く唸り、飛びかゝる用意でもするかのやうに一寸身動きしました。令嬢は痲癢を起して赤くなり、菓子を抛り投げて、また元の坐に歸りました。

彼女は絶へずモチ／＼しながら腰かけてゐました。彼女の小さな脚は震え、可愛い頬は天映のやうに赤く、眼には口惜しさの涙さへ浮べて居ました。彼女が私を見るやうなことがあると、彼女の頭に血が上つて來ました。彼女は思ひ切つて立上り、しつかりした足取りで怖い犬の方へ眞直に近寄りました。こんどは随分フアリスタフを驚かしたのでせう。敵を身近くまで入り込ませて、無謀なカーチャに二歩まで來られると、氣味の悪い唸り聲で迎へました。カーチャは一寸立止りましたが、直ぐ近づかうと

心を極めました。怖しさのあまり私は自失した程です。カーチャは今まで見たこともない位、勇氣に満ちてゐました。彼女の眼は勝利で輝いてゐました、彼女から不思議な繪が描ける位でした。彼女は怒つてゐるブルドックの脊かすやうな眼付を犯して怖い顎の前で震えるやうなことはありませんでした。犬は立止りました。虎毛の胸から怖い唸りが響きました。もう後一分で彼女を引裂いたかも知れませんが、彼女は落付いて自分の小さな手を彼の上に置いて、勝ち誇つたやうに三遍彼の脊を擦りました。ブルドックは暫く逡巡つてゐました。此の瞬間が一番怖しかつたのですが、不意に重々しく立上つて身體を延ばし、子供たちにかまつて居ても仕方がないとでも思つたらしく、ノソ／＼部屋から出てゆきました。令嬢は勝誇つて其の場所に立つて、言ふに言はれぬ眼差、勝利に満足し夢中になつた眼差しを私に投げました。でも私は手巾のやうに青ざめてゐました。彼女はそれを認めて頬笑みました。けれども死人のやうな青白さが彼女の頬をも蔽ふてゐました。やうやくのことで肱椅子まで行つて、卒倒するやうに其の上に倒れかゝりました。

それはそれとして、私は何處まで彼女に曳かれてゆくのか、其の際を知らないのです。其の日からそれだけやはり彼女に恐怖を感じてゐました。がもう自分を何うすることも出来なかつたのです。私は惱みに悶え、何べんとなく彼女の首に身を投げ出さうとしましたが、直ぐ様、恐怖が私を引留めて放しませんでした。覺えて居ますが、悶えを彼女に見られまいとして彼女から遠退かうと努めました。が、私が隠れてゐる部屋に計らずも彼女が這入つて來ると、私は震えて、胸は轟き始め、それがため頭は混

亂して来るのでした。悪戯娘はこのことを認めたらしく、二日位何か氣をもんでゐるやうでした。間もなく彼女は此ういふ事にも馴れました。此うして密かに苦んでゐた一ヶ月が過ぎ去りました。若し此う言ふことが出来るならば私の感情は或る説明の出来ぬ膨脹性を持つて居たのです。私の性格として最後の際まで耐えることが出来るので、感情が不意に突發することは餘程の場合なのです。この時分カーチャは私と五つ六つの言葉を私と交はすのが關の山で、このことは知つて置く必要があります。これはカーチャが忘れて居たのでもなく、私に無關心であつたのでもないもので、何か殊更に私から逃げてゐるので、其れも私を五里霧中に迷はすために口を利かないらしいといふことは、ちよつ／＼とした彼女の素振で何うやら其れと感づきました。でも、私は夜は夜で眠れないし、晝は晝でマダム・レオタールの前で此の身の悶えを隠すことは出来なかつたのです。私のカーチャに對する戀は不思議なものになつて來ました。私は或る時カーチャの手巾を、或る時は髪に捲り込んであつたりボンを密つと手に入れましたが、毎晩、夜通しそれに接吻して涙で濡らしました。初めカーチャの無關心が侮辱を感じる位に私を苦しめました。今となつてはすべてのものが苦しくなつて來て自分で感じた通りを感じる事が出来なくなりました。さうして新しい印象がだんだんと古い印象を追ひのけ、私の痛ましい過去の思ひ出がその異常な力を失つて、私の新しい生活へ變つて行つたのです。私は折々夜ふけに眼を覺まして、寢臺から起き上り、爪先でカーチャに近づいて行つたのを覺えて居ます。私達の所にあつた光の弱い洋燈に照らされて眠つて居る、カーチャを一時間も私は瞞めました。時々彼女の寢臺の傍に腰かけて彼女の顔

を覗きましたが、熱い息づかひが私にかゝりました。靜々と、怖る／＼彼女の小さな手や、肩や、髪や、若しも小さな足が掛布から外へ出て居たならば其の足にも、私は接吻しました。其の中に私はまる一月彼女から眼を離さなかつたので——カーチャが日に増し苦しくなつて行くのに氣附きました。彼女の性格が、持前の均整さを失ひ始めたのです。時とするに終日彼女の騒ぎをきかないことがあるし、時によると今まで無かつたやうな噪ぎが持ち上るのでした。彼女は怒りつぽく氣むづかしくなり、しよつちゆう赤くなつたり腹を立てたりして居ましたが、私に對して一寸した残忍なことまでするに到つたのでした。ある時は私に嫌惡を感じてでもゐるのか、私の傍近く腰かけて食事するのが嫌になり出したり、ある時は不意に母の方へ行つて一日中其處に居たりしました。それも私が彼女なしには悲しさの餘り澗んで了ふことを承知して居ての事らしいのです。さうかと思ふと一時間も私を瞞めることがあります。さうなると私は死ぬやうな思ひで、何處へ身を隠して宜いか判らないので、顔を赤くしたり蒼くしたりしながらも矢張り部屋から出て行く勇氣はなかつたのでした。カーチャは今まで何んな病氣も覺えては居ませんでした。二度だけ熱病に苦しんだのでした。或る朝、特別な指圖で、思ひがけないカーチャの願をかなへて、カーチャが熱病で苦しんだ時驚きの餘り死にさうになつた母の許へ、階上から引移ることになつたのです。公爵夫人が私に不満であると言ふこと、夫人も認めてゐたカーチャの悉べての變化を私の所爲にし、夫人の言ひ方によれば、私の性惡の性格が自分の娘の性格に影響を及ぼすのを私の爲でした。夫人はずつと前から私達を離したかつたのでしたが、公爵と衝突するやうな事になりはし

ないかと思つて今まで延期してゐたのでした。公爵は何につけても夫人に讓歩して居ましたが、とする
と頑として一步も退かない位に強く出ることがありました。夫人は公爵をよく了解してゐたのです。

私はカーチャが引移つたのに驚いて、病的に引緊つた心持で一週間といふものを過して來たのでした。
悲しみに悶え、カーチャが私を嫌ふ原因を考へました。悲哀は私の魂を引裂き、正義と腹ただしさの感
情が、辱められた私の心に甦り始めたのです。ある誇りが私に芽ぐみしました。私達が散歩に連れ出さ
れた時カーチャと顔を合はせましたが、私は誰も相手にしない非常に嚴かつい様子で、以前には打つて
變つた様子で彼女を瞞めたので、彼女はすつかり驚かされました。言ふまでもなく此ういふ變化は一時
的のもので、後になつては、心は以前のやうに段々と強く痛み出し、前よりもすつと弱々しい、臆病な
人間になつて行くのでした。やがて、或る朝のこと、私を大變摩胡附かせ悦はしたことは、彼女が
二階へ歸つて來たことです。第一に、馬鹿げた笑をもつてマダム・レオタールの首に抱きついて、引移
つたことを話し、その後で私に會釋して、今日は何も勉強しないやうに許して貰ひました。そして朝は
過ぎ去りました。彼女が活々してゐるのや、悦ばしさうにしてゐるのをそれからつひぞ見ないのです。
夕方近くなると彼女は靜かに、物思はしげになつて、またも何かの悲哀が彼女の魅するやうな顔に暗い
影をつけるのでした。公爵夫人が彼女の様子を見に夕方時分やつて來たとき、カーチャが楽しげな風に
見せやうと不自然な努力をしてゐるのを私は見ました。けれども母が行つて了つて獨りになると、直ぐ
さま涙にくれるのでした。私の心は突き刺されました。彼女は私が注意してゐるのに氣附くと去つて了

ふのでした。これは思ひ設けなかつた危機が彼女に用意されたのでした。夫人は醫者に相談したり、カ
ーチャに關した細かい質問にするために毎日マダム・レオタールを呼び寄せ、カーチャの些細な動靜に
氣をつけるように吩咐しました。たゞ一人、私だけが事實を豫感して居たので、それがため私の心臓は
希望ではげしく轟いてゐました。

つまり小さなローマンスが解決して終りになつた譯です。カーチャが私の居る階上へ歸つて來てから
三日目、彼女が私を朝ちゆう何んなに驚くべき眼差で、何んなに長く瞞めてゐるかといふことを認めた
のです……四五遍このやうな眼差に出會つたので、其の度にお互ひに耻かしさうに顔を赤らめて眼を伏
せました。とうとう、彼女は笑ひ出して私から離れて向ふへ行きました。三時になると私達は散歩に行
かうと着物を着にかかりました。ふとカーチャが私に近づきました。

「あなた、靴の紐が解けててよ」彼女は言ひました「一寸、あたし結んであげるわ」
やうやくの事でカーチャが私に口きくやうになつたので、櫻のやうに顔を赤らめながら身體を曲げま
した。

「さ、貸して！」彼女は笑ひながら、堪へ切れないやうに言ひました。そこで彼女は腰を折つて、無理
矢理に私の足を取つて膝のせて紐を結びました。私は溜息を吐きました。ある甘い驚きで、何うした
心いか判からないのでした。紐を結び終へると、彼女は立上つて私の頭から瓜先まで、眺めました。
「あーら、襟も開いてるわ」彼女は私の襟首の露はになつてゐる肌指を觸れながら言ひました「さあ

此方向いて、私が結んであげるわ』

私は逆らひませんでした。彼女は私の頸に捲いてある手巾を解いて、自分の好きな形に結びました。『でなげや風邪ひいちやふわ』彼女は黒味勝ちの潤んだ眼を私に向けて輝かし、ほんとに狡さうに頼笑みながら此う言ひました。

私は有頂天になつて居ました。私に何麼ことが起つて居るのか、私とカーチャとの間に何んなことが起つたのか判らなかつたのです。でも有難いことにも間もなく散歩がすみました。でなげや私は堪え切れないで、街でカーチャに接吻したかも知れないのです。でも階段を登るとき、密つとカーチャの肩に接吻することが出来ました。彼女はそれと知つて驚きましたが何とも言ひませんでした。夕方彼女は着かざつて階下へ拉れて行かれました。公爵夫人の許に客が来てゐたのです。けれども此の夕方、怖しい騒ぎが持ち上りました。

カーチャに神經の發作が起きました。夫人は驚きの餘り我を忘れました。醫者が参りましたが、何と言つて好いか判らないのでした。といふのは屹度カーチャ位の年頃の子供は誰も助らなかつたからでした。でも私は左様は思ひませんでした。朝になるとカーチャは何時ものやうに紅い色をして、晴やかに、病の氣のない健やかな様子で私の處へ姿を見せましたが、今までになかつた辯と我慢とが現はれました。

先づ彼女は朝ちやうマダム・レオーターの言ふことを聴き入れませんでした。それから公爵老嬢の許へ行かうと不意に慾望を起しました。自分の姪に我慢することの出来なかつた老婦人は、仲遠ひのし

つづけで、彼女を見るのを嫌がつて居ました——ところが何時にも似合はず今度は遭はうと決心しました。初めの中に万事都合よく運んで、二人は仲よくして居ました。欺し屋のカーチャは、自分の悉べての過失や、遊び好きや、叫び聲や、老嬢に安辭を與へなかつた事などに就いて許しを求めるところを思ひ出しました。老嬢は嚴かに涙を浮べて許してやりました。でも此の悪戯娘はもつて深入りしようと思ひました。で外に一つの企みを含んだ冗談を物語ることに決めました。でカーチャは自分の罪を懺悔して齋戒してゐるこの尼さんを欺したのでです。で老嬢は欺されてゐなく悦んでゐた譯で、家中での寶で、偶像で自分の氣まぎれを満足させるためには母さへも捉へることの出来るこのカーチャを征服したことが、老嬢の自愛の心を大變悦ばせました。

そこで此の悪戯娘は第一に、老嬢の着物に名刺を糊付けにする心算であつたこと、それからフアリスタフを老嬢の部屋の寢臺の下に忍ばせること、それから眼鏡を折つて、すつかり本を持つて行つてしまつて、其の代り母の所から佛蘭西の小説を持つて來ること、疍癩玉を手に入れて床に抛りつけること、歌留多一組を老嬢のボケツトに忍ばせて置くこと、それからまた……といふ企のある事を白状しました。悪戯は次ぎへ々悪くなつて居ました。老婦人は憎惡の餘り我を忘れて青くなつたり赤くなつたりしましたが、とうとうカーチャは堪へ切れなくなつて嘔き出して其處から駆け出しました。老婦人はすぐ公爵夫人を呼びにやりました。一と揉め事が起つて、夫人は眼に涙を浮べてカーチャを許して呉れるやうに二時間も懇願し、そしてカーチャは病氣だからと思ひながら、カーチャを罰しないやうに許しを乞ひま

した。老嬢は根つから承知しませんでした。明日にでもなつから此の家を出て仕舞はう。娘が全快するまで罰するのを待つて、その後で自分の正當な怒を満足させるといふ言葉を聞かなければ心が納まらな
いとキツパリ言ひました。けれどもカーチャは厳しい非難に堪へられなかつたのです。でカーチャは階
下の公爵夫人の許へ拉れて行かれました。

けれども悪戯娘は食事がすむでから逃げました。階下の方へ忍んだ時に階段で私は出あひました。彼
女は扉を開いてフアリスタフを呼びました。彼女が怖るべき復讐を企んでゐるのに私は氣附きました。
そのたくらみは此うなのです。

老婦人に取つては執拗なフアリスタフより以上の敵といふものはなかつたのです。

フアリスタフは誰からも愛撫されなかつたし、誰をも愛しませんでした。そして敏つこくて傲慢で極
端に虚榮心が強かつたのです。彼は誰も愛しませんでした。みんなから相當の尊敬を要求してゐたの
は明らかです。みんなは恐怖を尊敬に變へて、彼を尊敬してゐました。ところが突然老婦人が來てから
形勢が變つて了ひました。つまりフアリスタフは怖しく侮辱されたのです——決して階上へ上つてはな
らないと禁じられたのです。

初めフアリスタフは侮辱の餘り氣狂ひのやうになつて、階上から下の部屋へ通じてゐる階段の仕切り
になつてゐる扉を、まる一週間といふもの足で引掻いて居ました。間もなくその追ひ出された譯が判つ
て、最初の日曜日に老婦人が教會へ出て行く時、フアリスタフは叫びや唸り聲をあげて老婦人に飛びか
ゝりました。犬を見たくないと言ふ老婦人の命令によつて犬は遠くへやられました。やうやく老婦人は
凶暴な犬の返報から救はれたのでした。この時からフアリスタフは嚴重な方法で階上へ登ることが禁じ
られ、老婦人が階下へ降りる時には遠く離れた部屋へつれ出されて、それについて召使ひに重い責任が
負はされたのでした。ところが怨を懐いてゐるこの動物は、三遍位階上へ突入する方法を見付けました。
階段に驅上るが早い。あつと云ふ間に部屋々々を駆け通つて、老婦人の寢臺のちき近くまで飛び込ん
で來ました。何物も彼を停めることは出来なかつたのです。好い工合に部屋の扉は何時も閉つてゐたの
で、人々が駆けつけて階下へ追ひ下ろすまで、老婦人の前で、烈しく唸つて居るばかりでした。老婦人
嫌なブルドックが居る間はしつきりなしに、まるで、噛みつかれたかのやうに、叫んで眞剣に、其
はの度に怖しさの餘りに病氣になつたのです。五六遍彼女は公爵婦人に自分の *intendant* (最後の通牒)
を述べ、しまひには我を忘れて、自分がフアリスタフを此の家から追ひ出すが好いとまで言ふやうにな
りました。公爵夫人はフアリスタフと別れることに同意しませんでした。

公爵夫人は滅多に人を愛しませんでした。がフアリスタフだけは子供に次いで世の中で何よりも愛しま
した。それは此ういふ譯です。

或る時、六年前、公爵は散歩から歸るとき、汚ない、病みついた哀れな犬をつれて居ました。それでもこの犬は純粹のブルドックでした。公爵はそこで犬を死から救つたのでした。けれども此の新しい寄留者は殊更粗々しく振舞つたので公爵夫人の催促で裏庭に曳去られて繩で括られました。公爵は逆らひませんでした。二年の年月がすぎ去つて家中の人が別荘で暮してゐた時、カーチャの弟のサーシャがネヴ河へ落ちたのでした。夫人はアツと叫んで身動きするかと思ふと子供の後から身を跳らせました。彼女はやつとの事で危い所を救はれましたが、その間に子供は流れに早くも押し流されて、着物だけが浮び上がりました。ボートを出しにかかりました。が、救ひ上げる見込みが到底なかつたのです。突然大きなブルドックが溺れかけた子供を目がけ、水に飛び込んで子供を齒に喰へ、意氣揚々と岸へ泳ぎつきました。夫人は駈け寄つて、泥まみれの濡れた犬に接吻しました。けれども其の時フアリスタフは、やはり感動のない様子で、フアリスタフと優しく呼ばれることで我慢してゐました。フアリスタフは誰の愛撫にも堪へられないで、夫人の理解と接吻の答へとして噛めるだけ彼女の肩を噛みました。夫人は一生涯この傷に苦しみましたが、感謝といふものは何時になつても盡きないのでした。フアリスタフはすつかり警戒を解かれて、淨められ洗はれて、立派な飾の附いた銀製の首環をつけられました。彼は夫人の部屋で立派な熊の毛皮の上に移りましたが間もなく夫人は不意の刑罰に氣をつけないで犬を擦ることが出来るやうになりました。彼女の寵愛のものがフリクスと呼ばれてゐることを知つて彼女は怖れを抱き早速何か名前を、精々古い名前を捜し初めました。でもゲクトールだとか、ツエルベルだとかそ

ういふ名前は餘り下品でした。家の寵愛物にまつたく相應しい名前が必要でした。たうとう公爵がフリクスが大食なのを想像化してフアリスタフと呼んだらと發議したのでした。この名前がブルドックの名に採用されて、それ以來ブルドックの名となりました。フアリスタフは黙つて陰氣に、誰に向つても飛びかからないで廉潔な英國人みたやうに行儀よく振舞ひましたが唯々つつしんで彼の居る熊の毛皮を廻つて行くこと、そして一般に相當の敬意を拂ふことを要求しました。時とすると生みの兒のやうに、時とすると不氣嫌に囚へられたかのやうになることがありましたが、この瞬間にフアリスタフは悲しみをもち、敵、彼の敵、彼の權利を侵した氣に食はない敵がまだ罰せられないのを思ひ出しました。すると靜かに二階へ通じてゐる階段を駆け登りますが、何時ものやうに戸が閉つた切りなを知つて、何處か近くに横になつて隅つこに隠れ、誰かが何うかして扉を開け放して置くのを意地悪く待ちかまへて居るのでした。ともするとこの怨みを抱いた動物は三日も待ち受けることがあつたのです。けれども扉に氣を付けよといふ嚴命があつたので、二ヶ月といふもの此うしてフアリスタフは二階に姿を見せなかつたのでした。

「フアリスタフ、フアリスタフ！」令嬢は扉を開けて、愛想よくフアリスタフを階段へ誘ふて呼びました。

この時フアリスタフは扉が開いてゐるのを嗅ぎつけて、自分の運命を決しやうと待ち構へてゐたのです。しかし令嬢が呼ぶと言ふことが有り得ない事のやうに思はれて、暫くは何うしても自分の耳を信じ

ませんでした。彼は猫のやうに狡猾で、不注意に扉が開かれてあるのに氣附いてゐる様子を見せまいと
して、窓に近寄つて力強い足を窓枠にかけて、向ふ側の建築を觀はじめました。——まあ何う見ても通
りすがりの人が漫歩きの途中、隣りの立派な建物を眺め楽しむために一寸立止つたといふ形でした。そ
の間、悦ばしい期待のために彼の心臓は動悸し、慰められてゐました。扉が開け放されたのを見た時、
彼の驚き、悦び、有頂天の悦びは何の位でしたらう。そればかりか彼が階上に這入り込むやうに、正當
な怨みを直ぐに満足させるやうに願ひながらカーチャが再び彼を呼び招いたのでした。彼は悦びの叫び
聲を發しながら齒を露き出して、怖しく勝ち誇つて、箭のやうに二階へ飛び込んだのです。

彼の威勢は素晴らしいもので、彼に途中で打突かつたものや、飛んで行く時に觸れたものは、跳ね返つ
たり其の場で引くり返つたりしました。フアリストフは大砲から飛び出した彈丸のやうに飛びました。
マダム・レオタールは怖しさで叫びました。けれどもフアリストフは最う肝腎の戸まで駆け付けて兩脚
で扉を撃つて居たので、しかし扉を開かないで、死にかゝつてゐる者のやうに唸りました。すると老婦
人の怖しい叫びが響きました。この時、彼方から澤山の敵なる家中の人々が駆け登つて来て、兇暴なフ
アリストフは手早く畏を投げられて、口笛を篋められ、四足を縛られて、繩によつて下の方へ曳かれて
戰場からおめくると歸つたのでした。

公爵夫人を呼びに使が送られました。

今度こそ夫人は許しを乞ふたり、氣嫌を取りなしたりしやうとは思はなかつたのでした。ぢや誰を罰

するの？ 彼女は「ぐさま一目でそれと推量しました。彼女の眼はカーチャに落ちました……正しく
さうなのです。カーチャは怖しさに震へて蒼ざめて立つてゐました。彼女は可愛さうに今やうやく自分
の悪戯が惹き起した結果が解つたのです。疑ひは何も知らない召僕にかゝるかも知れなかつたのでした。
カーチャはすつかり本當の事を話して了はうと極めてゐました。

『お前だらう？』公爵夫人は厳しく問ひました。

生きてゐると思はれない程カーチャは蒼ざめました。私は前へ進み出ながらキツパリした聲で言ひ
ました。

『私がフアリストフを入れたんです……つひ知らないで』私はつけ加へました。といふのは夫人の厳し
い眼付の前では私の勇氣が消え失せて了つたからでした。

『マダム・レオタール、見せしめに罰して下さい！』夫人は此う言つて部屋から出て行つたのです。

私はカーチャをチラと見ました、手をだらりと垂れ蒼白くなつた顔は地面を見つめて氣抜けがしたや
うに立つてゐました。公爵の子供に課せられる唯一の罰といふのは誰も居ない部屋に閉ぢ込めること
でした。淋しい部屋に二時間ばかり坐つてゐることは——何でもないことです。けれども子供が嫌々な
ら無理矢理に坐らせられて出ることがならぬと言ひ渡された時には、それは罰として充分の意味があ
ります。大抵カーチャ、弟は二時間ばかり坐らされたのです。私は自分の罪を奇怪な風に想像しながら
四時間もジツとして居ました。

私は自分の牢屋に這入りました。私は令嬢のことを考へました。私は打勝つたことを知つてゐたので、す。けれども四時間でなくして朝の四時まで坐りつづけました。それは此う言ふ次第です。

私を閉ぢ込めてから二時間経つて、マダム・レオタールは突然自分の娘が病氣になつて、彼女に遭ひたがつてモスクワから來ることを知つて居ました。マダム・レオタールは私の事を失念して出發したのです。多分私はもう部屋から出されたものと看視の下女は思つてゐたらしいのです。カーチャは階下へ呼び戻されて、母の許で夜の十一時までにはジツとして居なければならなかつたのです、戻つて見ると、私が寢臺に居ないので少からず驚きました。下女は彼女の着物を脱がせて寢せましたが、カーチャは私のことを訊くことの出來ないある事情があつたのでした。彼女は私を待ちながら、私が四時間閉ぢ込められてゐることを確かに知り、保母が拉れてくることを思ひながら横はつてゐました。けれどもナスチャは私のことをすつかり失念して居たので、其の上、私は何時でも獨りで着物を脱いでゐたのでした。此うして私は取り残されて閉ぢ込められたまゝ、夜を明かしました。

夜明けの四時頃扉を毀して部屋に押し入る音を聞きました。何うにかして、私は床に横はつて眠つて居たので、眼を覺ましても怖しさに眼を閉ぢて居たのです。けれども際立つて高く聞えてカーチャの聲を直ぐに聞き付け、それに次いでマダム・レオタールの聲を、次ぎに驚いてゐるナスチャを、其次ぎに女中頭の聲を聞きました。とう／＼扉が開きました。そしてマダム・レオタールは私の事を忘れて居たといふので許しを乞ひながら、眼に涙を浮べて私を抱きしめました。私は、涙に濡れて彼女の頸に身を

投げました。私は寒さの餘りブル／＼震え、露はな床に寝てゐたので骨の髓まで痛みました。私は眠でカーチャを捜しましたが、彼女は私達の寢室に駈け入つて寢臺に潜り込み、私が這入つた時にはもう眠つたのか、それとも眠つた振りか、寢てゐました彼女は夕方から私を待ち詫びながら、つひ寢入つてしまつて夜明けの四時になつて眼を覺ましたので、眼を覺して見て大騒ぎを始め、歸つて來たマダム・レオタールや保母や家中の下女達を呼び起して、私を自由の身にしたのでした。

朝になつて家中の人は私に起つた事を知りました。公爵夫人でさへ少しやり方が酷過ぎたと言つた程でした。公爵になると生れてからあんな様子を見た事はない位此の時は腹を立てました。彼は非常に昂奮して午前十時頃階上へ上つて來ました。

『御免なさい』彼はマダム・レオタールに云ひ初めました「あなたは一體何うしたのです？ ああ憐れな子供に何んといふ事をして下れたのです？ 残酷です。まつたく残酷です。野蠻だ、病み上りの縱弱い子供だ、幻想的な、怯々した、夢をみる娘だ。それにこの子を一晚中暗い部屋に置くなんて！ 彼娘を殺すやうなものです！ 暫らく貴女は彼女の過去を知らないのですせう？ 残酷な人としてあるまじき事だ。私はさう言ひますよ。奥さん！ 何うして此んな罰が出来るのかしらん？ 誰が此んな罰を工夫したのですか。誰が一體考へ附いたのですか？」

可愛さうにもマダム・レオタールは眼に涙を浮べて興奮しながら彼に一部始終を語り始めて、私のことを忘れて居たこと、娘が到着したこと、餘り長くさへなければ罰といふことは元來善いといふこと、

そしてチャン、チャック、ルツソーさへも何か其の様なことを言つて居たといふことを話しました。

『チャン、チャック、ルツソーだ！ 奥さん！ チャン、チャック、ルツソーは其那ことを言ふ事は出来なかつたのですよ、チャン・チャックは權威者ぢやないチャン・チャックは教育に關しては口出し出来なかつたし、其のやうな權利もない。チャン・チャックは自分の子供達から背かれたのですぞ、奥さん！ 彼は悪い人間です、奥さん！』

『チャン・チャック、ルツソーが！ ジャン・チャックが悪い人間ですつて！ 公爵！ 公爵！ 何といふ事を被仰るのです？』

マダム・レオタールはすつかり腹を立てました。

マダム・レオタールは奇妙な女で、何よりも侮辱されることが嫌ひでした。誰か彼女の好きな人を傷けたりコルネールやラシーンを掻き亂したり、ウオリテルを侮辱したり、チャン・チャック・ルツソーを悪い人間だとか野蠻人だとか呼んだりすると——それこそ大變です！ 涙がマダム・レオタールの眼から湧き出て興奮の餘りブル／＼震へるのです。

『貴方は何うかして被居います、公爵！』彼女は言ひましたが、興奮のために我を忘れてゐました。公爵はすぐに氣がついて許しを求め、やがて私に近づいて来て深い感動をもつて接吻し、十字を切り、そして部屋を出ました。

『pauvre prince! (氣の毒な公爵！)』マダム・レオタールは今度は感動して言ひました。それから私達は投

業用テーブルに向つて腰かけました。

けれども令嬢は散漫教はつてゐました。晝食に行く前に彼女はすつかり決心して私に近づき、唇に笑を浮べ、私の肩を捉へて、何かしら耻しいことのやうに口早に言ひました。

『ね、あの私の代りに昨夜は坐り通したの？ 御飯がすんでから廣間で遊びませう』

誰か近づいてきました。で令嬢は直ぐさま私から離れました。食後夕方、私達は階下の大きな部屋へ手を握り合ひながら降りて行きました。令嬢は深く感動してゐて重たげに溜息をつきました。私は今までになく愉快で幸福でした。

『鞠遊びやらない？』彼女は私に言ひました『此處に待つてゐて頂戴！』

彼女は廣間の片隅に私を残しましたが、自分は、向ふへ行つて私に鞠を投げる筈のところ、さうしないで私から三步の處に立止つて私を瞞め顔を赤らめ兩手で顔を蔽ふて眩椅子に身を落しました。私が彼女の方へ身を進めたので、私が出て行きたがつて居ると彼女は思つたのでせう。

『行かないで、ネートチカ、暫く一緒に居て頂戴！』彼女は言ひました『今に何でもなくなるから』

けれどもすぐさま立止つて、顔を眞赤にして涙にまみれながら私の頭に身を投げました。彼女の頬は濡れて居り、唇は櫻桃のやうに脹つぼく、髪の毛房はバラ／＼に亂れてゐました。彼女は我を忘れて私に接吻しました。顔だとか、眼だとか、唇だとか、頸だとか、手だとかに接吻しては、ヒステリイになつたかのやうに泣きました。私は堅く彼女に擦り寄つて甘い悦びをもつて、長く別れてゐた仲好しのや

うに、また戀人のやうに抱擁しました。カーチャの心臓は私にも音が聞える位に強くドキン／＼と鳴つてゐたのです。

隣の部屋で聲がひびきました。カーチャが公爵夫人に呼ばれたのでした。

「ア、ネートチカ、ぢやね、明日まで、夜まで。一寸二階へ行かして頂戴よ、此處に待つてゐてね」
彼女はおしまひに靜かに堅く接吻してナスチャの呼び聲に飛んで行きました。私は二階へ駆け上つて甦つたもののやうに眩椅子に身を投げて、蒲團に頭を埋めて嬉し泣きに泣いたのです。胸の破れるばかり心臓は打ちました。何うして夜まで過ごしたか覺えて居ないのです。十一時になつてやうやく私は眠りにつきました。十二時になつてから令嬢は戻つて來て私に微笑みかけましたが、何とも言葉をかけませんでした。ナスチャは彼女の着物を脱がせ始めましたが、それが故意と緩くしてゐるやうでした。

「早く、早く、ナスチャ！」カーチャは小言を言ひました。

「何うなすつたのです、お嬢さま、階段をお駈けなつたんぢやないんですか？ お胸がドキ／＼してますわ」ナスチャは訊ねました。

「まあ本當に、ナスチャ！ 何んて嫌な事、早くつたら、早くさ！」そして令嬢は自烈たさうに小さな足で床を踏み鳴らしました。

「まあ何んで方でせう！」靴を脱がした令嬢の小さな足に接吻しながらナスチャは言ひました。

やうやく、仕度が終へて令嬢は横になり、ナスチャは部屋から出て行きました。すると間もなくカー

チャは寢臺から起き上つて私の方へ飛んで行きました。私は彼女に出喰はして聲を立てました。

「此方にいらつしやいな、私の方でお寝なさいな！」彼女は私を寢臺から起こしながら言ひました。もち／＼する中に彼女の寢臺に行つて了ひ二人は抱き合つてお互ひにしつかり身體を押しつけました。令嬢は私の産毛まで接吻しました。

「夜中に貴女がわたしに接吻したの覺えてるわよ！」彼女は罌粟の花のやうに顔を赤らめながら此う言ひました。

私は泣いてゐました。

「ネートチカ！」カーチャは涕泣しながら囁きました「私のエンゼル、私は前からすつと前から愛してゐただわ！ 何時頃からだか知つてゐる？」

「何時から？」

「貴女が自分の父さまの辯解をしてゐたとき、お父さまがお詫びして來いと私に言つたでせう。ネートチカ……可愛さうな孤兒！」彼女はまたも、のべつなしに接吻しながら、切れ／＼に言つて、泣いたりしました。

「ア、カーチャ！」

「何なの？ 何うしたの？」

「何ういふ譯で私たちは此んなに永く……こんなにまで永く……」私は言ひ終へることが出来なかつた

のです。私達は抱擁して三分位は何も言ひませんでした。

『お聴きよ、私について何んな事を思つてゐたの？』令嬢は訊ねました。

『ア、何の位思つたことせうカーチャ！ 何時も、晝だつて夜だつて思つたわ』

『それを夜になつて私のことを話してたせう、聞いたわ』

『本當？』

『何遍か泣いたせう』

『それぢや、何故あんなにいつも傲慢だつたの？』

『それでも私が馬鹿だつたからなの、ネートチカ。私は傲慢になつてゐたの、それだけの事だわ。私は貴女にはすまないわ』

『何で？』

『やつぱり私が悪かしたからなのです。そしてあなたが私より立派だつたからなのです。それからお父さまが貴女の方を餘計に愛してゐるからなのです。でもお父さまは善い方ですわ、ネートチカ！ さうせう？』

『え、ほんとに！』私は公爵のことを思ひ出しながら涙を浮べて答へました。

『善い方だわ』眞面目にカーチャは言ひました『だけど何うしたら好いんだらう？ しょつちうあのやうに……あの、その後でね貴女に許しを乞ひ初めた時、私泣き出しさうになつたので、またも腹が立つたの』

『え、貴女が泣き出しさうだつたことなら知つてゐるわ、知つてますとも』

『ちよつ、黙つてらつしやいよ、お馬鹿さん。自分こそあんな泣虫の癖に！』カーチャは呼んで手で私の口に蓋しました。『お聴きつたら、私ね、貴女を愛しやう愛しやうと思つたんですけれど、ふいと憎らしくなつて來たのでね、憎んでゐたわ、憎んでゐたわ……』

『それは何うしてなの？』

『そして貴女に憤つてたの、何うしてだか分らないわ！ それから、貴女は私なしぢや暮して行けないと氣附いたので、此う思つたの。これであの嫌らしい女を苦しめてやらうつて！』

『まあ、カーチャ』

『あたしの魂！』カーチャは私の手に接吻しながら言ひました。『でね、貴女とは決して口を利かうとしなかつたの、どんな事があつてもね、覺えてゐる？ ああのファリストフカを私が擦つたことを？』

『まア何んて大膽な人でせう！』

『私は何んて臆……病……者……でせう』切れ／＼に彼女は言ひました。『何うして犬に近づいたかつてことを知つてゐる？』

『何うしてなの？』

『貴女が見てゐたせう、貴女の見えてゐることに氣附いたので……オ、！ 何うにでも成るがいい。私』

は近づいたんです。貴女怖つたの、ええ？ 私の身を氣づかつた？」
「怖いことだわ！」

「ええ、知つてたわ、ファリスタフカが行つちやつた時は、まあ何んなにか嬉しかつたでせう！ まあ本當にあのば……け……ものが行つて了ふと。何んて臆病になつたこととせう！」令嬢は神經質な笑を浮かべましたが、突然、熱い頭を擡げて凝乎と私を瞞めました。眞珠のやうな涙が彼女の長い睫毛で顔えま

した。
「だけど、貴女に一體何があるんだらう、何うして此んなに戀しいんだらう？ まあ此の通り、貧乏な薄色の髪をもつた、ほんとに愚かな・泣虫の眼玉の碧い。わたしのみ……な……し……こ……」
そしてカーチャは私に接吻しやうとグーツと身體を曲げました。彼女の涙がポタ／＼私の頬に落ちました。彼女は深く興奮してゐたのです。

「こうまで愛してゐながら絶へず考へたのよ——いやさうぢやない！ 打明けるのは止さうつて！ 何て強情つ張りだつたでせう！ 何を怖れて居たのかしら、何が貴女に對して耻しかつたのかしら！ でも此うやつて、もうすつかり良くなつたんだわ！」

「カーチャ！ 痛いの！」私はすつかり悦びで有頂天になつて言ひました。「魂が病みつきさうだわ」
「でネートチカ！ 先きをお聴きよ……ね、聽いてよ、誰が貴女をネートチカと呼んでたの？」

「母さま」

「母さまの事をすつかり私に話して呉れないこと！」

「ええ、すつかり、すつかり」私は喜んで答へました。

「レースの附いた私の二枚の手巾は何うしたの？ リボンを何の用があつて持つて行つたの？ まあ貴女は耻しらすね！ ちゃんと知つてゐるわよ」

私は笑つたり赤くなつたりして涙さへ出しました。

「いゝえと私は思つたわ、堪らへてゐるあなたを苦しめてやらうつて、でも其の後に私はちつとも愛してゐるんぢやない、我慢が出来ないで考へたわ。でもまあ貴女は何といふ温順しい人でせう、何て小羊さんなんでせう！ でも私が馬鹿な女だつて貴女が考へはしないか、それを何んなにか怖れてたでせう！ 貴女は賢いわ、ネートチカ、ほんとに賢いぢやないの？ ええ？」

「あら、何言つてるのカーチャ！」私は腹を立てる位になつて答へました。

「いいえ、貴女は賢いわ」カーチャはキツパリと眞顔になつて言ひました「知つてゐるわ。或朝、怖い程、貴女を愛し始めたの？ 一晩中夢に貴女を見たわ。で母さまの傍へ行つて彼處で暮さうかしら。貴女を愛したくない、愛したくないと思つたので。けれども其の次の夜になると眠りながら、若し貴女が昨晚のやうに近づいて來たらうと思つたので、すると貴女は來たわ！ あゝ私は寝た振りをして……まあ何んといふ、私達は耻しらすなのでせう！ ネートチカ」
「それでゐて何うして少しも愛しなかつたの？」

「それはね……何を言つてゐるんだらう私は……だつてあなたを愛しつづけて居たんぢやないの！ 一つと愛してたわ！ たうとうお仕舞ひに堪へ切れなくなつてさ、何時か、貴女に接吻するか、それとも死ぬ程抓つてやらうと考へたのよ。さあお馬鹿さん、抓るわ！」

此う言つて彼女は私を抓つたのです。

「あの、靴の紐を結んでやつたのを覚えてゐる？」

「え、」

「覚えてる、氣持良かったの？ 私は、ほんとに可愛いと貴女を見て思つたわ。この人の靴を結んであげたら、何う考へるかしらつて！ それから心がすつかり愉快になつて、心から貴女と接吻したかつたの……それでも接吻しなかつたわ。でも後で何んだか馬鹿に可笑しくなつてねえ、ほんとに！ 一緒に散歩してゐるかのやうに道々で不意に笑ひ出したくなつて来て、貴女を見て居られない位可笑しかつたの。でもね、ほんとうに悦しくつて、貴女の後から牢屋の中に這入つて行つた位でしたの」

がらんとした空部屋が「牢屋」と呼ばれてゐたのです。

「怖かつた？」

「ほんとに怖かつたわ」

「貴女が獨り言云つて居たのは餘り嬉しくはなかつたけれども、私の傍に坐つてゐたのは嬉しかつたわ！ この人は泣いてゐる、私はどんなに此人を愛してゐることだらう！ 明日此の人に接吻してやら

う！ さう思つたのよ。それでゐて氣の毒とは思はなかつたわ。ほんとうに。泣いてさへ居ながら貴女を氣の毒に思はなかつたわ」

「でも私は泣いてなんかゐなかつたわよ。たゞ嬉しかつたばかりなのよ」

「泣かないつて？ まあ悪い人だわ、この人は！」 彼女は叫んで、自分の唇で私に吸ひ附きました。

「カーチャ、カーチャ！ あゝ何んてあなたはこう美しいんでせう！」

「嘘でせう？ それは好いとして、私にしたいことがあつたら何でもするが好いわ！ 私を苦しめるなり、抓るなり！ さあ後生だから抓つて頂戴！ 私の可愛い人、さあ抓つてよ！」

「この悪戯さん！」

「そしてそれから？」

「お馬鹿さん！」

「それから！」

「それから接吻して頂戴」

で私たちは接吻したり泣いたり笑つたりしました。接吻のために二人の唇は脹れ上つた程でした。

「ネットチカ！ 何でもいいから、毎晩私の所に寝に来るでせう。接吻するのは好き？ ちや接吻しませうよ。でも貴女がそんなに陰氣になるからそれが嫌なの。何故陰氣なの？ 話して下れないこと？」

「えゝすつかり話すわ、でも今陰氣ぢやないの愉快だわ！」

『いいえ、今に私みたいに頬に赤味が出て来るでせう！ あゝ明日が早く過ぎて了へばいい。眠たいの？
ネートチカ』

『さあ』

『さう、ぢや話しませうよ』

それから尙ほ二時間ばかり話し込みました。隠し立てしたものがあつたか、それは神様が知つて居ます。先づ令嬢は未来の色々の計畫や唯今の身の上を打明けました。彼女が誰よりも殆んど私よりも母を愛してゐることがそれで判つたのです。それからマダム・レオタールはほんとに美しい婦人で、厳格な方ではないといふことに二人は極めました。扱て其處で明日は何處ことをしやうか、明後日は、と考へましたが、何でも人生は二十年位のものだと思つてゐたのでした。カーチャは二人して此んな風に暮さうと考へ附きました。それは一日彼女が私に何か吩咐ける、私が何でも其の通りにする、其の次ぎの日は位置をかへ——て私が命令する、彼女は嫌應なしにそれを聴く。それから二人はお互ひに差別なしに命令し合ふ。そこで若し誰かが故意に云ふことを聴き入れないときには先づ表面は仲が悪くなる、その後で何方からか仲直りを急ぐ。まあ此ういふ譯で、一口で言へば終りのない幸福が私達を待つて居たのでした。やがて私達はしやべり疲れて眼を閉ぢました。カーチャは私より早く眠つた癖に私を寢坊だと思つて笑ひました。朝になつて一緒に眼を覺まして素早く接吻しましたが、それは誰か此の部屋に這入つて來たので、それまでに都合よく私は自分の寢臺に駆けつけました。

一日中、私達は悦しさの餘り何うしていか判りませんでした。何よりも他人の眼を怖れて、しよちつゆうみんなから逃げ隠れして居たのでした。其の中に私は過去のことを話し初めると、私の物語を聴いてカーチャは感動の餘り涙を浮べました。

『意地悪、何んて意地悪い人なんでせう！ 何うして今まで少しも話して呉れなかつたの？ 此んなに此んなにあたしは愛してゐたのに！ 通りで子供が酷く苛めたの？』

『えゝ酷く。ほんとに子供達が怖かつたわ』

『まあ悪い奴！ ほんとにネートチカ、通りで一人の子が外の子を撲つてゐたのを見たことがあつてよ。明日密つとファリスタフキンを曳いて來て、若し其んな子供一人に遭つたが最後、叩き倒してやる、叩き倒してやる！』

彼女の眼は怒りに輝きました。

私達は、誰でも這入つて來ると驚きました。接吻する時は、誰か止めやしないか、それを怖れました。でも此の日に私達は少く見ても百遍は接吻しました。此うして其の日も翌日も過ぎました。私は喜びの餘り死にはしないが、幸福の餘り息塞りはしないか怖れました。けれども、私達の幸福は長くは續きませんでした。

マダム・レオタールは令嬢の一舉一動を報告しなければならぬのでした。彼女はまる三日間私達を觀察してゐましたが、三日の間に話す種が澤山出來たのです。でとう／＼公爵夫人の所へ行つて、觀

察した事をすつかり——つまり私達二人が何かしら夢中になつてゐるので、二、三日の間といふものお互ひに離れないで、絶へ間なしに接吻したり、泣いたり、笑つたり、まるで馬鹿か、何ぞのやうに——馬鹿か何ぞのやうにのべつなしに饒舌るし、ほんとに此う云ふことは今までに無いことで、何ういふ次第で此う成つたか判らないけれども、多分、令嬢がある病的な危機といふものに差しかゝつたのぢやないか、そして二人を餘り會はせない方が良くはないかと思はれると——彼女は申し述べました。

「前からさう思つてゐました」公爵夫人は答へました。

「この變な親なし兒が私達の心配を作つてゐることはちやんと知つてゐたのです。私はあの娘のことをあの娘の育ちを何と聞いたか——怖しいことです、本當に怖しいことです！ あの娘はカーチャに目に見えるやうな感化を與へてる。カーチャが大變あれを愛してゐるとお話でしたね？」

「え、我を忘れて」

夫人は悲しさに顔を赤らめました。自分の娘について私に嫉妬してゐたのでした。

「不自然なことです」彼女は言ひました。「以前はお互ひに他人行儀だつたので、内々喜んでゐたのです。いくらあの親無し兒が子供だと言つても油斷も際も出来たものぢやない。お判りですか？ あの娘は牛乳と一緒に自分の教養、習慣、それから多分作法までも吸ひ込んだのです。それで公爵はあの娘に何を見つけてゐるのかしら？ 私は何遍となく寄宿舎にやつて了ふやうに勧めたんだけど」

マダム・レオタールは私の肩を持たうと考へましたが、もう公爵夫人は私達を離さうと決心してゐた

のでした。で、すぐさまカーチャを呼びに人をやつて、此の次の日曜日までつまり丁度一週間、私と違へないと云ふことを階下で話して聞かせました。

私はそれに、後れて夕方になつてからすつかり知つて、恐怖に打たれました。カーチャの事を考へましたが、別れるといふことはカーチャに堪へられないだらうと思はれたのです。私は悲しさと苦しさに氣も狂ふばかりで、夜になつて病氣になつて仕舞ひました。夜が明けて公爵は私の所に来て、私の希望してゐたことを囁きました。公爵は出来る限りをつくしましたが、何もかも駄目になつて、公爵夫人は考へを變へませんでした。段々私は絶望に陥り初めては悲哀に捉へられました。

三日目の朝、ナスチャがカーチャからの手紙を持つて來ました。鉛筆で粗雑な走り書で次のやうに書かれてありました。

『私は大變貴女を愛してゐます。母さまの傍に坐つて、何うかして貴女の所へ逃げ出さうと考へつゞけて居ります。逃げ出さう——と私は言ひました。で悲しんでゐるんぢやありません。私を愛してゐるか何うか書き送つて頂戴。さうしたら一晩中貴女を夢に抱き緊めませう、怖しく苦しい。ネートチカ。お菓子を送つてあげます。さやうなら』

私も同じやうな方法で返事をしました。一日中、カーチャの手紙を見て泣き通しました。マダム・レオタールが慰めるので却つて苦しいのでした。マダム・レオタールが公爵の所へ行つて、若しカーチャに遣へないとなれば、私が吃度三度目の病氣になるだらうと、マダム・レオタールが言つたことや、公

爵夫人に告げたことを後悔してゐることを夕方になつて知りました。カーチャは何うしてゐるか？ 此
うナスチャに訊ねるとカーチャは泣いてはゐないけれども恐ろしく蒼ざめてゐると答へました。

朝になつてナスチャは私に囁きました。

「書齋にゐる旦那様の所へいらつしやいよ、右の方の階段からいらしやいよ」

私は豫感ですつかり勢づきました。望で息塞りながら私は駆け降りて書齋の扉を開けました。彼女は
見えないのでした。突然カーチャが後から抱きついて熱く接吻しました。笑、涙……やがてカーチャは
私の抱擁を解いて栗鼠みたいに父に攀ぢ登り、肩の上に立上りましましたが、よろ／＼として其處から
椅子の上に跳び降りました。彼女に次いで公爵も引くり返りました。令嬢は嬉しがつて泣きました。

「父さま、何んて好い方なのでせう、父さまは！」

「お轉變さん！ 何うしたんだい？ 友情と云ふのは何なものかね？ 愛とは何だね？」

「お黙りなさいよ、父さま、貴方は私達のことには知らないんです」

そして私達は又も身を投げて抱き合ひました。

私はまぢ／＼と彼女を見つめました。三日の中に彼女は瘦せてしまひ、顔の紅色は褪せて蒼味が顔に
忍び出てゐました。悲しさに堪へず私は泣き出したのです。

やがて、ナスチャがノックしました。これはカーチャを拉れて行つて、訊くことがあるといふ合圖で
した。カーチャは死のやうに蒼ざめました。

「澤山だよ、子供達、私達は毎日遣へるよ、さやうなら、神が祝福するだらう！」公爵は言ひました。
彼は私達を見て感動して、哀れに考へました。夕方になつてモスクワから小さなサーシャが思ひがけ

なくも病みついて、臨終だと云ふ報知が来ました。公爵夫人は明日になつたら出發することになりました。
これは火急のことで令嬢と別れる間際まで私がちつとも知らなかつた程でした。公爵自身も出發を主張
しましたが、夫人は辛うじて承諾しました。令嬢は死人のやうでした。私は我を忘れて駆け降りて彼女
の首に抱きつきました。旅行用の馬車が最早玄關に待つてゐました。カーチャは私を見ると叫んで感
覚を失つて倒れました。私は接吻しやうと抱きました。夫人は蘇生させようと思ひましたが、やうやく彼女
は我に返つて私をまた抱きました。

「さやうならネートチカ！」彼女は言ふに言はれない表情を浮べて笑ひながら不意に言ひました「お別れ
しませう。私は病氣ぢやないんだもの、一ヶ月も経つて又歸つて来てよ。さうしたらもう放れないわ」

「澤山だよ」公爵夫人は靜かに云ひました「行くんだよ」

けれどもカーチャは、も一度引返して、痙攣するやうに私を抱き緊めました。

「私の生命！」と私を抱きながら囁きました「さやうなら」

私達はお別れの接吻を交はしました。それから令嬢は姿を消しました——長い間、ほんとに長い間。
それから再會するまで八年の年月が過ぎ去つたのです。

私は私の子供時代の挿話、カーチャが私の生活に初め現はれたその挿話を殊更此んなに詳しく物語りましたが、私達の経歴は断ち切る事の出来ないものでした。彼女のロマンスは——私のロマンスです。私は彼女に出遭ふように運命づけられてゐたのであり、彼女は私を見出すように運命づけられて居たかのやうです。それに私け自分の子供時代の追憶をも一度繰返すといふ満足を押へることが出来なかつたのです……これから急ぎ足で私の物語を進めます。私の生活に急に何か平穩になつて、私が十六才になつたばかりの時、再び眼が醒めたやうな気がしました……けれども——公爵一家が一しよにモスクワに行くよになつた事を一言云ひます。

私達はマダム・レオタールと一緒に残されました。

二週間経つて速急な使が到着して、ホテルブルグへの旅行は無延期となつたと報らせました。それはマダム・レオタールが家庭の都合でモスクワへ行く事が出来ないためで、公爵家における彼女は勤めを終へましたが、公爵の家庭から離れずに、公爵夫人の長女アレクサンドラ、ミハイロフナの許へ移りました。

私はこのアレクサンドラ・ミハイロフナについては未だ一ト言も話しませんでしたし、遭つたといつてもたつた一遍きりなのでした。彼女は公爵夫人の最初の夫との間に生れたので、夫人の素性と親戚関係といふものは到つて不明瞭なもので、公爵夫人の最初の夫といふのは請負師だつたのです、夫人が二度目の結婚をした時、この成長した娘を何うしたら好いか、さつぱり判らなかつたのでした。耀いた

仲間に信頼することは出来ませんでした。持参金も相當に付けてあつたのです。やうやく、四年前に或る身分の高い金持に娘を片附けることが出来ました。アレクサンドラ・ミハイロフナは違つた社會に出入りして、身の廻りに新しい世界を見ました。公爵夫人は一年に二回彼女を訪問し、繼父なる公爵はカーチャを拉れて毎週訪問しました。でも夫人が最近になつてカーチャを姉の所へ寄越すのを好まないで、公爵は密つとカーチャを呼ぶのでした。カーチャは姉を尊敬してゐたのですが、二人は性格の上からまるで反對の位置にありました。アレクサンドラ・ミハイロフナは二十二才で、靜かな、優しい、愛情の罩つた女でした。何かしら秘められた悲哀、人知れぬ胸の傷みといふものが鋭く彼女の美しい顔に暗い影を描いてゐるやうでした。子供に悲しみがある時のやうに、ある眞面目さと嚴肅さが彼女の天使のやうに晴やかな顔から去らないのでした。深い同情を感じないで彼女を見ることは出来ないものでした。蒼白くて、私が初て遭つた時は、肺病の傾向があると言はれて居ました。まったく孤獨で家から離れることも、人混みの中へ出ることも嫌ひで尼さんのやうに暮して居たのです。子供はありませんでした。彼女がマダム・レオタールの許に到着し、私に近寄つて深い感動をもつて私に接吻したのを覚えてゐます。彼女は瘦せた、可なり老けた男を一人同伴しました、其の人は私も見て涙を浮べました。これが提琴家のBでした。アレクサンドラ・ミハイロフナは私を抱いて、自分の娘になつて自分と一緒に暮したいか何うか訊ねました。彼女の顔を覗めて、私のカーチャの姉だと知り、心に微かな痛みを覚えて彼女を抱きましたが、その痛みからして胸ちゆうが痛み初めました……又も誰かゞ私に『孤兒！』

と言つたかのやうに。其の時アレクサンドラ・ミハイロヴナは公爵からの手紙を見せました。それには四五行私に關して書いてありました。私は歎息しながら読みました。公爵は私の末永い生活と幸福とを祝福して自分の別な娘を愛するように頼みました。カーチャも私に四五行の手紙を書きましたが今は母と別れないといふことが書いてありました。

其處で私は夕方になると、今まで身内のもゝやうに慕はしくなつて來た皆から再び引離されて、異つた家庭、異つた家の人となり、見知らぬ人々に近づくのでした。心の悲しみのために堪らなく苦しく悩みながら出發しました……これから新しい事件が始まるのです。

VI

私の新しい生活は隱遁者の中に遣られたかのやうに穩かに靜かに過ぎました……私は養育者の許で八年餘りも暮してゐましたが何週か家で夜會晚餐會を催して、何やらして親戚や友人や知り合ひの人々が集つた事がある外、此時代に何んな事が有つたか覺えて居ないので。折々訪ねて來た誰彼や、家族の友であつた音楽家のBや、アレクサンドラ・ミハイロヴナの夫に用を帯びた時だけ顔を出してゐた人々を除いては、私達の家に訪ねて來る者はありませんでした。アレクサンドラ・ミハイロヴナの夫といふのはしよつちゆう仕事や勤めで忙しく、家庭と世間的の生活と同じ位割り當てゝゐる自由な時間

をほんの少しではありましたが、見附けることが時偶出來たのです。輕ろんずる事の出來ない世間的の關係といふものが社會に於ける自分といふものをしば／＼考へさせました。彼は飽くことを知らぬ野心家だといふ評判が到る所に擴がつてゐましたが、彼は巧妙な眞面目な人の評判を利用してゐたし、素敵に高い地位を占め、幸福と成功とが、進んで彼を捉へたかのやうであつた爲に、社會が彼から同情を取り去ることは思ひも寄らないことでありました。まだそれより以上であつたのです。皆は彼に何か特殊の興味を感じてゐたのですが、彼の妻に對してはそれと反對にまるで興味なんと言ふものは感じなかつたのです。アレクサンドラ・ミハイロヴナはまつたく孤獨で暮して居たのでしたが、それを悦んで居るようでもありません。彼女の温順しい性格は隱遁生活のために作られてあるやうなものでした。

彼女は心全體に結び附いて、自分の實の子のやうに愛して居ました。そして私はカーチャと別れて未だ涙が乾かず、心臓の病んだまゝ、私の養ひ親の温い抱擁に飢えたやうに身を投げたのです。彼女に對する燃えるやうな私の愛は此の時ら斷ち難いものになりました。彼女は私に取つては母であり姉であり友達であり、世の中のものすべてよりも私を大切に私を少女時代に氣をつけてゐました。その上にまた自分の本能と直感とによつて、彼女の運命は、靜かな平穩らしく見える生活によつて、外面的な自由によつて、よく彼女の顔に輝く靜かな晴やかな微笑によつて、たゞ一眼で判斷の出來るやうなさうした幸福なものでは決してないといふことを直ぐに認めました。それで私が發育するに従つて、私の養ひ親の運命について何か新しい事實を解くことが出來、私の心でもつて苦しく、ジリ／＼と察しらるゝものは

果して何であるかと判り、そして私の彼女に対する愛着は悲しい意識と共に段々と成長し堅くなるのでした。

彼女の性格は弱々しく臆病でした、彼女の顔の表情が明るい、穏かなものであつたにも拘らず、彼女の素直な心を何んな恐怖が苦しめてゐるのか一度で推量することは出来ないのです。誰であつたつても、それを彼女が愛する事が出来なかつたと考へることも出来なかつたと考へることも出来ないことでした。同情は常に彼女の心の上に、嫌忌そのものゝ上にさへも置かれてあつたのです。——でさうする中に彼女は少い親友に愛着を感じてゐましたが、まつたくの孤獨で暮してゐました……彼女は絶えず性格的に熱情があつて、印象の深い女で、それと同時に自分の印象を自分で怖れてゐるかのやうにまた例へそれが夢であつても自分の心を絶へず見守ることを忘れないかのやうでした。時によると、最も晴やかな瞬間に於て突然彼女の眼に涙を私は認めましたが、丁度何かの苦しい堪へがたい思ひ出が不意に彼女の良心を心の中に燃え立たせたやうに、また何かと彼女の幸福を見守り、憎くらしさうに幸福を掻き亂してゐるやうでした。で彼女の生活の中でもつと幸福な、もつと静かな晴やかな瞬間があつとすれば、それだけ悲哀が近づくので、不意の悲哀と涙とはそれだけ眞實らしいものであることが判りました。彼女に発作が起きてるやうに思はれたのです。私はまる八年の間に、安らかな月とてはたゞの一つも思ひ出せないのです。夫は明らかに彼女を愛してゐたし彼女は彼を尊敬して居ました。けれども一眼見て二人の間には解き難い何ものかあるやうに見受けられました。何かしら秘密が彼女の運命にあるらしく、

少くとも私は初めの瞬間からそれを疑ひ始めました……

アレクサンドラ・ミハイロヴナの夫は初め遭つたときに氣難かしい印象を私に與へました。この印象は私の子供時代に芽ぐんだので、どうしても消えないものでした。風體から言へば、背の高い瘦せた人で、何か譯があつて大きな青眼鏡で自分の眼付を隠してゐる人でした。打解けない性で、妻と向ひ合つて居るときでさへ話の種が見つからないといふ風で素氣なかつたのです。彼は明らかに人間に苦しめられてゐたのです、そして私には少しの注意も拂ひませんでした。私の方では夕方よく三人がお茶を呑むためにアレクサンドラ・ミハイロヴナの客間で顔を合はせましたが、彼が席についてゐる時は何時も怖を氣ついてゐたのです。密つとアレクサンドラ・ミハイロヴナの顔を窺見するのですが、彼女は自分の素振の端々に氣を配り、若し夫の今更に荒々しい殿い様子に氣附いたならば、顔が蒼醒めるし、若し夫の言葉の中に何か當て擦りでも聽き取るか推量するかしたならば、バツと赤らめるのを、私は痛ましく思ひながら認めました。彼女に取つて彼と一緒に居るのが苦痛らしく見受けられましたが、それかと言つて、彼なくして一分も生きて居られないのは明らかでした。彼女が、彼の一言一句、彼の素振の端々に深い注意を拂つてゐるので、またそれが丁度自分で出来ることなら何とかして彼の氣嫌を取りなしたいといふ風であり、自分の望みが遂げられなかつたこと、感づいてゐるやうな風に見えましたのでこれが私を驚かしたのです。また彼女は何かして彼の許しを得ようとしてゐたので、彼の顔の一寸した微笑、優しい一言、これで彼女は幸福になるのです。それは恰度、また臆病な、まだ遂げられさ

うにない戀の初期に見るやうなものでした。彼女は難病人に對するやうに夫を世話しました。彼がいつも何か痛ましい哀れみをもつて見てゐたやうに思はれるアレクサンドラ・ミハイロウナの手を握つて書齋へ歸つて行くと、彼女は嫌氣が直るのでした。彼女の素振りや話は見る間に愉快に自由になります。或る動搖が夫との面會後いつも彼女の胸に残るのでした。すると直ぐさま、彼の言葉をみんな檢べてみるかのように、二人が交はした言葉を一つ一つ思ひ出し始めるのでした。妾の思つてゐる通りか、ピョートル・アレクサンドロウキチは此う言ふ意味で言つたに違ひないか、など、私に頼むやうにして訊ねることが少くありませんでした。——それは恰度、彼の言つた事に別な意味を見つけよつとしてまる一時間かゝつてすつかり氣を休め、彼が彼女にすつかり満足してゐること、彼女が勝手に氣を揉んでゐるに過ぎないことを、自分に説きつけてゐるやうでした。すると急に優しく、嬉しく、嬉しい氣持になつて、私に接吻したり、私と一緒に笑つたり、またはピアノに近附いて二時間ばかり即曲で弾くのでした。けれども彼女の喜びの突然消えて了ふことが能くありました。すると彼女は泣き出すのでしたが、怖れ慄いてゐる彼女を見てゐると、彼女は直ぐさま、聞かれるのを怖れてゐる風に、囁き聲で、自分の涙は何でもないものであつて自分は愉快であるから決して心を痛めないで呉れと信じさせるのでした。夫が來ないと彼女は突然怖れを覺え夫の身を氣づかひ始め、何を彼がやつて居るか訊きに寄越すことがありました。そして何うして馬を用意することを命じたのか、何處へ乗り出すつもりか、氣分が悪くはないか、愉快であるかそれとも退屈であるか、何んな事を話してゐたか、そんなやうな事を下女

の口を通して知りました。彼の事業や仕事について自分自から彼と話すことは彼女に出来なかつたらしいのです。若し彼が何かのことで、彼女に忠告するか、頼みごとでもすると、彼の言ふことに深く耳を傾け、怯えて、まるで女奴隷のやうでした。彼女は自分の身の邊りのもの、道具だとか本だとか、何かの手藝品とかを彼に賞められるのが大好きでした。彼女は賞められるのを自慢してゐて、すぐに幸福になつて了ふのでした。彼が不意に（滅多にありませんでしたが）二つになる子供達を可愛がつてやらうと考へる事があると、彼女の喜びは盡きないのでした。彼女は顔の表情を變へて幸福で輝き、この瞬間は夫の眼の前で自分の悦びに酔ひ過ぎることさへあつたのです。例へば彼女はすつかり大膽になつて、彼が呼ばないのに、勿論臆病さうな震え聲でしたが、自分が覺えた新しい曲を聞くやうに、或は何かの本について意見を聞かして呉れるやうに、或は其日彼に特別な印象を與へた作家の頁を切らして呉れるやうに言ひました。折々夫は温順しく彼女の願をかへてやり、その上まるで甘やかされた子供に對して早くから意地悪く其の無邪氣さを苦しめるのにつれて、珍しい氣まぐれを退けたくないから頼笑んでやるといふ工合に彼女に頼笑みしました。けれどもこの微笑、此の傲慢な寛大さ、二人の間の不平等、こんなものが、私の心のどん底まで反感を興さしたのは——何故か知らないのです。私は何も言はないでそれに堪え、尤子供らしい好奇心をもつて、子供にあるまじい嚴格な考へをもつて、ひたすら二人を見守つてゐたのです。ある時、彼が心ならずも或る事を思ひ出したらしいのを私は認めました。彼はそれを押へることが出来ず心ならずも、壓しつけられるやうな、怖しい斷ち切れない何ものかを突然思ひ出

しましたが、直ぐ様寛大な微笑が彼の顔から消え失せ、彼の眼はすぐ震えてゐる妻に凝乎と注がれました。私がブル／＼震え、今でも認めてゐますが、それが私に注がれたのであつたら恐らく我慢出来ないだらうと思はれるやうな憐憫がその眼に含められてありました。此の瞬間にアレクサンドラ・ミハイロウヅナの顔から喜びが消え失せました。音楽や讀書は止められました。彼女は蒼ざめました。我慢して黙り込みました。氣拙い瞬間、遺潮ない瞬間が這人つて来て、時とするとこれが永く延びるので、お終ひに夫がその瞬間を破るのです。彼は胸の悶えと動搖に堪へ兼ねたかのやうに椅子から立上り、嚴ついに沈黙のまま部屋の中を彼方此方歩いてゐましたが、妻に手を與へて深い溜息を吐きました。そして眼に見えるやうな感動をもつて、妻を慰めようといふ望みを現はしてゐる切れ／＼の言葉を三つ四つ語りながら部屋から出て行きました。するとアレクサンドラ・ミハイロウヅナは涙に暮れるか、怖しい永い憂愁に沈むのです。夕方になると彼は彼女にお詫びしながら子供に向つてするやうに、彼女に十字を切り祝福することがよくありましたが、彼女は感謝の涙と信仰とをもつて後の祝福を受けるのでした。けれども私達の家で起つた二三の夕方のことを忘れることは出来ないのです（まる八年の間に——二三遍でそれより多くはありませんでした）其のやうな時アレクサンドラ・ミハイロウヅナはすつかり様子が變つたのでした。夫に對する何時もの謙遜と信仰の代りに、何かの怒り、何かの怨みが、いつもは温順しい彼女の顔に反映しました。まる一時間ばかり雷雨になりさうな様子になることがありました。夫は何時より餘計に黙り込んで益々荒々しく嚴しくなるのでした。たうとう哀れな女の病んだ

心臓に堪へることが出来なくなつたのです。切なさに堪へられなくなつたやうな聲で話を始めるのでしたが、初めは切れ／＼の連絡のない、すべてが何かを當て擦つた、酷い言ひ落しのあるものでしたが後になると胸の悲しみに堪え兼ねるものやうにワツと泣き出して、それに怒り、罵り、怨み、絶望といふものの破裂が次ぎました。——まるで彼女が病的な危機に落ち込んだやうでした。その時、この夫が何ういふ工合にそれを忍んだか、何ういふ態度をもつて彼女を柔らげて彼女の手に接吻した上に彼女と共に泣き出して了つたかは、注意しなければならぬことです。さうなると彼女はふつと我に返つて良心が自らを罵り、悪いことをしたと悟つたかのやうでした。夫の涙が彼女を掻き亂して、彼女は絶望の餘りに手を握りしめ、拳撃するやうに泣きながら、彼の足元に身を投げて許を乞ひましたが、それは許されませんでした。けれども彼女の良心の苦しみや、許しを求めぬ涙と祈りとは、永久につづいて行つたので、まだ其の上にもまる一ヶ月といふもの彼の前に出るともつと／＼苦しむやうになつたのでした。此の非難と罵倒が私にはさつぱり判らなかつたので、此ういふ場合には此の私を部屋から出して了ふのでした。何時も手際よく行きませんでした。さうやつても私に隠せ終はすことは出来なかつたのです。私は觀察し、認識し、推量して、これについては何か秘密があるので、傷ついた心臓が思ひがけなく破れるといふのは一通りのことでなく神經的の危機であつて、夫が何時も苦い顔をしてゐるのは意味のないことではなく、彼の哀れな病みついた妻に對する憐憫が二重の意味を持つてゐるのも何か曰くがあるので、また夫の前に出た時、彼女が何時も臆病でをど／＼してゐるのも、夫の前では氣にも出さうとしなかつた

謙遜な奇妙な愛も、それからこの孤獨も、この僧院のやうな生活も、夫が席についた時に彼女の顔が赤らんだり、突然に死のやうに蒼白になつたりするのにも何か譯があるらしい、と言ふやうな暗い疑ひが、獨りで私の中に生れて來ました。

けれども夫との此うした場面はほんとに少かつたし、私達の生活は非常に單調なもので、私は彼女を餘り近く觀察し過ぎたし、其の中に私が非常に速く成熟して、例へそれが無意識で私の觀察から抽象されたものであつたにしろ、兎に角澤山の新しいものが私の中に眼醒め始めたので、私は遂ひに此の生活、私を取巻いてゐる是等の習慣に馴れました。私は、勿論、時とするとアレクサンドラ・ミハイロウナを見て考へることが出來ないことが有りましたが、私の考へは其の間何うとも決まらないのでした。私はいへば彼女を強く愛し彼女の悩みを尊重してゐたので、自分の好奇心で彼女の悶えた心を掻き亂すことを怖れてゐました。彼女は私を理解してゐて、彼女に私が愛着してゐるに對して感謝しようとしてゐることが何邊か有りました！ 或る時は私の心配に氣がつくと涙を通して微笑むことが度々あつたし、或るときは自分が始終涙を流してゐるといふ事で冗談を彼女の口から言ひ出したり、時とすると彼女は私に向つて、突然此う物語り始めるのでした。自分は非常に満足してゐるし、ほんとに幸ひであること、自分に對して皆は善良であること、自分の知つてゐる人は皆今まで非常に自分を愛してゐること、ピョートル、アレクサンドロウキチが、自分の心の悶えについて、はてしなく悩んでゐるのが自分を苦しめてゐること、それに自分は何うかと言ふにそれとは反對に眞實に幸福なのだ、ほんとうに幸福なのだ！

此う言つて彼女は私を抱擁しましたが、此う言ふことが出来るならば、私の心臓が彼女に對する同情で痛みを覺えた位、彼女は深く感動し、愛でもつて顔が輝いたのでした。

彼女の顔立ちは何うしても私の記憶から拭き去られないのです。端正な顔立ちで、瘦形で蒼白といふ點が彼女の美が持つてゐる凛とした魅力をすつと増したやうに思はれ、滑らかに下の方へ撫でつけられた濃い黒い髪は頬の邊りに荒々しい、嚴つい影を投げつけてゐました。けれども彼女の大きな、子供のやうに明るい空色の瞳の優しい眼差は、それとは反對に堪らなくなつて、見る人を刺したのでした。その瞳の中には非常に純な、オドロ／＼した、まるで一寸した感動や僅かばかりの心臓の發作、つまり瞬間的の悦びや微かな静かな悲しみを怖れてゐるやうな弱々しいものが折々映るのでした。そして幸福な安らかな瞬間、心を射抜くやうなこの眼差の中に、晝のやうに明るく輝かしく凝乎と落付いてゐるものがあつたのです。空のやうに青い瞳は愛に輝いてゐて、甘えるやうに瞞め、その中には、皆に對してつつましい、愛を求めるやうな、祈るやうな深い同情の感情がいつも映つてゐました——人々は彼女に反抗しないで奴隷のやうに心を寄せ、彼女から清らかさと、魂の安らかさと、優しさと、愛とを受けたのです。そつといふ風で、若しこの青い空の眼を見つめたならば、何時間でも甘い瞑想に身を浸すやうになり、魂は段々とゆるやかに安らかに成りゆき、靜かな水の面を見るやうに彼女の眼には大きな空の圓天井が映るのを感じたでせう。よくある事でしたが——興奮のために彼女の顔に紅味が差して、胸が波打つと、彼女の眼は稻妻のやうに輝き火花が散るやうで、今では彼を活々とさせてゐる美しい清らかな

焰を純潔にも守つてゐた彼女の魂は、すべて眼に現はれてゐるやうに思はれたのです。この瞬間彼女は靈感を受けたかのやうでした。此んな不意に興奮するといふこと、また靜かな、臆病な心の状態から、耀いた、高調した興奮へ、清らかな烈しい熱中へ移り變るといふことは、同時にまたそれだけ純真な、子供のやうに早い、子供のやうな信仰があるので、怖らく畫家は耀かしい此ういふ歡喜の瞬間を觀察し、此の興奮した顔を白布に移すために半生を投出すかも知れなかつたのでした。此の家に來た最初の日から、私に對してさへも孤獨でゐたがつて居るのを認めたのです。其の時分彼女に子供が一人居ましたが、一年の間彼女は其の母であつたのです。でも私はどうしても彼女の娘で、私と彼女との相違を何うすることも出来なかつたのでした。彼女は何といふ熱心をもつて私の養育に従つたことせう！ マダム・レオタールが彼女を見て仕方なしに笑つた位、初めの程は焦燥しかつたので、お互ひに理解出来なかつたのでした。例へば自分で私に何か教へやうとすると、一時に素晴しく澤山のことを教へ込まうとするので、本當に私のためになるものよりも、寧ろ焦慮や熱心や優しい氣短かさの方が先き立つのでした。先づ自分の分らなさでやきもきました。けれどもアレクサンドラ・ミハイロヴナが初めの失敗に懲りないで、マダム・レオタールの方法に反對して大膽に自分を主張しましたが、私達は笑つてまたやり直したのです。彼女達は笑ひながら争ひましたが、私の新しい養育者は、私と一緒に手搜りで眞實の道を發見するだらうといふこと、無味乾燥な智識を頭に詰め込むことは下らないといふこと、旨く行くか否かは私の本能的の理解と、私に自由意志を起させる腕前にそつくり懸つてゐるといふことを確信して、すべ

ての方法に反對して卒直に自分の考へを主張しました——それは彼女の言ふ通りでした。それはすつかり勝つたからです。先づ第一番に先生、生徒といふ役割を完全に取り除けて、私達は二人の友達のやうに勉強したので、兎もすると企みがあるとは氣附かないで私がアレクサンドラ・ミハイロヴナに教へてやるやうに見えることが起りました。で私達の間にはよく争ひが起るのでしたが、何の位私が解つてゐるか、アレクサンドラ・ミハイロヴナが私を本當の道に導いて行くのは大したものではないといふことを證明しやうとして私は赤くなつて熱しました。けれども私達が眞理に到着して見ると、アレクサンドラ・ミハイロヴナの巧さを證據立ててゐるのを直ぐさま悟るのでしたが、彼女が私について彼此苦勞し私の身のために斯うして犠牲になつて呉れる何時間といふものを思つて、私は課業が終る度毎に彼女の頸に抱きついて堅く抱き締めるのでした。私の敏感さが彼女を驚かし感動させて摩胡付かせた程です。彼女は私の口から私の過去を聴きたいので好奇心をもつて今までの事を訊ね始めましたが、私の物語が、私の物語がすむと彼女は私に對して益々優しく眞面目になるのが常でした——眞面目、それは何故かといふに私は尊敬に似た憐憫を彼女に起させたと同時に不幸な自分の子供時代でもつて彼女に暗示を與へたからなのです。私の告白がすむと長い話に移るのが普通で、その話で彼女は私の過去に解釋を加へるのですが、それで私は實際にまた昔のやうな氣持になり新たに得るところのものが少くありませんでした。マダム・レオタールはこの會話を眞面目過ぎるとよく思ひましたが、我知らず流れる私の涙を見て、これは何うしても考へものだと思つてゐました。ところが私は其の反對だと思つてゐたの

で、といふのは此の課業の後には、まるで今まで私の運命に不幸なんといふものは無かつたかのやうに軽やかに愉快になつたからです。その上、アレクサンドラ・ミハイロヴナが日を追ふて段々と自己を愛するやうにさせたのに對して私は非常に感謝してゐたのです。此ういふ工合で昔、心の中に起つて居た嵐の前のやうな動搖が穩かになり、調和されて行き、堪へがたい苦痛に癒ついた私の小さな心臓は横に抛けて、何處から此の苦しみが來るのか判らずに苦痛を歎くに到つたことに、マダム・レオタールは思ひ及ばなかつたのです。

夜が明けると、先づ私達は子供部屋にゐる彼女の子供の傍で落ち合つて、子供を起こして着物を着せ、身なりを整へ、乳を飲ませ、話すことを教へるのが日課でした。やがて私達は子供を其の儘にして置いて仕事にかゝりました。色んなものを勉強しましたが、何麼學問を勉強したか、神様が御存じです。悉べてのものをやりましたが、同時に、またこれと言つて名付ける程のものでもありませんでした。私達は讀むだりお互ひにその印象を物語つたり、音楽するために本を抛り出したりして數時間が知らぬ間に飛び去るのでした。夕方時分に、アレクサンドラ・ミハイロヴナの友達なるBがよく見えたし、マダム・レオタールもやつて來ました。私達は藝術につき、人生に關し(人生については私達のサークルではたゞ人に聞いて知つて居ただけでした)現實について、理想について、過去や未來について、熱心な烈しい會話を始めて、夜半過ぎまで長居することが珍しくありませんでした。私は緊張して耳を澄まして皆と一緒に興奮し、笑ひ、又は刺激され、そこで私の父や私の子供時代に關したことはみんな詳しく聞き知つたの

です。こうして私は成長して、私のために先生達が備はれましたが、アレクサンドラ・ミハイロヴナが居なければ私は何も覺えなかつたでせう。地理の先生と一緒にゐるときは地圖の中の町や川を捜しながら何も眼に入らなかつたのです。アレクサンドラ・ミハイロヴナと一緒にゐると、此ういふ旅行に出かけ、此ういふ地方を廻り、此のやうに珍しいものを見、悦ばしい夢のやうな時間を過して、彼女の讀んで了つた本を何うしても手に入れることが出來ない位に二人の夢中になつて、それは、ほんとに酷かつたのです。で私達は新しい本に取りかゝらなければならなくなりました。地理の先生に本當のことを言はなければならぬのでしたが、彼れこれ言へるやうになつたのです。彼は最後まで私に向つて完全に附けられた經緯度區別、その下にある何かの小さな町や其の中に書き入れた千入、百人、更に十人宛の住民について智識の卓越を保ちました。歴史の先生には矢張り正確にお金を拂ひました。けれども彼が出て行つてからアレクサンドラ・ミハイロヴナと一緒に歴史を自己流に讀んで折々夜更まで讀んでゐることもありました。といふより寧ろアレクサンドラ・ミハイロヴナが頼んだと云つた方が良ささうなので、といふのは彼女が檢べてゐたからです。この讀書後より以上に面白く思つたことはないのです。私達二人は自分達が英雄であるかのやうに興奮しましたが、勿論縫物最中でも縫物よりも讀む方が多い位でした。この外にアレクサンドラ・ミハイロヴナは話しが上手で、私達が讀んだことをみんなさも自分の身に起つた事のやうに話しましたが、私達が此んなに夢中になつて夜中過ぎまで起きてゐるのは大方笑ふ可き事として捨て置けばいいので、私は——嬰兒だし、彼女は——一生を苦しくも堪へて

来た、傷づいた心臓でした彼女は私の傍に居て氣を休めて居るらしいのを私は知つてゐたのです。私ともすると彼女を見ては不思議にも思ひに沈んだこと、想像したこと、何よりも生活を始めようとしたこと、既に早、人生の色々なるものを推理したのを思ひ出します。

やがて私は満十三歳になりました。さうかうして居る中にアレクサンドラ・ミハイロウツナの健康がますます不可なくなつて来ました。彼女は怒りつぽくなつて、何うにもならない彼女の發作は執拗になりました。夫の訪問は足繁くなつて来て、彼女の傍に坐り通しましたが、怖らく以前のやうに殆んど黙つた切りでいよ／＼苦い顔をしてゐたに違ひないのです。彼女の運命はもつと強く／＼私を捉へ始めました。子供時代が過ぎ去つて、私は新しい印象、新しい觀察、新しい愛着、新しい推理といふものが澤山心の中に形づくられたので、この家庭に横はつてゐた謎が絶え間なく私を苦しめ始めました。この謎で何か思ひ出したやうに思はれる瞬間がありました。さうでない時には虚心平氣になつたり、冷淡になつたり、もつと進んで悲しくなつたりして、一つの問題さへも解決出来ぬで自分の好奇心を忘れて了ふのでした。ともすると——これはその中に段々餘計に起つて来ました。——尤獨りになつて考へやうとして、何時も考へようとして奇妙な方法をとりました。といふのは其の時分は、まだ私が兩親の膝元で暮してゐたあの時分によく似てゐたのです。あの時は何よりも先づ父と一緒になつてまる一年考へたり、空想を描いたり、自分のゐる隅つこから神様の世界を折々見たり、それで仕舞ひには自分の創造した空想の亡霊の中ですつかり物狂はしくなつたのでした。昔と違つた點といへば、今はもう堪え性が

無くならず、惱みはずつと大きくなり、新しい無意識の發作は多くなり、何とかして見たい渴望は強くなつて来たので、それがため以前のやうに一つ事に凝るといふことが出来なくなつたのです。アレクサンドラ・ミハイロウツナの方では前よりも私を避けてゐるやうでした。私は子供でなくなつたので、私は色んなことを訊ね過ぎ、彼女が眼を伏せる程彼女を見つめることが間々あつたのです。不思議な時代でした。私は彼女の涙を見るのが出来なかつたし、彼女の方を見てゐると、涙が私の頬を傳ふことがよくありました。私は彼女の頸に身を投げて抱擁しました。何うして彼女が私に答へることが出来ませうか？ 彼女に取つて辛いことだと感じたのです。けれども或る時——それは重苦しい、悲しい時でした——彼女自身が何か絶望してゐるかのやうに、私に同感を求めるかのやうに、自分孤獨に堪られなにかのやうに、私が彼女を既に理解してゐるかのやうに、さうして私が彼女と共に憫んでゐるかのやうに、彼女は拘縛るやうにして私を抱きました。けれどもやはり私達の間には秘密が残つてゐましたが、これは明らかなきことで、私は其んな時は自分の方で彼女から避けてゐました。彼女と一緒にゐるのが苦しかつたので。そればかりでなく私達が一致し合ふものが少なくなつて、たゞ音楽があるだけでした。彼女には音楽があるだけでしたけれども、音楽は醫者から止められて居たのでした。本は？ ところがこゝに何よりも苦しいことがあつたのです。彼女は何うして私と讀むべきかを何うしても知らなかつたので私達が第一頁で止つたかもしれないと言ふまでもありません。といふのは一言一句が當てつ擦りで、謎であつたでせうから。ところが此の時、運命が思ひがけなくも私の生活を極端に不思議な風に變

へて了つたのです。私の注意、私の感覺、心臓、頭腦——すべてが一時に緊張して、狂熱と言つても好い程の力をもつて、まつたく待ち設けなかつた外の活動へ向かひ出したのです。そして私自身は知らない中に新しい世界に拉れ込まれて、振返へることも、觀察することも、考へることもしなかつたので、此の事を感じたばかりで私は死んだでせう。けれども誘惑は恐怖よりも強かつたので、私は眼を閉ぢて無暗に進んで行つたのです。として私を苦しめその解決を眞剣に求めて、効のなかつた現實が私を際しもなく惹きつけたのです。さて其れが何麼ものであり何うして起つたかそれは此うです。

食堂には三つの出口がありました。一つは大きな部屋に通じ一つは私の部屋と子供部屋とに通じ、一つは圖書室に通じて居ました。圖書室からは、も一つ出入口があつて、それはビョートル、アレクサンドロウキチの助手や平常は寫字生や、以前彼の秘書や代理人を勤めてゐたことのある助手などが大抵仕事する時這入つてゐる、その事務室を間に挟んで私の部屋と離れてゐたのです。本棚や書庫の鍵は彼が持つてゐたのです。或る時、丁度彼の留守中食事がすんでからでした。その鍵を床の上で見つけました。私は好奇心に驅られて、拾ひ物を取り上げて、圖書室へ這入りました。見ると随分大きな、明るい部屋で、周囲には本がぎつしり詰つた大きな本棚が置いてありました。本は素晴しく澤山あつて、その中の大部分は先祖からビョートル、アレクサンドロウキチに残されたもので、後の残りはアレクサンドラ・ミハイロヴナが集めたので彼女は絶えず本を買つてました。これまで私に讀ませた本は嚴密に檢閲したものでしたから、私に對して色んな事を禁止してゐることや、私に對して少からず秘密なことがあ

るといふことを譯なく見抜いてゐました。さういふ譯で私は、堪え切れない好奇心をもつて、怖しさと、何かしら或る無責任な感じと發作に罹つて、第一番目の棚を開き、先づ一冊の本を抜き取つたのです。此の棚はみんな小説でした。私は次ぎ／＼に棚を開いて自分の部屋に本を持ち去りましたが、私の生活に大改革が遂げられたことを豫感したやうな工合で、不思議な気分になり、心臓が鼓動したり靜まつたりしてゐました。自分の部屋に這入つて私は扉を閉めて小説を開きました。けれども私は讀む譯に行かなかつたので、それは別な心配があつたからです。誰にも氣附かれないやうに私が何の本でも何時でも讀めるやうにするがために、初から正しく整頓し、書庫の管理をそっくり自分のものにする必要があつたのです。で私は自分の喜びの次の好機會まで延して置いて本を元の所に返し、鍵の方は手許に隠して置いたのです。私が鍵を隠した——この事は生れて始めての悪い行であつたのです。私は結果を待つてゐましたが非常に旨く行きました。ビョートル、アレクサンドロウキチの秘書と助手とは夕方中かかつて鍵を捜すし、夜になると蠟燭を持つて床を捜しましたが、とう／＼翌日錠前屋を呼ぶ事になり、錠前屋は錠の型を取つて新しく鍵を拵へました。それで濟んだのですが、鍵の紛失については誰れも其れ以上には噂する者はありませんでした。私は皆から疑をかけられる怖れは少しもないこととすつかり信じ切つて、一週間も経つか経たぬに圖書室に這つたので、其の位用心深く巧妙に事を運んだ譯です。初め私は秘書の居ない留守を見計つてゐました。が後になつて食堂から歸りに立寄るようになりまして。といふのはビョートル、アレクサンドロウキチの秘書は自分のポケットに鍵を入れて置くだけであつて、其

の上に本に關することまでは容喙しなかつたので、本のある部屋に入つて見るといふことなどはしなかつたのでした。

私は熱心に読み始めましたが間もなく讀書が私をすつかり惹きつけました。私の新しい要求、近頃の傾向、まだ明瞭しない私の年若い發作、私の魂の中で焦燥し動搖しながら育まれたもの、餘り早熟だつた私の心が時期を待たないで呼び醒ましたもの、すべて此等のものがまるで新しい食物に満足し切つたかのやうに、本當の道を發見したかのやうに、思ひがけなく永久に別れなければならなくなつた其他のものを遠ざけたのでした。今まで私を取巻いてゐた全世界を忘れて了つた位に私の心と頭は魅され、空想は果てしなく擴げられたのです。運命そのものは私の心から憧憬れ、日夜その事ばかり想つてゐた新しい生活への途中で私を停めたやうに思はれて、先づ私を得體の知れない道へ追ひやらうとして、心をそよるやうなパノラマや酔ふやうな輝かしい光景をこれが未來だと私に示しながら上の方へ導きました。こんなことを本で讀んだ時から此のやうな未來の中に暮し、空想や、希望や、情熱の發作や、若い魂の甘い感動の中で過すよう私は運命づけられてゐたのです。私は手當り次第、何の選擇もないで讀み始めましたが、運命は私を護つて呉れたのです。私が今まで知り得てゐたところのものは、非常に上品な、非常に嚴格なものであつたために、最早私を何か畏のあるやうな汚はしい頁が私を誘惑することが出来なかつたのでした。私の子供のやうな本能、私の早熟、それに私の過去のあらゆるものが私を救つたのでした。最早私の自覺といふものが私のすべての過去の生活を私の爲めに照らすやうに思はれま

した。まづたく私が讀んだ頁は何れも皆親しみのあるもので、前に其通り暮したやうでもあり、すべて此れ等の情熱、思ひがけない形を取り、蠱惑するやうな繪になつて私の前に展開されたすべての生活は既に私が試みたものでした。私が讀んだすべての本の中では人生の重なる法則から流れ出て、人間の生活を支配し、救ひと保護と幸福の源であるところの、運命の法則と魂の葛藤とを人間化してあつたので、此れを讀んだ時に、果して私が本當に現實を忘れ、現實に疎くなる位に惹きつけられなかつたでせうか。私が疑つたこの法則こそは、私が有りたけの力で、ある自分を守る感情によつて私の心の内に呼び醒まされた本能で、出来る限り、推量しようと苦しんだそれなのです。何者か私に前もつて報知し、前もつて警戒したかのやうです。何ものか豫言するやうに私の心を壓しつけるし、日が經つて従つて私の心の裡の希望はますます堅くなつて行つたのですが一方ではこれと同時に、私が今まで讀んだ本の中で、すべての力、獨創的の藝術、すべての魅惑する詩によつて毎日のやうに私を刺激したその生活や未來に向つての突進する力がいよ／＼強くなつて行くのでした。さつき私が言つた通り、私の幻影は私の意久地なさを支配し過ぎてゐたので、私は本當の處大膽になれるのは空想の上だけで、事實に於ては、未來の前に立つとまづたく臆病でした。それで前もつて自分と妥協してゐる間は、空想の世界、幻影の世界に無意識の中に満足して居れたのです。その空想の世界では、私が唯一の支配者であり、たゞ蠱惑と、悦びと、眞の不幸とがあるばかりで、若しも許されるならば其の不幸といふものが受身の役割を演じ、甘い對照をなすために、また運命が思ひがけなく、私の空想した面白い小説の幸福な結末の方へ變

はるがために一時的に必要な役割を演ずるのでした。其の時分の私の氣分を今では此う解釋してゐるのです。

此うした生活、幻影の生活、私を取巻いてゐる悉べてから途徹もなくかけ放れた生活が全る三年も續けて行けたのでした！

この生活は私の秘密だつたので、三年経つてからも尙私は此の事が不意に知れたら私に取つて怖るべき事か何うかを知らなかつたのです。この三年間に私が過して來たものは私に取つて餘りに身に近いものでした。私はすべて此れ等の幻影に力強く惹きつけられたので、遂に、例へ誰であつたにしろ何心なく私の心を覗いたかもしれない人々の眼差を見て苦しんだり怖れたりするまでになつて了つたのです。そればかりでなく、私達の一家はみんな社會から離れて孤獨に修道院のやうな静けさの中で暮して居たので、仕方なく自己のことをのみ考へ、自己を監禁しなければならなかつたのでした。やはり私に取つてもさうでした。この三年間に私の周圍はちつとも改良されないうやつぱり元々通りであつたのです。苦しい單調——それは、今でもさう思ひますが、若し秘密な眼に見えぬ働きが私を惹きつけなかつたならば——その單調が女の心を惱まし、私をこの物憂けな悲しい環境から、見知らない、動搖した道へ怖らく不幸な道へ私を投げ出したかも知れない、さうしたものが矢張り私達を支配してゐました。マダム・レオタールは老ひ込んで、自分の部屋にしよつちゆ、閉ぢ籠つてゐました。子供はまだいとけなかつたのです。Bは單調で、アレクサンドラ・ミハイロヴナの夫は——前々通り嚴格で近寄り難く、自分に

閉ぢこもつてゐました。そして彼と妻との間には矢張りあの秘密な關係が結ばれてゐたので、それが私の前に脅かすやうな嚴つい姿でいよ／＼強く顯はれ始め私はアレクサンドラ・ミハイロヴナの身の上、を怖れることが酷くなり始めました。慰安のない、華かさのない彼女の生活は、明らかに私の眼の中に消え、彼女の健康は日に増し悪くなるばかりでした。何だかある絶望が彼女の心に這入り込んだやうで、何か得體の知れない重荷が彼女にのしか、つて居るのは明らかで、それは彼女自身も口では言ふことの出来ない、何か怖しい、そしてまた彼女にも判らないものであつて、彼女は自分の運命づけられた生涯が逃れることの出来ない十字架と考へてゐたのでした。彼女の心臓は遺瀨ない悲しみからして、頑になつて了つて、彼女の考へは別な、暗い、憂鬱な傾向を取るに到つたのです。或る點が取り別け驚かしたのです。それは私が年を取れば取る程彼女が私を避けたがつてゐるらしかつたので、彼女が私に對して隠し立てするといふことが、何か堪へがたい悲哀に變つて行つたのです。彼女の邪魔をしたらしい瞬間は私を嫌がりさへした程でした。或るときは彼女の秘密好きな性格が染つたかのやうに、驚きながら殊更に彼女を避けやうと言ひました。三年の間に私が経験したものはみんな、また私の心に、幻想に、智識に、希望に、又は情熱的の喜悅に於て形作られたところのものはみんな——残りなく私の身に堅く残されました。若しお互ひに隠れ合ふとすれば、その後で私が彼女を日増し熱烈に愛してゐても怖らく、共鳴することはなかつた筈です。彼女が何の位私に愛着してゐたか、彼女が心に秘めて置いた愛の寶をいよつちゆ、私のために、空に費すことを何の位に誓つたか、そして私のために母とならう——といふ

約束を最後まで守ることを何の位、自分の心に誓つたか、今になつては涙なしにそれを思ひ出すことは出来ないのです。まったくです。特別な悲哀が折々彼女を私から引放して、何だか私のことを忘れたかのやうでした。それにまた彼女に私のことを思ひ出させないように努めてゐたので、私の十六といふ歳は誰も氣附かない内に過ぎ去つて了つたのです。けれどもずつと明瞭した意識に歸つて周囲を見まはした瞬間に、アレクサンドラ・ミハイロヴナは突然私のことであらうと始めました。彼女は堪り兼ねて課業や仕事ですんで私を部屋から自分の膝許に呼び寄せて、一日中私と離れないで何か私を探るやうに、色々質問したり。私の興奮や、願望やを推量し、明らかに私の歳や唯今の様子や未來の事に關して心配しながら、何かある尊敬をもつて、私を助けやうと待ちかまへて居たのです。けれども彼女は癖を改めてゐたので、時々は無邪氣過ぎると思はれる位に振舞ひました。で此んなことはみんな判り過ぎる位よく判りました。例へば、これは私が既に十六になつた時に起つたのですが、彼女は私の本を開いて私の發見してゐた事について質問して見て、私が十二歳の子供に向く子供染みた文章から脱け切らないのを讀んで思はず驚いたのです。私は何ういふ事か推量して彼女のやることを注意深く見守りました。全二週間彼女は私を試めし私の發達の程度、私の要求の程度を檢べたのです。つひに彼女はウォルター・スコットの小説を机の上に置くやうに極めました。これはずつと前に少くとも三遍位は通讀したものでした。初め彼女は其の印象を怖れるかのやうにびく／＼しながら私の印象に眼をつけてゐたのです。やがて私達の間に挾つてゐる私によく見えて居たこの氣拙さが消え去つて、私達二人は興奮して彼女の前

で隠す必要がなくなる程嬉しかつたのです！ 小説が終へると彼女は私を見て喜んでゐました。本を讀んでゐる時の私の注意と印象は確かに正當なものでした。彼女の眼から見ると私は餘りに發達し過ぎてゐたのです。此れに驚かされ喜んで彼女は私の教養といふことを喜びをもつて再び注意し始めました。彼女は此れ以來もう私と離れやうとしませんでした。これは彼女の思ふ通りには出来ないものでした。運命は其後間もなく私達を引離して二人の接近を邪魔しました。これが爲め、最初の發作、何時もの苦しみの發作が起り、それに續いて疎遠秘密、孤疑それから執拗といふものまでも起つたのでした。

けれども此ういふ時分にも私達の力の及ばない瞬間があつたのです。讀書、私達が取り交はした同情ある言葉、音樂——それに私達は我を忘れ程度を越して話し出す事がありました。其の後ではお互ひの間が氣拙くなるのでした。私達は考へ込みながら驚いた様子をし疑はしい好奇心をもつて眺め合ふのでした。お互ひに境といふものがあつて、其處まではお互ひに行くことが出来るので、其の境を越すとは越したくも出来ないのです。

ある黄昏前、私はアレクサンドラ・ミハイロヴナの書齋で呆然本を讀んでゐたのです。彼女はピアノの前に腰かけて、自分の一番好きな伊太利の曲を即興的に弾いてゐましたが、それが清らかな音律に變つて行つた時に私の心臓を突通したこの音樂に魅きつけられながら、臆病さうに、低い聲でその曲に跟いて口ずつみ始めました。間もなくすつかり魂を奪はれ立上つてピアノに近づきました。アレクサン

ドラ・ミハイローヴナは私の氣持を理解したといふ風で伴奏に變つて、愛を罩めて私の聲の節々を追ひました。私の聲の立派さに驚いてゐるらしかつたのです。今まで私は彼女に歌つて聞かせた事はなく、自分でさへも何んな聲を持つてゐるか殆んど知らなかつたのでした。今になつて二人は活氣づいたので、私は段々と聲を高めて行つたので伴奏の技巧を見てアレクサンドラ・ミハイローヴナを驚喜させたのを知つて益々燃えあがるエネルギーと情熱が湧いて來ました。やがて、歌は怖しい感激、怖しい力をもつて終つて、彼女は喜びの餘り私の兩手を掴んで嬉しげに私を見つめました。

「アンネタ！ まあ何といふ素晴らしい聲なんでせう！」彼女は言ひました。「おゝ！ 何うして私は知らなかつたんでせう！」

「私も、たつた今氣附いたばかりなの」私は喜びに有頂天になつて答へました。

「神は貴女を祝福するでせう、私の可愛い大事な子供！ この贈り物に對して神に感謝なさい。誰も知らない……あゝ、ほんとに、神様！」

不意の出來事で彼女はすつかり感動し、喜びの餘り夢中になつて了つて、何と言つて好いか、何んなに愛撫したら好いか知らないのです。これは暫くの間なかつた打解けたり、同情し合つたり、接近したりするあの場合の一つでした。一時間も経つとお祭りが來たやうに陽氣でした。直ぐさまBを呼びにやりました。Bの來るまでに、私が最もよく知つて居る別な曲を思ひ切つて演つたり新しい歌を歌つたりしました。すると悦しさにふるへました。私は失敗して初めの印象を傷けたくはなかつたのですが

直ぐさま私の聲が私を勢づけ救つて呉れました。私自身も聲の力に段々と驚かされて行つて、二度目の試みで悉べての疑ひは消滅して了つたのでした。堪へ切れない喜びの高調に達してアレクサンドラ・ミハイローヴナは子供や、子供の乳母までも、呼びにやり、仕舞ひにはすつかり惹きつけられて、いつもだつたら行かうと考へもしない書齋へ夫を呼び出しに行きました。ピョートル・アレクサンドロウキチは愛情を罩めてこの新しい事件に耳を傾けて、お目出度うを言つて教を受ける必要があると自分の口から言ひ出しました。有難い言葉で幸福にされたアレクサンドラ・ミハイローヴナは自分の身に何が起つたか知らないで彼の手に接吻しやうと身を投げました。とうとうBがやつて來ました。老人はすつかり悦んでゐました。彼は私を非常に愛してゐたので、私の父のことや昔のことを思ひ出し、私が彼の前で二三遍歌ひ終つた時に、眞面目な、心配さうな、何だか隠し立てしてゐるやうな顔付きでして、聲量のあふることには疑ひのない事だし、天才もあるだらうが勉強しなければならぬと説きました。思ひ浮んだやうに其の後で、アレクサンドラ・ミハイローヴナと二人で、初めの中から賞め過ぎるのは危険だと考へたのです。私には彼等が眼くばせしてゐるのや密々話してゐるのが判つたので、私の前で言つて居る二人の話はみんな卒直な不器用なものになつて了りました。歌を唄つた其の後で、二人は歌ふのを止めにかゝり殊更に私の缺點を大きくして認めやうと努めてゐる様子を見て、一晩中獨りで笑ひました。けれども長く我慢が出來ないで先づB自身が悦びを再び感じて、様子を變へました。Bが私を愛してゐることを何時だつて疑つたことはないのです。毎晩ほんとに親し味のある温い話で過ごしました。——Bは

二三の名高い聲樂家や藝術家の傳記を物語り、藝術家の歡喜、尊敬、感動をも附け加へて言ひました。その後で話が私の父の事に觸ると、話頭は私のこと、私の子供時代のこと、公爵のこと、何うして私と別れたか良く知らなかつた公爵の家庭のことに轉じたのです。アレクサンドラ・ミハイロヴナ自身も其の事については詳しくは知らなかつたので、何度となくモスクワに行つたお蔭で誰よりもBがよく知つてゐたのです。しかし此の邊で話が秘密に互り私に取つては謎のやうで、特に公爵に關係してゐる二三の事情が判らないのでした。アレクサンドラ・ミハイロヴナはカーチャについて話し出しましたが、Bはそれと言つてカーチャの事を云ふことが出来なかつたし、何か考へがあつてかカーチャのことには口を緘まうとしてゐるらしいのでした。それが私を驚かしました。私はカーチャのことを一寸も忘れなればかりでなく、彼女に對する昔の愛が消え去らなればかりでなく、もつと進んで日に増し強くなり、彼の身の上何か變つたことでも起つたかも知れないと思つたことは一度もなかつたのです。別離と、お互ひに何の自分の便りをしないで別々に暮してゐた永い年月と、私達の教養の相違、性格の相違とが今まで私に注意されないで残つてゐたのです。思つた通りカーチャは精神的には決して私を棄てなかつたのです。彼女は何時も私と住んでゐたやうなもので、取りわけすべての私の幻想、すべての私の小説や空想染みた出來事の中では何時も手と手を取り合つて一緒でした。私の讀んだ小説の女主人公として自分を想像すると、すぐさま仲よしの公爵令嬢が中へ這入つて來て邪魔して、小説は二つの部分に別れて了ひ、其の一つは言ふまでもなく作者を用捨なく奪つて自分で拵へたものでした。たうとう家中の

人々が相談して、私のために聲樂の教師を招聘することになり——Bは最も名高い立派な人を紹介しました。翌日私達の家に伊太利人のDがやつて來ましたが、私の唄ふのを聞いて自分の友人のBの意見を繰返しました。けれども其の時彼は、自分の家に通つて他の生徒と一緒に勉強した方がすつと利益であることや、さうしたら聲を發達させることが出来るし、張合ひもあり、見習ふことも出来るし、何處か隠れてゐるらしいすべての聲量の豊富さを發達させることが出来ますが、と説きました。アレキサンドラ・ミハイロヴナは承知しました。そして此の時から一週間に三遍づゝ朝の八時に女中を伴れて音樂學校に通ふやうになつたのです。

ここで私は私に強い影響を及ぼし、私に新しい一步を突然に始めさせた或る變つた事件を物語りませう。其時私は恰度十六の時で、年と共に或る譯の判らない冷淡な氣持が私の心の中に突然に近より、私にさへ判らないある堪へ切れない、物悲しい靜けさが私を訪れました。私の幻影や發作は不意に歇んで了ひ、空想は儚く消え去つたのです。冷めたい無關心が以前の經驗を経ない熱情に取つてかわりました。私があんなにまで愛してゐた人々が皆して拾ひ上げた私の天分にさへ興味を持たなかつたし、知らず知らず輕蔑さへもして居たのでした。私の心を惹くものとは一つもなく、アレクサンドラ・ミハイロヴナにも何だか冷めたい無關心を覺えるやうになつたのですが、これについては私は自分で悪いといふことを認めてゐたので、また認めない譯には行かなかつたのでした。この冷淡は原因のない悲哀となり思ひがけない涙に變るのでした。私は孤獨を求めてゐました。この奇妙な時分に、奇妙な機會が私の魂

のどん底までゆすぶり、此の静けさが力強い嵐となり、私の心臓は傷けられたのでした。それは此うして起つたのです。

VII

私は圖書室に這入つて（これは私に取つて永久に記憶すべき瞬間でせう）たゞ一つ読み差しにしてあつたウォルター、スコットの小説「聖ロマンの流れ」を手にしました。諷刺するやうな、捉へ所のない悲しみが恰も何かの豫感のやうに私を悩ましたことを覚えてゐます。私は泣きたかつたのです。部屋の中は沈みゆく太陽の斜めになつた光で、明るく耀いてゐて、高い窓や、光つた寄木細工の床の上にも濃く流れてゐました。四邊は森閑として隣り合つた部屋々々にも矢張り人の氣がありませんでした。ピョートル、アレクサンドロウキチは家にゐないし、アレクサンドラ・ミハイロウナは病らつてベットに臥せて居ました。事實私は泣いてゐたので、第二篇目を開いて、眼の前にチラつく断れ／＼の辭句に何か意味を見出さうと努めながらこれといふ的もなくくつて居たのです。手當り次第に本を開いて人が占ふやうに占つてゐたのでした。此ういふ瞬間がよくあるものです。それは、すべての智的、精神的の力といふものが、まあ突然に意識の炎がバツと閃めいたといふやうに病的に緊張して、その瞬間に豫感でもつて苦しめられてゐる者のやうに動搖してゐる人は何か豫言染みたものを夢見るものです。それで生活

の慾があり、自己の全存在が生活して行くことを要求し、非常に熱い、盲目の希望に燃えながら、未來が自分のあらゆる神祕や暗黒で心を呼び寄せるかのやうに、そしてたとへ雨や嵐があらうとも、たゞ生活の伴侶として生きて行かうとするのです。私の此の時分といふのは取りも直さず此ういふ風でした。私は偶然に開いた頁を読んで私の未來を占ふために本を開かうと思つて先づ本を閉ぢたのを思ひ出します。ところが本を開いて見ると、字が充満書込である四つ折りの書簡紙が眼につきましたが、それは此うして折られたまま、押しつぶされて數年の間、本の中に置かれて、そのまま忘れられたらしいのでした。で非常な好奇心をもつてこの見つけ出し物を調べ始めましたが、これは住所の書いてない、ただ二つの頭文字「O」が署名してある手紙でした。私の注意は二倍になつて、すつかり色の褪めた紙を開きましたが、紙は長い間頁と頁の間に挟まれてゐたので紙の大きさだけ白い場所が本の上に残つてゐました。手紙の折目は擦り切れて破れてゐましたが、これで見ると何遍も読み返しては大事に藏つてゐたらしいのです。インキの色は青く變色してゐたので——何でも毎程前に書かれたらしいのです！何うかした拍子に二三の言葉が私の眼に這入つて、私の心臓は期待でもつてドキ／＼し始めました。私は殊更讀むのを延ばさうとしてゐるやうに、胸を跳らせながら手紙を手先で廻はしてゐましたが、思ひ切つて開いて見ました。まあどうでせう！行の上に乾いた涙の痕があるぢやありませんか。紙の上に斑點が残り、其處だけ文字が涙で消えてゐました。これは誰の涙だらう？さうなると豫期でもつて恍惚しながら最初の頁を半分ほど読みますと、驚きの叫が胸から破れ出たのです。私は本を元の場所に返し